

北肥戦誌 卷之廿四

龍造寺隆信筑後在陣の事

隆信筑後在陣

隆信は天正七年の夏、彌、筑後國水田に在陣せられ、山下の蒲池志摩守鑑廣前名勘解由次官を攻めらるべしと、六月下旬、戸原兼松へ旗を進めらる。此時高良山の太祝部并に座主・鎮興・麟圭・良寛、各一山の衆徒を引連れ來陣す。又紀親祐といふ者、神文を捧げて龍造寺に相従ふ。爰に於て隆信鐘ヶ江將監を招かれしかども承引せず。然る間、人數を差向けられ、是を誅伐ありけり。野田九郎右衛門、將監を討取りぬ。隆信、夫より河崎出羽守鎮堯が伊駒野の城に差籠りしを、攻めらるとして軍兵を向けらる。

河崎出羽守落城の事

隆信伊駒野城を攻む

七月廿一日、龍造寺の軍兵、河崎出羽守鎮堯が伊駒野の城を攻む。先手は築河の蒲池鎮竝にて、大手の城戸を打破り散々に相戦ふ。時に城兵宗徒の者に、中園備前守を、佐嘉勢の中より成富十右衛門信安討取りけり。斯くて寄手の者共、一面に攻め登りて我れ先を諍ひ、城戸内へ込入りし間、城兵是を防ぎ難く、城主出羽守は、城を遁れて行方知れず落失せけり。是を延さむと、川崎但馬守・同名民部少輔・同上總介・同治部少輔・同彈正忠・同右馬助・同刑部大輔・忠見紀伊守・同藏人・同右衛門允・原兵部少輔・同彌太兵衛・藤木土佐守・樋口九郎左衛門・牛島金助・藺田右衛門佐・駒野九郎衛門・瀬戸口采女助・高山九郎次郎・原越後守以下悉く討死し、殘兵は皆落失せて城は則ち落ちけり。隆信夫より先づ本の水田へ馬を入れらる。

一、同八月上旬、同國猫尾の城主黒木兵庫助調實久或は鎮連、入道となり宗英と號す。高良山の新坊、龍造寺に相従ひ、黒木は嫡孫の四郎を質人とし、新坊は親類を質とし、各隆信の水田

同落城

龍造寺隆信筑後在陣の事

河崎出羽守落城の事

の陣に聘禮す。

黒木河崎星野由來附待宵侍従の事

黒木河崎
星野の由
來

抑、筑後國の住人黒木河崎星野といふは、元來一姓にて、世には稀なる調姓なり。其由緒を尋ね聞くに、中頃上妻郡河崎の庄黒木山の城に、藏人源助善といふ者あり。其先は薩摩のねぢめに住せし故、ねぢめの藏人とも申しけり。歌讀にて笛の上手なり。然るに此藏人、頃は人皇八十代高倉院の御宇嘉應年中、大番勤に上洛して内裏に候す。時にある日、管絃の御遊坐しけるに、俄に笛の役闕けたりしかば、公卿殿上人の中を選まれしかども、折節笛を吹く人なかりけり。其時徳大寺左大臣實定卿、彼助善が笛の器量を兼ねて能く知り給ひて、斯くと奏聞ありける間、さらば助善、殿上を免さるべしと勅定あつて、縁に祇候し笛を吹きけるに、堂上の笛の音より猶すみやかに其調子妙（妙）にして、御遊既に終りぬ。時に主上甚だ叡感あつて、則ち助善に調子の調の字を姓に下され、其上從五位下に補せられて、藏人大夫調助善と

ぞ召されける。藏人が時に取りての面目なり。然るに此助善在京の間、徳大寺殿殆んど情を加へられ、雨の夜（雪カ）情の朝月花の遊宴にも、常に昵近しけり。ある夜いたく夜更けて、徳大寺殿、助善を具せられ、相知り給ひける女の許へ立入り給ひしに、女は待侘びて、

待宵の侍
従

待つ宵に更け行く鐘のこゑ聞けばあかぬ別れの鳥はものかは

と打詠じて、希に逢ふ夜のかごとくも盡きなくて、其朝實定歸り給ひしに、餘りに別を惜み給ひ、助善を女の許に返して、盡さぬ名殘（名残）を託（かこ）れしに、藏人、女に向ひ一首の歌をぞ詠み侍りけり。

物かはと君がいひけむ鳥の音の今朝しも如何に戀しかるらむ

是よりして、助善を異名に、物かはの藏人と稱し、女をば待宵の侍従とぞ申しける。此女、元は阿波局とて高倉院の官女なり。ある時御惱ありしに、歌を詠みて叡慮に叶ひ、供御を上りて其御悦に侍従になされぬ。父は八幡の別當法印武内光清、母は建春門院の小大進なり。斯くて藏人、大番過ぎて歸國せしに、徳大寺殿、此年月の事を

黒木河崎星野由來附待宵侍従の事

思はれて、彼の待宵の侍従をぞ給はりける。藏人、面目身に餘り、彼の女を具して歸國しけり。此事隠なく、黒木山にありける本妻聞付け大に腹を立て、其京上臈め、何故に爰には來るらむ。片時も此所に叶ふまじと、下人共を相語らひ、城の麓の大河を境して、是を入れじとぞ防がせける。されども争か叶ふべき。藏人大夫打破りて、待宵と共に本城に入りけり。本妻彌々息卷しけれど叶はずして、竟に黒木川の深淵に身を投げてこそ失せにけり。其骸の寄る所に、則ち是を埋め、祠を立て今の世まで、築地御前といふなり。然るに侍従は、懐胎にて下りしが、程なく男子を産みけり。是は實定卿の子なりし故、定の字を實名に用ひて、黒木四郎調定善と號す。此子孫代々、黒木山猫尾城に居住しけり。其後侍従、又男子を産みけり。是は藏人が子なり。此子孫は星野・河崎と號し、星野は生葉郡星野妙見城に代々居住し、河崎は上妻郡川崎伊駒野の城に居住しけり。扱彼の築地御前、其後侍従腹の子孫に怨を遺して恨をなす。茲に因つて今に黒木の子孫より其靈魂を祭るなり。其祭には、彼の女の忌日、年に一度身を投げたりし淵に、粹すまといふ器に、假粧の具を入

れて水上より流すに、其所にて忽ち沈みて見えずとなり。黒木の子孫、今築河にあり。されば又待宵侍従下向の時、所願ありて高野山に一寺を建立し、講防坊カと號す。是れ調姓の菩提所なり。

或はいふ、藏人助善、元來高倉院北面の侍なり。六位を歴、歌人にて異名にやさ藏人といふ。或は助能。此藏人が子孫、今に徳大寺家に仕へて、則ち名字物加波と號す。黒木河内に於て古人語りていふ、黒木・川崎・星野三人の子、腹替なり。其内黒木は待宵腹にて、則ち高倉院の御子なり。仍て總領を繼ぐ。餘は本妻の子なりと。又いふ、黒木の家既二十七代、藏人助善より兵庫助實久に至る。天正の末大友家の爲め衰亡すと、待宵侍従、後に歸京しけるが、墓は八幡にあるなり。

筑前國脇山軍の事

去年天正六年の三月下旬、隆信、筑前國早良郡へ討入られし後、大友方の輩押へとして、城原の江上衆を、執行越前守頭人にて各番にして脇山の内野の砦に差置かれ

けり。然るに今年九月、大友持五箇城の内、小田部入道紹叱がありける荒平城・大鶴入道宗周が鷲岳城、何れも高山の嶮岨にて人馬不自由故、兵糧乏しくなりしに依り、竊に戸次入道道雪が居たりし立花城へいひ送り、兵糧を乞ひけり。道雪、さらば兵糧を差送るべし。さりながら其節は、必定内野より肥前衆打出でて是を押へむ間、其警固の爲め、我等も出張すべしと、道雪自身數千騎にて短兵急に取懸る。爰に敵勢に法師武者一人、味方の人數より二間計り先立ち馳せ來る。古賀右衛門允、是を見て走り懸つて引組み、押へて首を搔落し、今朝内野を出でし時、分捕は打捨とありし故、殊に隙なき時分にて、其頸をば田の畔の草の少しつまり之ある中に差入れてこそ置きにけれ。爰に又大鶴入道が一老半田能登守馳來るを、古賀が一男同名權右門馳せ合せ、能登守と引組み伏す。古賀は生年十六歳、半田は古兵なり。權右衛門危く見えける間、脇より加勢すべしと申す。父右衛門允、顔を振つて、いや〜若き者の初勝負に加勢をすれば、面々癖になるなりと、後に控へて見居たるに、運や強かりけむ。竟に權右衛門、上になりて半田が首をぞ取りにける。爰に是も大

脇山合戦

鶴が一族に土生宗觀入道、味方に抽んでて相戦ふ。江上の長臣枝吉長門守種量が二男大藏大輔、生年十八歳と名乗り馳寄せ槍を合せ、宗觀を突伏す。然る處を青柳九郎左衛門騷寄りて、大藏と二人にて其首を取にけり。斯くて雙方入亂れ火を散らし打戦ふに、敵の大將大鶴入道も討死す。時に江上衆の内にて立花城を出で、九月八日の早天、脇山へ來つて彼の兵糧を運ばせけり。然る間、小田部・大鶴も是を迎へむ爲め、則ち己々が城を出で、其勢數百人、路々を警衛す。時に執行越前守、早此事を聞付け、いざや打ち出で馳け散らさむと、あり合ふ輩を引率し、内野をば未だ夜も明けざるに打出づ。折節番所の者共、江上石見守定種を初め僅に七十三人なり。越前守下知していひけるは、敵に味方を比すれば九牛が一毛なり。常の如くに戦ひなば、千に一つも勝つことあるべからず。十死一生にして相戦ひ、若し打勝ちなば分捕は無益なり。頸は皆討捨たるべしといひ談じ、先づ見合の爲め、古賀右衛門允を差遣すに、走り歸りて告げけるは、時分はよく候。大鶴・小田部と見え、既に川を越え、其勢五六百計り來り候。又其後より立花勢と見え、遙に後れて凡

を三千程にて押來れり。彼の跡勢の續かぬ内に、早一戦を急がるべしと申す。古賀が見たりし如く、戸次入道は遙か後より打つて、人夫數百人にて兵糧を運送し、其勢三千計り押來りぬ。大鶴・小田部は其兵糧を迎取り、既に早良川を越えたり。執行越前守、大に勇み士卒を下知し、執行與三右衛門信直生年十歳進んで敵を討つ。江上石見守定種、二箇所の疵を蒙り、其外高木式部左衛門種周・江上左近允重松四郎右衛門・小柳清右衛門・今村右衛門佐大に討戦ひ、二時計りの合戦に難なく切勝つて、小田部・大鶴が者共を悉く追崩し、歴々數多討取り勝鬨を揚げて、早速内野へ引取りぬ。此由後陣に聞え、戸次道雪が立花勢三千計り内野近く取懸る。時に越前守、下知を加へ鐵炮十四五挺差出し、覺むる計りに打掛けさせ、軽く内野へ引入りけり。立花勢も其儘に立花へぞ歸りける。此合戦に、江上衆も十一人討死しけり。斯くて執行越前守以下城原の輩、計らず軍に打勝つて大に悦び、各、内野に歸陣せしに、生捕の者申しけるは、今朝の合戦に小田部・大鶴兩人ともに討取るなりと申しぬ。越前守、不審に思ひて是を改めしかども、首は元より討捨にとありしに依り

小田部大鶴
兩人討死

て、誰討取るとも知れざりけり。生捕の者申しけるは、さらば今朝討死の諸道具を見らるべしと申すの間、古賀右衛門允が討ちたりし法師武者の太刀を見せける處に、疑もなく小田部紹叱が定指なりと申しぬ。仍りて越前守、右衛門允に仔細を尋ねしに、右衛門允申しけるは、此法師武者、誰とは知らず。さりながら大將の紹叱ならば、總勢の眞先にはよも來るまじ。兎角皆々來られよ。彼の首を見るべしとて、件の戰場へ赴き草の中より入道の首を取出し、傍輩共を初め生捕の者へ見せけるに、紛もなき紹叱が首なりけり。又大鶴入道も討取られ、其首はありしかども、誰人の討ちたりとも分明には知れざりけり。斯くて執行越前守、彼の兩人の首を桶に入れ、註文を以て頃日隆信の筑後の陣所へ送りしかば、隆信限なく悦ばれ、彼の首共を則ち山下の城下に梟かられ、扱今度脇山にて戦功ありし輩、執行を初め各、褒美せらる。特に古賀右衛門允へは感狀を給はりけり。此競に蒲池鑑廣が山下の城、頓て落去すべしとぞ見えたりける。

或はいふ、右脇山の軍に、小田部入道は討たれず、遁れて荒平城に歸りしを、隆信、

筑後の陣より執行越前守を以て、同國飯場城主曲淵河内守に、小田部を討つべき旨申遣されけるに、房助申して曰く、御下知畏まり候へども、彼の入道は、某遁れぬ親類に候間、御免を蒙るべき由、越前守まで難澁しけり。されども隆信承引なし。仍りて曲淵、すべき様なく小田部を攻めむとす。紹叱是を聞き、却つて飯場へ取懸け相戦ひ、自身の槍合に紹叱敢なく房助に討たれぬ。其子十八郎は、房助が一人井上九郎左衛門に討取られたり。同年の冬の事なりと。小田部入道紹叱、元名民部輔鑑と號す。又いふ、小田部紹叱入道、曲淵河内守房助に討たれし由、戸次道雪聞付け腹を立て、飯場へ取懸け曲淵を攻めむとす。仍りて房助、隆信へ援兵を乞ひけり。隆信尤もなりとて、副島長門守に神代衆三瀬大藏以下を差副へ、曲淵に加勢せらる。其後戸次入道、竟に曲淵を攻めずと。

一、同九月、秋月長門守種實、原田越前入道了榮、草野中務大輔鎮永、筑紫上野介廣門各、龍造寺へ一味にて、戸次道雪、高橋紹雲と所々に於て合戦す。

赤星統家龍造寺に和を乞ふ附人質の事

同九月、隆信、筑後に在陣の中、肥後八代の赤星肥後守統家或はいふ掃部助。を味方に引付けらるべしと談合あり。鍋島信生の思慮を以て、彼の統家が知音に、同國甲斐外記といふ者を語らはれ、様々内談の上にて、下村生運を外記に差副へられ八代へ遣されけり。兩人、統家に對面して龍造寺へ一味あるべき由、色々賺しけれども統家更に承引せず。されども甲斐も下村も類なき辯才にて、竟に統家を雌伏させ、剩へ質人の事まで申調へけり。斯かりし程に、赤星今年十歳になりし男子を、龍造寺への質として彼の兩人へ相渡し、此子を深く頼むとて、太刀一腰を下村生運へぞ與へける。斯くて兩人赤星が兒を具して筑後の本陣へ歸り、隆信、信生へ是を披露しければ、大悦あつて外記へ禮謝あり。生運へは今度の忠賞として、後に肥後國竝惠村を給はりけり。

赤星統家
龍造寺に
和を乞ふ

或はいふ、赤星が人質の子、鯨江の無量寺に置かれしとなり。後に築河に之ある

か。或はいふ、赤星は熊庄の城に住すとも。

山下攻矢原三溝軍の事

隆信、彌、筑後に在陣あり。蒲池志摩守鑑廣が山下の城を攻めらるべしと、多勢を以て取詰めらる。然るに九月朔日、城兵矢原口へ討つて出づ。時に龍造寺の陣より納富能登守信理が一行進んで城兵と相戦ふ。中にも牛島兵部少輔・同新右衛門・河波大藏・於保左右衛門・伊東兵部允・右丸藤太左衛門以下、我れ先にと駆けて亂れ合ふ。一番槍は大塚勝右衛門にて、討ちつ討たれつ敵味方戦ひしに、城兵多く討たれ、寄手にも吉島平左衛門討死し、二度の懸に小宮左馬允討たれたり。斯かる處に寄手より横岳下野守・大塚伯耆守進んで、納富と一つになり、鍋島信生も來り加はりて城兵を追立てらる。此時鍋島の軍士の中より、松田權助・秀嶋新助大に打戦ふ。爰に於て城兵竟に引入りけり。斯くて翌二日に、隆信衆議を以て、水田より津留田に陣を移され、鍋島信生三溝に在陣あり。蒲池鎮並は津留田近所に陣を取り、田尻鑑種

矢原口合戦

は長田に陣す。

三溝合戦

一、同三日、城兵三溝へ討つて出で、鍋島信生の陣へ切懸り烈しく相戦ふ。時に鍋島の一行利を失ひ、信生の従弟鍋島權之助爲俊肥前守討死す。信生も、自身槍を取りて敵を拂はるゝ事千變萬化せり。是を見て早晚の松田權助・江副兵部左衛門・下村生連等、命を際に打戦ひし程に、城兵泳へず引入りけり。信生は彌、三溝に陣を居ゑらる。然る處に山下衆、松延表へ刈田仕るの由到來ありしかば、田尻鑑種は彼の在所邊差搦むべき由衆議ありて、田尻は早速堤村へ陣を易へ、數日在陣しけり。

或記にいふ、此時蒲池鑑廣、山下城を隆信に圍まれ、數百日の籠城に兵糧等乏しくなりし間、斯くては叶ふべからず、豊後へ隠符を送り大友へ加勢を乞ひけり。斯かりし程に、宗麟父子下知ありて、肥後衆には關山の天津山河内守・和仁の和仁丹波守以下、山下加勢として筑後へ打越え、松延表に陣取りて青田を刈取らす。然る間、筑後衆には三池・豊持・豊饒・齋藤・大鳥井、是に與して瀬高の

山下攻矢原三溝の事

庄に打出づ。之に依りて隆信、田尻鑑種を堤村に置いて、近邊の敵を差搦め、様々行を廻し焦しける程に、豊府の加勢に泳へ兼ね、頓て歸陣すと。非なり。凡そ似たることなり。

蒲池鑑廣龍造寺へ降參の事

蒲池志摩守鑑廣は、數月龍造寺に居城山下を圍まれしかども、究竟の要害といひ、其上頃日、豊後の大友勢、筑後へ來り星野草野・間注所と相戦ひ、生葉に陣して居たりしを、後援に頼み心強くありける處に、彼の大友勢、十一月初、豊後へ歸陣しけり。斯かりし間、鑑廣礪と力を落し、同月三日、終に龍造寺へ懇望しければ、事一著し、鑑廣自身隆信の陣所に來りて、降參の禮を遂げ、舍弟掃部助鎮行を質人とし、其上神文を送りけり。然る間隆信、同廿八日、山下の圍を解かれ、陣を高良山へ移さる。

隆信歸陣の事

蒲池鑑廣
龍造寺に
降參

既に隆信、山下の蒲池を從へられ、高良山に陣を居るられしに、秋月長門守種實・筑紫上野介廣門、見參の爲め高良山へ參向せらる。隆信對面あり、前後の軍事其外稍、物語あつて、兩將をぞ歸されける。斯くて此度、龍造寺に屬する面々には、筑後國に蒲池式部大輔鎮竝、同名志摩守鑑廣、子息式部大輔鎮運、兵庫頭家恒と改む。田尻中務大輔鑑種、同名山城入道宗達、西牟田左近大夫鎮豐、安武式部大輔家教、鐘ヶ江長門守家續、草野中務大輔鑑員、黒木兵庫入道宗榮、間注所治部大輔鑑景、豐饒美作守鎮連、戸原薩摩入道紹貞、三原左馬入道紹心、高良山の祝部鏡山安實、同山の座主鎮與、麟圭、良寛以下、此外落失せ跡を暗ます輩には記すに及ばず。又肥後國には城越前守親賢、親冬の子。合志常陸介親爲、小代前伊勢入道不二軒宗禪、子息伊勢守親傳、前名左近將監。隈部但馬守親永、子息式部大輔親泰、甲斐民部入道宗運、子息相模守親秀、赤星肥後守統家、大津山河内守、永野紀伊守、宇同、鹿子木以下なり。斯くて隆信、既に筑後一國、十郡。肥後半國を切從へ、同名上總介家晴、同肥後守信時を肥後の高瀬に、土肥出雲守家實を小代の城に差籠めて、大友・島津方の輩を押へ、鍋島信生を筑後の酒見の城に置いて當國を守ら

せられ、其身は十二月三日、高良山の陣を拂つて佐嘉龍造寺の城へ歸陣ありけり。

邊春親運龍造寺へ降參の事

今年の冬、肥後國邊春常陸守親運、龍造寺に至つて逆心之あるに依りて、隆信より是を誅伐有るべき由、筑後の蒲池鎮竝・田尻鑑種、肥後の小代宗禪・大津山河内守の許へ下知せられ、肥前より後藤伯耆守家信内田肥後守兼能入道・榮筋榮筋發向にて、各邊春へ取懸け切岸に於て防戰す。中にも大津山衆進み戰ひ、其手の人數宗徒の者共、手負死人若干なり。又小代入道は大手の口より取懸けて大に打戰ふ。城主邊春親運、當時は差怵へ防ぎ戰ひしか共、寄手の輩餘りに稠しく攻詰めしに依りて、城内難儀至極し、終に親運叶ひ難く龍造寺に到つて、懇望の上、降參一著して、寄手歸陣しけり。

邊春親運
隆信に降
參

神代長良養子の事

龍造寺隆信既に筑後肥後を征伐せられ武威を耀し、十二月初旬、佐嘉城へ歸陣あ

神代長良
犬法師丸
を養子と
す

り。是れ偏に一族鍋島信生の武功に由る所とぞ聞えし。然るに今年の冬、肥前國山内の領主神代刑部大輔長良の方より、老臣三瀬大藏を佐嘉へ遣し、隆信へ申されけるは、長良に家を繼ぐべき男子之なく候の間、御一族の中より養子を致し、娘に娶せ家を譲りたく候。但し存する仔細の候間、御名字の中よりは叶ひ難く候。鍋島飛驒守殿に子息餘多候は、其内を給はりたしとの使なり。信生頻に辭し申されけれども、深々の所望なりしかば、隆信、詞を加へられ、信生には此時未だ男子之なき故、舍弟小川武藏守信貫信後の三男犬法師丸が七歳になりしを、山内へ送られけり。時に鍋島より侍八人相附けらる。武藤善兵衛・田中善右衛門・石井孫兵衛・太田源助・馬郡孫右衛門・木下小兵衛・久納八助・矢作小右衛門。斯くて犬法師丸、山内へ赴き長良の息女に嫁し、神代の家督を繼いで、中頃神代喜平次と號し、後に大炊助家良と改めけり。

北肥戦誌 卷之廿四 終

北肥戦誌 卷之廿五

龍造寺隆信中國へ通用の事

既に隆信、國中はいふに及ばず近國を従へられ、如何にもして近年上洛を遂げ上帝に朝し奉らむと、心に深く思はれしかば、家臣三浦入道可鷗・土肥出雲守信安前名田家實原伊勢守尙明・水上坊仁秀背振山の僧・西岳坊賢也江上太郎兵衛出家。與賀社僧。を代るく使節とし、先づ中國の毛利三位右馬頭輝元をぞ頼まれける。然るに隆信、去年天正七年十二月三日、筑後より歸陣あり。今年天正八年庚辰正月元日、年始の儀式美々しくして、門前偏に市をなす。筑前・筑後・肥後の侍、或は自ら來りて初春の禮を遂ぐるもあり。或は名代を差遣すもありけり。同三月朔日、副島長門守光家・空閑三河入道可清・小田常陸介増光に、隆信領知を加附せらる。此輩、頃日筑前の敵を押へて、其境を警衛

隆信上洛を遂げむと欲しむを毛利輝元に使す

し大功あるに依りてなり。

筑前國の内

- 一、原村 百三十町 一、片江村 三十町 一、本名村 五十町
- 合貳百十町 副島長門守へ
- 一、入部村 二十町 一、戸栗村 六十町 一、郡村 二十町
- 一、野介村 四十町 一、有田村 二十町 一、大隈村 五十五町
- 合貳百十五町 空閑三河入道へ
- 一、残る闕所 小田常陸介へ

右三人の者、曲淵河内守に事々を談合し、彌々彼の境を警衛し、飯盛の城にあり此坂城は、曲淵の居城飯盛より乾の方なり。兩城筑前の内なり。

蒲池鎮竝龍造寺に對し籠城の事

爰に築河の城主蒲池彈正少弼鎮竝前名民部大輔は、此二三箇年、隆信一味を以て肥後・筑後

蒲池鎮竝
龍造寺に
對し籠城
の原因

の案内し、所々の合戦に功を立て、随分二心なく見えける處に、去冬より礮と隆信に至つて害心を挟みけり。其仔細を尋ぬるに、去年の冬、肥後の邊春親運が籠城の時、龍造寺より是を攻められしに、彼の鎮竝も其討手の人數にて、數日邊春に在陣しけり。然るに鎮竝、其陣中に折々己が在所築河へ通ひしを、諸人の取沙汰宜しからず。或はいふ、武士は其家を出づる時に妻子を忘ると。或はいふ、其敵に逢ふ時は身命を忘ると、此人口を鎮竝何となく耳に觸れ、是は何様佐嘉の批判よと狐疑を起しけり。次には又鎮竝と山下の蒲池鑑廣は、甚だ近き親類なり。然れども兼ねて其會釋快からず。此鑑廣と隆信、去年霜月和平せられ、味方に引付けられしを、鎮竝大に曲なく思ひけり。右彼是を以て、竟に鎮竝、龍造寺に至つて野心を發し、次第に不和になりけり。然るに田尻鑑種は、鎮竝が伯父なり。是は隆信へ二なく志ある者なりしかば、鎮竝が色を早見取り、勝屋宗機といふ中國大内家の浪人を使にて、鎮竝が異心を、隆信の方へ竊かに内通す。斯かりし間、隆信さらば彼の鎮竝を誅伐あるべしと思立たれ、密々田尻と内談せらる。田尻は甥の事なれども、鎮竝が行跡を兼ね

て納得せず、疎ましき者に思ひしかば、隆信と同心し、件の勝屋宗機を以て、數度佐嘉へいひ通じ、隆信父子、鍋島信生に對し、書札神文を取替はし、鎮竝を誅伐すべしと密談しけり。此宗機が弟は勝屋伊豆守と號す。中國大内殿没後、兄弟ともに浪人となり、伊豆守は、龍造寺を頼み佐嘉へ來つて奉公す。勝一軒とも兄弟となり、其由縁に依りて、彼の宗機、今度密事の使を勤めけるが、此時、隆信より田尻への狀にいはいく、但し去冬の狀なり。神文あり。之を略す。

以宗機申旨候。被聞召、御存分之趣預御返事可得其意候。委曲口上申候。恐惶謹言。

十二月五日

隆 信 列

鑑 種

參 御申給へ

一、隆信、田尻と内談あり。蒲池鎮竝誅伐の事、去冬十二月初旬より始まつて、同九日彌々相談の上、田尻へ新恩の地千町筑後國の内、村付之あり。其外に田尻所望の在所津留村、濱

蒲池鎮竝龍造寺に對し籠城の事

蒲池眞竝
は下筑後
一番の大
名

田村百三十町宛行ふべき由、隆信約束せられ、子息鎮賢と連判を以て、重ねく神文を差送られ、今年正月に及び、猶其内談密々にあり。彼の蒲池鎮竝は、關東下野國宇都宮彌三郎が末流大木大塚等と一族にして、下筑後の内一萬二千町を知行し、國中の城持廿四人の旗頭なり。國一番の大名といひ、其上九州無雙の要害築河に在城しければ、隆信も是を退治の事、大事に思はれしに依りて、様々に田尻をぞ語られける。

一、今年、隆信、嫡子民部大輔鎮賢に家をゆづられ、その身は須古の城に隠居せらる。

一、蒲池鎮竝、龍造寺に對し彌逆意を挟み、今年二月十日より居城築河に楯籠る。之に依つて此段早速、田尻鑑種が許より勝屋宗機を以て、隆信へ注進しけり。時に隆信より田尻への狀にいはく、

宗機齋被仰付候御口上之趣令承知候。我等意茂、彼方江入魂候。尋被聞召御納得肝要候。恐々謹言。

二月十一日

隆 信 判

鑑 種

御返
御申給へ

追而棚町之儀御知行不可有相違之由、爲御心得候。

一、蒲池鎮竝籠城の事、鍋島信生の酒見の居館より佐嘉へ注進あり。隆信は其頃須古の城にありて、さらば早速討手を差向くべしと下知せられ、嫡子民部大輔鎮賢を大將にて、一萬三千の人数を築河へ向けられけり。先手は手寄にて内田美作守兼能なり。鍋島信生は、三潞の郡士を司つて酒見より來られ、田尻鑑種は、三池山門の家人等を催して、鷹尾の城より馳せ向ふ。其外國衆には、山下の蒲池志摩守鑑廣、西牟田の西牟田播磨守鎮豊以下參陣し、又肥前衆には龍造寺上總介家晴、安住安藝守家能、横岳兵庫頭家實、同名下野守賴續等、彼此段々に備を立て、二月十三日より築河の城を取圍む。後には所々の軍兵追々に重つて、寄手の總勢凡そ二萬餘騎になりけり。斯くて諸手の輩、その口々を差詰めて大に攻め戦ひ、不

蒲池鎮竝龍造寺に對し籠城の事

三〇

龍造寺鎮
賢築川城
を攻む

日に打破らむとしけれども、城兵強く防いで事ともせず。斯かりし程に寄手の輩、評議を極め急には是を攻めずして、おのゝ陣を取り固め、城を圍んで時日を累ぬ。

或はいふ、龍造寺の軍兵築河を攻めし事は、三月十三日より。又同十八日よりとも。

一、ある日鍋島信生の手より城を攻む。時に松田權助進んで戦ひけるを、城兵に荒卷和泉守といふ者を見て、天晴剛の者かな。いでく勝負を決せむと、河向の櫓より飛んで下り、白帷子を二つ著、鎧は著ずして唯一人河を遊ぎ越し、鍋島の陣へ相進み、松田に聲を懸け馳せ寄る。權助打見て、心得たりと無手と組む。和泉守は大の男の大方にてはな礎すともせず、權助を引寄せ押伏せて、首を搔かむとしけるに、川を遊ぎし時、帷子の袖濡れて刀の柄にまき付きけるを、振りほどかむとしける間に、權助組打に馴れたる者なりしかば、下より二刀三刀續けざまに刺透す。さ刺れて疼む處を刎返し、和泉守を討取りけり。此外數日の合戦に、分

捕高名様々なり。其中に江副兵部左衛門は、鎮竝の長臣中山筑前守を討取り、辻小左衛門は城堀二重を越えて、敵二人を討取りぬ。此時江副が證人は園田主計允、辻が證人は久納市右衛門・長淵壹岐守・相良右衛門助此三人なり。皆鍋島の攻口にて相働く。

或はいふ、中山筑前守は天正十一年、蒲池益種の居城蒲船津落去の時、杉町藤右衛門討取るとも。不審。但し後に又同名の者之あり候。

龍造寺鎮賢肥後國へ出馬の事

一、同二月下旬、天正八年龍造寺鎮賢、築河の城を圍まれながら、肥後國の輩の未だ隨はざるを征伐すべしと、諸軍へ談合せらる。然る間、鍋島信生衆議を加へて、彌參陣の日限は、來る四月九日たるべしと決定あり。此時、信生へ田尻鑑種が許より音通しけるに、信生の狀にいはく、

如仰近日無音心外候。幾日不通候共御同前所仰候。仍鎧一被懸御意候。御

丁寧之至畏入候。然者參陣之儀、從來月九〔日脱カ〕可爲出張候。此節別而御馳走可目出度之由被申候。隨而下小河之儀度々預御口能候條、至鎮賢申聞候處、分別被申候。暇可有御知行之由候。尤珍重猶重々可得御意候。恐惶謹言。追而鯛二掛被懸御意候。種々御懇志候。將又北之關竹之江あたり勢道可被作之事肝要に候。

二月廿七日

鍋飛守

信昌判

鑑種

方

御返給へ

鍋島信生實名、此時迄は信昌なり、天正十年に、鎮賢、政家と號せられし故、昌の字を替へて信生と改む。

一、龍造寺鎮賢、彌、肥後國を征伐あるべしと、築河をば多勢を以て押へ置かれ、四月九日、筑後の陣を發して、瀬高通りに竹の江北の關を過ぎ、肥後へ討入らる。先

龍造寺鎮賢肥後國に出陣

陣は鍋島信生、二陣は龍造寺安房守信周・同子息次右衛門信純・同名越前守家就・同備後守鎮家を初め、高木左馬大輔盛房・内田美作入道下菴・倉町左衛門大夫信俊・馬場肥前守鑑周・同名中務大輔鎮周・出雲藤右衛門信忠・姉河中務大輔信安・横岳兵庫頭家實・同名下野守頼續・藤崎筑前守盛能・重松中務大輔頼幸・本告左馬允信景・大塚三郎右衛門家廣・鹿江・堀江・鴨打・德島安住・江副・馬渡・石井・福以下、三陣・四陣と段々に打續けたり。其外江上左馬頭家種・後藤伯耆守家信・龍造寺和泉守長信、并に神代長良の陣代同名彈正忠、松浦衆には松浦丹後守盛の陣代・山代虎王丸の陣代・平戸肥前守鎮信の陣代、藤津衆には鍋島豊前守信房を先とし、犬塚播磨守盛家・德島筑後守信盛・上瀧志摩守盛員・原・吉田・永田・辻・久間・嬉野の一族、彼杵衆には大村丹後守純忠の陣代同名左兵衛佐・同左近大夫・同右衛門大夫・同又八郎を初め、西郷刑部大輔・同名右衛門大夫・宇良上野介・伊戸・岐多良・森山・遠岳の者共、高來衆には有馬左衛門佐鎮貴の陣代兩人、其外島原式部大輔純豊・神代兵部大輔貴茂・安富下野守純泰・安徳上野介純俊以下、或は陸より討つもあり。或は平戸・大

龍造寺鎮賢肥後國へ出馬の事

村・鹽田・岳崎・高來等の津々浦々より兵船を出すもあり。其手寄たよりに随つて皆出勢し、船は順風に帆を揚げ肥後に到つて、高瀬・大島・猫宮・黒崎に著船し、陸の軍勢は悉く筑後を歴て肥後へ討つて入る。此外筑後の國人は、蒲池兵庫頭家恒志摩守鑑廣の子、田尻中務大輔鑑種・草野中務大輔鑑員・黒木伯耆守家永・西牟田播磨守鎮豊・河崎出羽守鎮堯・三池河内守鎮實・安武式部大輔家教・高良山の座主麟圭・同良寛・同祝部安實を初め、或は築河の城を押へ、或は肥後へ參陣して、龍造寺の下知を守るもあり。爰に於て隆信の武威、已に巳の時とぞ見えし。斯くて鎮賢、同月十日、肥後國大津山へ著陣せらる。今日筑紫上野介廣門の名代同名新介晴門來り加はり、都合著到五萬餘騎なり。同十一日、山鹿へ著陣あり。今日國侍に筒岳の城主小代伊勢守親傳宗禪の事、隈部の城主隈部但馬守親永・關山の城士大津山河内守・邊春の城主邊春常陸守親運各、參陣す。

赤星親隆落城の事

龍造寺鎮賢隈部城を攻めしむ

同十三日、龍造寺鎮賢、山鹿に陣を居ゑらる。赤星刑部大輔親隆が、頃日隈部但馬守が城にあつて、龍造寺に隨はざるを攻むべしと議せられ。茲に因つて同日鍋島信生、軍士二萬を引分けて隈部の城へ取懸けられしに、親隆も元より用意して、町小路の詰々つまじを差固め、火を散らして防戦す。されども鍋島頻に進んで、一方の外郭を打崩し、敵を切らるゝ事三百餘人なり。時に親隆防ぎ難くや思ひけむ。妻子を携へ詰の城へ取籠る。信生彌、是を攻めて其陣を退かず。

天正八年三月十五日

一、同日、御船の城主甲斐民部入道宗運、合志の城主合志常陸介親爲、隈本の城主城越前守親賢親冬の子、八代の城主赤星肥後統家、玖琳の城主相良修理大夫義陽、其外阿蘇大宮司惟種、志岐豊前守鎮經以下の國人等、鎮賢の山鹿の陣所へ、或は船より來りて聘禮し、或は陸より參陣しけり。

一、同廿一日、赤星親隆、鍋島信生に攻められ、竟に泳へず本丸に火を懸け、其煙に紛れて己は合志の山中に落ち隠る。斯かりし程に、城中の女童、煙に咽び度に迷ひて、湍溝に飛入り命を失ふもあり。又岩窟に行き丁あはつて疵を蒙るもあり。目も

當てられぬ有様なり。斯くて鍋島信生、當城を攻め取られしに、隈部但馬守より此城は己が舊城の由にて、深く所望申すに依りて、則ち是を給はりけり。信生、夫より内久我鎮房或は鑑茂を攻めむと議せられしかども、同廿二日、内久我城を開いて降參す。斯くて信生、隈府・八代等へ馬を進められしに、所々無事の和に従ひしかば、先づ歸陣すべしと、鎮賢此時の陣所南の關まで馬を返さる。

ある説にいふ、赤星刑部大輔親隆、龍造寺に攻められ、今月廿一日、下村生運へ人質を渡して下城すとも。此段未だ詳ならず。去年赤星肥後守統家、下村へ質人を渡したるを誤るか。

右赤星刑部大輔親隆、或は備中守とも。後に四國の阿波へ浪人す。太閤秀吉公の時召出され、無禮に依りて又浪人す。

ある説にいふ、當城を一孤の城と名づけ、城主は赤星入道道繁とも。

一、今度龍造寺鎮賢、鍋島信生肥後在陣の中、當國の輩つきたが靡かざるに屬従ひ、語らざるに來伏して、國中程なく平均しければ、高瀬・山鹿・南關へ宗徒の一族を残し置き、

其境を守らせられ、龍造寺の諸勢、皆筑後に歸陣す。

ある記にいふ、鎮賢、此時肥後に於て島津と對陣あり。竟に和平の上、肥後半國宛分地に約束あつて、筑後まで歸陣せられしとも。非なり。其事は天正十一年癸未十月なり。末に委しく記す。

或はいふ、隆信、此時三萬餘騎を引率し、肥後へ出馬ありしと。非なり。

一、今度鎮賢、肥後參陣の後、佐嘉の城へは、隆信、須古より移られ、其留守を守られけり。高木太榮入道・犬塚宗珍入道・木塚尾張守・前田伊豫守・井元上野介以下宿直申す。又隆信、筑前の事心元なく思はれしかば、秋月種實、筑紫廣門へ下知せられ其口々を押へられけり。

筑前國荒平城軍の事

去年天正七年の秋、大友より筑前國に差置きたる大津留入道宗周宗秀とも、小田部入道紹叱、脇山に於て執行越前守が爲に討たれたる由、府内に聞え、宗麟父子大に悔ま

れ、さらば彼の表へ人數を差加へ、戸次・高橋へ力を付けて、龍造寺方の者共、一々誅伐すべしと、今年天正八年の夏、曰杵新介鎮富・小佐井大和守鑑直に軍兵を副へて筑前へ差遣す。兩人則ち府内を立つて筑前に赴き、先づ戸次入道道雪・高橋入道紹雲に參會し、談合を以て大津留宗周がありつる荒平城に修理を加へ、曰杵・小佐井兩人とも此城に入りて、龍造寺方の内野・飯場・飯盛等の城々を攻めむとぞ用意しける。茲に因つて彼の城中の輩より、其段佐嘉へ注進す。然る間隆信、さらば自身馬を出し、彼の敵を追落さむと、筑紫・秋月・原田・波多・草野が方へ、回狀を以て、急ぎ荒平表へ出陣あるべき由觸送られ、其身は天正八年五月下旬、佐嘉の城を打出でらる。先手は小河武藏守信貫・納富能登守家理にて、三瀬峠を打越え、神代長良・曲淵房資に參會あり。此兩人を案内者とし、筑前の内本名村に著陣あり。舍弟安房守信周は、下松浦・杵島兩郡の士卒を引率し、隆信より先立ち筑前へ討入り、早良郡に陣を取る。其兄和泉守長信と龍造寺下總守康房は、多久の城より出で上松浦を打通り、波多・小河守親・草野中務大輔・鎮永に會し、彼の勢を一つに合せ、怡土志摩の間に出で、原田

龍造寺隆
信筑前に
出陣

荒平城の
合戦

五郎信種と一所に陣を取る。江上左馬頭家種は、三根・神崎の軍士を司つて、北山を越え内野の要害に馳せ加はる。鍋島信生は、筑後の軍兵引具して、築河の陣所より直に筑前に到つて、岩門に著陣あり。爰に於て、秋月長門守種實、鍋島の陣へ來りて一つになる。龍造寺の從兵彼此四萬三千なり。斯くて隆信、先づ筑紫・秋月と評定せられ、戸次・高橋が居城岩屋・寶満、立花と荒平との通路を取切り、士卒二萬を引分け、龍造寺安房守を軍大將とし、小河武藏守・納富能登守兩人を以て、荒平城を攻めさせらる。當城の警弼曰杵新介・小佐井大和守は聞ゆる勇士にて、士卒を下知し命を此城に縮め、命を萬天に揚げよと匂つて、上より懸り山の崩るゝが如く、小河・納富の兩勢を、坂より下へ捲り落す。此荒平といふは、東西南北ともに峻阻なる事屏風に等しく、石垣雲に聳え、矢倉搔楯間なく構へて、弓・鐵炮を烈しく打懸け、萬卒を勵し思ふまゝに防ぎし間、寄手二萬餘騎、重ねて攻め登るべき行もなく、手負を助け徒に城を見上げて控へたり。隆信、城を遠見あり、小河・納富に下知せられ、先づ軍兵を引揚げられ、遠攻にこそせられけれ。

一、六月下旬、小河・納富が陣所へ、執行越前守來りて、三人閑所に集り竊かに談合しけるは、是程の小城を、二萬に餘る軍勢にて攻めあぐみ、斯様に月日を送る事、世上の嘲・傍輩の沙汰、是に過ぎたる瓊瑾あらじ。よしや大將の下知はなくとも、我々が手の者にて、一攻攻めて見るべし。叶はずば討死すべし。人には知らずまじ。努々他の人數を加ふべからずと内談を極め、執行は陣屋に歸りぬ。斯くて七月七日、小河・納富・執行三人の輩、談合の如く手の者與力を相催し、密に陣屋を打立つて自身真先に進み、さしも嶮しき荒平の坂を、唯一息に攻登り、大城戸に混ひた混と付いて城中へ乗入むとす。城兵共不意の事なりしかば、城戸を破られじと周章あわて、矢石を飛ばせ鐵炮を烈しく打懸く。されども三人の輩、事ともせず甲を傾け、竟に大城戸を打破り、城中に攻め入りて相戦ふ。此時、三人の士卒に討死・手負數を知らず。中にも執行が從兵の中西刑部允・同新介・光安刑部丞・同彦四郎討死しけり。納富能登守も進んで疵を蒙る。時に龍造寺の總勢、すはや味方拔駈するぞ。續けやと我れ先を争ひ一同に攻め登る。其内に空閑三河入道可清進んで

荒平落城

城中に入り、敵の大將小佐井大和守を生捕りけり。其外副島長門守・神代彈正忠・曲淵河内守以下、小河・納富・執行と同じく、皆城中に乗入りて散々に相戦ひ、あそこ爰に火を懸けしかば、城兵煙に咽びて防ぎ得ず、一方の大將臼杵新介、鍋島信生を頼み和を乞ひけり。斯かりし程に信生、是を調達あり。則ち和平に一著して、敵味方軍を止め、新介、即日或は安に當城を去り渡し、殘黨悉く平治しければ、頓て荒平樂平とには、龍造寺より番人を差籠められけり。

ある記にいふ、此時當城落去しけるに、隆信則ち入替はられしとも。

ある記にいふ、此時隆信出馬の留守には、鎮賢築河より佐嘉へ歸られ在城あり。鍋島駿河入道後見たりとも。

此荒平城攻に、江上家人光安刑部丞父子討死しけるを、執行越前守、之を憐み日來の契約に任せ、彼の者父子の死骸を昇かせて、本國城原へ送り、執行一家の墓所竹原といふ所に葬りけり。此光安、無雙の剛の者故、越前守兼ねて懇志を加へしとなり。

戸次道雪龍造寺へ和平の事

斯くて隆信、荒平城を攻め落され、夫より戸次道雪がありける糟屋郡立花の城を攻めむと議せらる。然る處に、筑紫上野介廣門、雙方に入りて和興を談合しければ、則ち其議一著し、筑前國十五郡を二つに分け、東北六郡を大友領とし、西南九郡を龍造寺領と相定む。

戸次道雪
龍造寺と
和平

或はいふ、此時國分の事、立花岩屋寶滿等、大友方の城付を除きて、其外は一圓に隆信支配たるべしと約束すとも。

一、頃は七月半なりけるに、隆信、生の松原へ逍遙あり。終日の酒宴なり。秋の風冷しくして、所の景色詞に絶えたり。斯かる處に、高祖の城主原田越前入道了榮、孫子の五郎信種を具し、鏡の草野中務大輔鎮永と同道にて、酒肴など持たせ參候ありしかば、隆信悦淺よろこびからず、鍋島信生の會釋にて、大に入興ありけり。

一、隆信、立花の城へ使節を以て、戸次道雪の許へ書を送らる。其返書にいはいく、

尊書致頂戴候。仍近日到博多可被成御出陣之由、存其旨候。御通道之儀

每事不可存緩〔忘脱カ〕候。隨而涎香貳百斤、并段物壹端諸色拜領忝候。此等之

趣宜預御取成候。恐惶謹言。

七月十九日

戸次入道道雪判

龍造寺六御黨中

一、隆信、夫より豊前國征伐として五萬餘騎を引率し、舍弟安房守信周を監軍にて、先づ博多まで打出でらる。此時、戸次道雪より家人麻生主水助を使にて、太刀・馬・酒肴を隆信の旅陣へ差贈る。折節隆信、饗膳の半ばなりけるに、彼の使者主水を召出し、對面の上にて道雪へ一禮を述べられ、扱音物の酒を、飯椀を以て三盃酌まれ、今度和平の印に、此盃を道雪にさすぞと、主水が前に投げられけり。主水は、隆信の異風を見て膽を潰しけれども、さあらの體にて、畏まり彼の盃を請取り、色代して退出しけり。

一、隆信自身は博多に陣を居ゑられ、豊前國へは、舍弟安房守信周に軍兵を副へて

一差向けらる。斯くて秋月種實の弟高橋九郎元種、己が豊前國馬が岳の城へ、信周を引入れしかば、當國の城持城非常陸介鎮房・長野三郎左衛門鎮辰以下、規矩田河・仲津等の郡士、敢て一戦にも及ばず、龍造寺に皆相従ふ。信周、戦はずして豊前國を治め、暫く在國あり政務を司り、先づ筑前まで歸陣しけり。然るに隆信、今度の參陣に、筑前の内九郡・豊前の内三郡を切從へ、大に威を振はれ、小田常陸介増光空閑三河入道可清副島長閑入道放牛・龍造寺隱岐守家久・倉町左衛門大夫信俊・執行越前守種兼・神代彈正忠を以て、内野・荒平・柑子・飯盛・鳥飼等の諸城へ差籠められ、石田右馬助信能を代官として、博多に居る置かれ、頓て佐嘉へ歸陣ありけり。時に鍋島信生は、蒲池鎮竝を攻めらるゝ最中に付いて、又築河へ赴かれけり。

ある記にいふ、隆信、此時豊前國へも五萬餘騎を以て討入りしと。非なり。筑後・肥後の事、猶用心あつて豊前へは竟に參陣あらず。

今年九月廿二日、荒平にての生捕小佐井大和守を、空閑入道に下知せられ、豊

後へ送り歸されけり。

ある記には、此時、小佐井は誅せられしとあり。非なり。

ある記にいふ、臼杵新介は、元より筑前に來り居て、近年は柑子岳の城に住せしとも。

一、筑前國箱崎八幡の社務を、隆信の命に依りて、肥前加瀬の住僧増間之を勤む。

蒲池鎮竝龍造寺と和平の事

蒲池鎮竝
龍造寺と
和平

築河の蒲池彈正少弼鎮竝、今年二月十日より龍造寺に對して、逆意をなし籠城する事、既に三百餘日に及び合戦止む事なかりけり。然る處に、田尻鑑種、様々謀略を以て宥め賺しける程に、十一月廿八日、終に隆信へ和を乞ひ、鎮賢の陣へ來りて聘禮す。斯かりし間、則ち其圍を解かれ、其上鎮竝を龍造寺の塔に約束ありけり。

鎮竝を塔に約束の事、舊記の如し。されども鎮竝に男女の子二人あり。妻女は肥後の赤星が娘となり。此段詳ならず。

ある記にいふ、鎮竝、數百日の籠城に矢盡き戈折れしに依りて、龍造寺に降参すと。非なり。佐嘉より鎮賢参陣あつて、數箇度攻められしかども、要害堅固にして城陥らず。仍りて田尻へ内談せられて、和平になりしとなり。

北肥戰誌 卷之廿五終

北肥戰誌 卷之廿六

蒲池鎮竝誅伐の事

天正九年辛巳、龍造寺民部大輔鎮賢、名を改められ久家と號せらる。

一、築河の蒲池彈正少弼鎮竝、去年龍造寺に對し野心を挟み、籠城に及びしかども、

田尻丹後守鑑種前名中務大輔が内畧に依りて、舊冬十一月廿八日和平しけるに、頓て復

心を翻し、薩州の島津へ一味すべき旨いひ送り、其儀に一著す。仍りて同十二月

十八日、島津の老臣伊集院右衛門大夫が狀にいはく、

不圖對御當家可爲御幕下之旨、連々任御懇望之〔赴カ〕、今度致一著既被差出

質人、此等之儀以使節被仰通候段、尤感心之由被思召儀候。於向後毛頭不

可有疎意之通誓紙被顯心底候事、御面目之至候歟。永代可被抽忠貞事無

申及候。於私弟翻法印又々申達候。爲御納得候。恐々謹言。

二月十八日

伊集院

右衛門大夫忠棟判

蒲池十郎殿

十郎とは鎮竝初の假名なり。

一、斯くて鎮竝、再び龍造寺を背き、島津に隨ひしこと、深く隱密しければ、人更に知らざりけり。然る處に、今年天正九年の夏、鎮竝彌、龍造寺へ害心あり。同國の西牟田播磨守鎮豐へ使者を送り、密かに右伊集院が狀を見せて、鎮豐も鎮竝と同じく、龍造寺と手切し、島津へ一味あるべき由をぞ申し勸めける。されども西牟田は、無二の龍造寺方なりしかば、敢て蒲池に同意せず。右の次第家人向井左京亮を以て、一々隆信へ申し送り、剩へ鎮竝より見せに遣しける彼の伊集院が書札を押へ置き、龍造寺へ差遣しけり。隆信は須古の城に坐し、此事を聞かれ、さらば鎮竝を誅伐すべしと思はれける處に、兼ねて筑後へ附置かれたる横目田原伊

隆信蒲池
鎮竝を佐
嘉に招き
討たむ
とす

勢守が方よりも、鎮竝、又々逆意の由注進せしかば、彌、事急に決定しけり。然れども隆信、去年の如く築河へ取懸けては、又々手間を取るべし。何とぞ計畧を以て、鎮竝を佐嘉に招寄せ、易々と討取るべしと思はれしかば、五月廿日餘に、田原伊勢守・秀島源兵衛を兩使にて築河へ差遣し、鎮竝へ申されけるは、去年の冬和平ありし後、未だ其禮を受けず。彼此の爲め、近日佐嘉へ來越あるべし。然るに於ては須古の新館にて、猿樂を興行申すべし。其許よりも猿樂の役者共を召具せらるべしと申送られけり。

ある記にいふ、右隆信よりの使節秀島源兵衛を、西岡美濃守とも。此秀島、初は西岡が養子なる故、之を誤るか。

ある記にいふ、田原伊勢守を木原伊勢守とも。

既に件の兩使、築河の城に到りて、右の次第を申し達しけるに、鎮竝病氣と稱して返答せず。田原は心賢き者にて、斯くては叶ふべからずと思ひ、鎮竝の母儀と同じく伯父の左馬大夫鎮久へ申しけるは、隆信父子の心底、聊か別心候はず。則

蒲池鎮竝誅伐の事

ち神明の照覽に候間、起請文を以て申すの由、様々忻^{たは}り賺^ずし、一紙の神文を出しける程に、母儀も左馬大夫も是を信用し、鎮竝を色々教訓ありしかば、鎮竝も今は承引し、さらば罷越すべしとて、既に其用意しけり。扱鎮竝の母儀、田原と秀島へ對面あり。此度佐嘉の首尾、彌、然るべき様に頼み申すの由にて、兩人へ黃金一枚づつ得させられけり。斯くて鎮竝、五月廿五日伯父左馬大夫を初め、親類家人等、彼此主従二百餘人、樂役ともに三百餘、築河の城を打立ちけり。

蒲池佐嘉
に行く

或はいふ、此時鎮竝上下七百餘人とも。

爰に鎮竝の一族に、大木兵部少輔統光といふ者あり。今度鎮竝、肥前へ赴くの由傳へ聞き、急ぎ半途に出合ひ、鎮竝に向ひて、御邊はそも物に狂ひ給ふか。當時弓箭の最中なり。然るに、うか〜と他所へ赴き給ふ事、偏に石を懐いて淵に臨むに異ならず。平に留まり給へと制しけれども、鎮竝、更に領掌なく、早斯様に出立ちし上は、阿容^{あづめ}々々と引返さむも見苦し。其上天運全からば、縦令劔戟刀杖の中なりとも、豈恐るゝに足らむやといひ〜、馬を早めて寺井江を打渡り、肥前

龍造寺久
家蒲池に
對面

に入りて、同日の夕方鎮竝上下三百餘人、龍造寺の城下佐嘉に著す。先づ田原秀島を以て、龍造寺久家^{前名}鎮竝に案内を啓^きし、城中に到りて去冬和平の一禮を述べ、久家則ち鎮竝へ對面せられ、饗膳美を盡して奔走あり。其夜は終夜の酒宴にて、鍋島信生同席なり。斯くて鎮竝、龍造寺の城を退出し、城北の本行寺に宿を取り、明廿六日逗留す。此時、隆信は須古に坐し、土肥出雲守信安を使節として、廿六日の夕方鎮竝へ酒肴を贈られけり。鎮竝悦び隆信へ禮謝あり。則ち彼の酒肴を披き、出雲守をぞ饗しける。扱其翌くる廿七日には、未だ未明に、鎮竝本行寺を打立ち、主従三百餘人、隆信へ一禮の爲め須古をさして急ぎしに、與賀の馬場を通りける時、龍造寺の伏兵小河武藏守信貫、徳島甲斐守長房、水町彌太右衛門、秀島源兵衛、石井の一族、其外大勢、四方より一同に嘩と起つて鬨の聲を發す。時に鎮竝、馬を控へて齒嚙をなし、跡に打ちける伯父左馬大夫に向ひ、口惜しき次第かな。我れ築河にて思慮せしは爰にてあり。極運とはいひながら偏に御邊の勸に依りて、今此計策に陥^{おと}されぬと、大に怒りて申しけるを、左馬大夫聞いて、赤面の色

に打見え、早此期に及び返答をするに言なし。我等に二心あらざる事、唯今見給ふべしといひ捨て、與賀大明神の花表（とりの）の前に馬を駈け居る、蓬（きたな）き龍造寺が仕業かな。己れ七生が間は恨むべきぞと匂つて、矢二筋三筋放ちて後、家の上に駈登り、〔詰カ〕差取引詰め散々に射る。時に鍋島信生の使として、江副兵部左衛門馳せ來り、一通の書を左馬大夫へ見せけり。鎮久は、屋の上におりて敵を射けるが、彼の信生の状を披いて見、暫く詞を出さず。兵部左衛門待つこと久しくて返事如何と問ふ。鎮久聞いて、件の状を寸々に引裂き捨て、返事は是ぞと礮と射る。江副、此矢を膝節に請留め、少しも疼ます二の矢を待つて居たり。されども左馬大夫、夫より江副に目を懸けず、屋の上より飛下り火を出して相戦ひ、堤左馬允に渡り合ひ、終に討死しけり。斯くて佐嘉勢には、彌永佐介眞前に進み、其外相良右衛門佐永淵壹岐守辻小左衛門・大塚勝右衛門・中島將監・澁谷善右衛門・中島次兵衛・秀島隼人・水町彌太右衛門・石井三河守・同四郎兵衛・同四郎左衛門・同次郎右衛門以下、我れ先にと懸つて相戦ひ、中にも石井次郎右衛門は、敵の首五つ取り、自身も疵を

與賀合戦

蒙る。辻小左衛門も敵二人討つて首を取る。又中島次兵衛・秀島隼人も分捕す。此外龍造寺の者共、汗水になりて打戦ひ、疵を蒙り討死する者數を知らず。其中に石井四郎左衛門は、鎮竝の小性大木忠五郎と駈合はせたり。時に忠五郎、鎧透を以て手裏劔を打ちしに、四郎左衛門が左の股を打貫きけり。されども石井、其短刀を抜き捨て忠五郎をぞ討取りける。此四郎左衛門、彼の疵にて後まで左の足叶はずとなり。爰に又島内新左衛門・同弟左近允は、槍を持つて一番に堀を越え、築河勢と突合ひしが、新左衛門太腹をつき貫かる。されども貫かれながら、其槍をたぐりて竟に當の敵を討取り、其場にて死にけり。弟左近も兄に續いて討死す。斯くて合戦時を移し、血は滌々と川をなし、骸は堀を埋めたり。されば築河の上下三百餘人、とても遁れぬ軍よと思ひ切りしかば、命を惜む氣色もなく駈出で、討死す。先づ宗徒の者共には、蒲池左近大夫・並安・大木日向守・鎮照・田尻種教・中山掃部助・本郷中務大輔・同彌七郎・大木越後守・丸毛外記・吉谷式部少輔・同與三兵衛・内田内藏助・小溝藤兵衛・西河縫殿助・今村源右衛門・原對馬守・鳥栖勘解由・

香土左近・岩井九郎以下討死百七十三人、此外生捕となり疵を蒙る者は、假名を記さず。然るに鎮竝は、今はかうよと思ひしにや。一族家人の討死しける其隙に、小家のありけるに立入りて、心靜に沐浴し、腹搔切つて臥しにけり。淺猿かりし有様なり。

蒲池鎮竝
自害

- 一、ある記にいふ、此時鎮竝、築河を出でけるは五月廿六日にして、廿七日・廿八日の兩日、佐嘉に逗留。廿九日の朝、與賀にて討たれしとも。
- 一、蒲池家の傳には、廿八日に討たれしとも。
- 一、舊き年代日記には、廿七日なり。此の本文の如し。
- 一、或はいふ、此時鎮竝主従討死二百餘人とも。
- 一、又いふ、騎馬の侍百餘人とも。
- 一、或はいふ、蒲池左馬大夫鎮久は、鎮竝の伯父にはあらず。別腹の兄なりとも。
- 一、或はいふ、此時龍造寺の城中に於て酒宴ありし時、鎮竝席を立つて、左馬大

夫を呼立て密かに談合し、鍋島信生を左馬大夫閑所へ招き、様々に方便たばかつて、若し心ありやと心底を引き見しかども、信生敢て其方便に乗らず、却つて左馬大夫を恥しめける間、夫よりは心打解け、二三日佐嘉の坂下に逗留し遊宴しけりとも。

- 一、此時鎮竝、佐嘉の本行寺に宿を取つてありしに、隆信、須古よりの使なりとて、土肥出雲守に酒肴を持たせて來れり。鎮竝悦び則ち其酒を披き、出雲守を饗し終夜酒宴して入興の餘、錦木の謠を自ら諷ひ立つて舞曲をなす。此鎮竝は、當代希なる猿樂の上手なり。出雲守つくづくと是を聞き、見し心に思ひしは、はかなの彼の鎮竝が有様かな。既に明日誅伐に逢ひぬる身の、夫を夢にも知らずして斯様に戯れける事よと、思はず落涙しけり。鎮竝是を悟らず、我が藝の面白さに、出雲守泪を流すと思ひて、彌々其技を舞ひしとなり。

鎮竝殘黨退治の事

斯くて隆信、計畧を以て蒲池鎮竝を易々と誅伐あり。猶其殘黨の築河の城に之あるを退治すべき旨、田尻丹後守鑑種が方へ下知せらる。此鑑種の姉は、蒲池武藏守鑑盛の妻女にて、鎮竝の母なり。されば鑑種は、鎮竝の爲め正しき伯父なりしかども、最前より隆信に心を合する仔細ありて、彼の殘黨退治の事、則ち領掌しけり。爰に鎮竝の弟に、蒲池統春といふ者あり。築河の城中にありけるが、田尻に談合しけるは、我等に於ては龍造寺に對して別心なし。然るに當城に籠り居て、自餘の者共と一味せば、殘黨沒落必定手間をとるべきか。所詮我等は龍造寺へ忠義の爲め、此城を退くべしと申す。茲に因つて田尻鑑種より、其旨早速龍造寺に到つて申試みける處に、然るべき由いひ來るに依りて、則ち統春一類百餘人は、築河城を出でて、田尻の領内佐留垣村へ引退きけり。斯かりし程に、築河へ残りし輩豊饒美作守鎮連・蒲池駿河守統康、其外餘儀なき者共男女五百餘人ある舊書には、千百餘と。は、悉く築河城よ

鎮竝殘黨退治

り巽たつみの方鹽塚村に取籠る。其中に鎮竝の母は田尻好みに付いて、龍造寺へ申し斷り、己が館へ呼取りぬ。又鎮竝の稚き娘のありしは、乳母抱取り田尻が据場へ打向ひ來りし故請取りけり。其外鎮竝の男子、今年六歳になりける統虎丸を初めて、皆鹽塚村に楯籠りぬ。然るに六月朔日、田尻丹後守鑑種、龍造寺の命を蒙りて鹽塚の要害へ取懸る。其人數には田尻石見守鎮直、同名左京亮鎮永、同名彌七郎、同勘解由兵衛鎮乘、同但馬守鑑忠、同大藏助鎮富以下、田尻一手都合二千七百餘騎にて、諸口より押寄せたり。佐嘉勢にも鍋島信生、中野兵庫助、水町丹後守信定相加はり、彼此六百餘騎にて田尻に加勢あり。斯くて鎮竝一家の輩、皆必死に思定めしかば、各、足弱を害し、六月一日の午の刻、我れ先にと切つて出づ。されば鎮竝の家人は、田尻家人とは皆々伯父甥、兄弟にて互に恥合ひ、他人よりは猶烈しく、初の程は一人二人づつ出合ひて、跡を弔ひ給はれと言葉を替し、火を出して相戦ひ首を取るもあり、取らるゝもあり。後には亂れ合ひ、田尻家人には中尾與三兵衛種次并に其被官金栗將監谷軍十郎、殊に進みて首を取る。勝屋宗機も蒲池衆二人を討捕りぬ。宗機、此時田尻と號す。

鹽塚合戦

鎮竝殘黨退治の事

今朝卯の刻より押寄せて、敵味方兵糧もつかはず午の刻の終り迄、さしもの極熱に汗水になり雙方入亂れ、弟は兄の首を取り、甥は伯父と刺違へて目も當てられぬ戦なり。是を見る者、如何なる前世業因にて、昨日まで睦しかりし親類共の、今日はいつしか敵味方と分れて、斯かる思はざる修羅の鬪をなしける事よと、涙を流さぬはなかりけり。斯かりし程に、築河衆生きて残るは一人もなし。寄手田尻勢にも親類被官・中間以下、或は戦死し或は深手を負ひし者算を亂し、折節水無月初旬にて、青田も堀も死人にて埋み、悉く平地となりけり。先づ築河衆宗徒の討死には、蒲池駿河守統康・豊饒美作守鎮連を初とし、蒲池紹心入道・同甚三郎・同名宮内少輔・同左近允・中山竝元・西河甲斐守・江曲相模守・同掃部助・守部左京亮・甲斐將監・大本宗幸入道・高山藏人・池松將監・原新右衛門・同彌七郎以下、其外老若男女五百餘人、或は討たれ或は自害して、一人も残らず失せにけり。其中に稚き子・老いたる入道・若き女の死骸爰彼所に横たはり、足の踏所もなく哀れなりし事どもなり。實にや朝に紅顔なりしも夕には白骨となり、郊原に朽つるとは是なるべし。寄手田尻勢にも討死する者、

鎮竝の子
統虎殺さる

田尻勘解由兵衛・末吉刑部・田島伊賀守・松尾左馬助・其外維兵百八人、手負は八百三十六人なり。斯くて軍散じて後、田尻鑑種、則ち右合戦の次第、扱又討取る處の首共を、船二艘に取乗せ肥前へ運送して、隆信の實檢に入れけり。然る處に、鎮竝の子統虎丸、胡仙といふ山伏と主従三人にて、田尻が居城鷹尾に來り、鑑種を頼みけり。幼稚の者なれば、鑑種も是を助けたく思ひしかども、男の子にて行末の事如何と覺束なく、不便ながら殺すべしと思案し、高來へ送ると方便たばかり船に乘せ、家人上妻刑部丞其外二三人警固にて、船中に於て是を討つべき由申付け、則ち鷹尾津より押出しけり。然るに胡仙、其色をや悟りけむ。朝日に向ひ珠數を以て鬪を取りけるが、悪しくやありける。其儘上妻刑部を切つて伏す。是を見て残る田尻が家人共拔合せ、彼の山伏胡仙を初め統虎主従を切害しけり。

一、鎮竝の弟蒲池統春が一家、佐留垣村に在けるをも討伐すべき由、田尻方へ佐嘉より申し來りけり。時に鑑種佐嘉に到り申遣しけるは、彼の統春は、龍造寺へ異心なく一族を離れて、早速城を〔脱ア〕致退出で候。其調儀故にこそ、築河殘黨輒

く案利に屬して候へ。然れば統春が身體に於ては、御宥免候へと申し断りしかども、隆信承引あらず。鹽塚落去の中一日あつて、六月三日、佐嘉より筑後衆に下知せられ、統春がありける佐留垣の城を攻む。肥後衆には小代伊勢守相加はる。肥前衆には納富能登守・田原伊勢守・秀島源兵衛以下、六月三日一同に取懸け、諸口より押詰め攻め戦ふ。此時、肥前勢の中よりは、納富が與力に小宮善助・増田六彌太・濱田與次進んで分捕し、川浪大藏續いて討戦ふ。其外石田右京亮討死しけり。斯くて統春を初め百人計りの者共、悉く切つて出で火出づる程合戦し、一人も残らず切死して、佐留垣不日に落去しけり。扱此首共に、統虎丸が死證を加へ、又候船一艘に積みて、田尻鑑種より肥前へ差送り、隆信へ見せ申しけり。是を聞く者見る者毎に、あらおそろしと舌を慄はぬはなし。然るに此時隆信より肥後の小代へ、石田内記を使節にて、今度佐留垣加勢の禮書を送られし返禮にいはいはく、

貴札令拜見候。仍蒲池鎮竝事、連々就惡行顯然、今度輒御成敗候。千秋萬歳候。

彼殘黨、於佐留垣城楯籠候之處、筑州衆申談、即時討果候。被聞召付候段、外聞之至忝候。彌可抽忠節之覺悟、不可有緩疎候。猶石田内記方可有御達候。可得御意候。恐惶謹言。

六月十二日

小代伊勢守

親傳判

龍造寺殿

參貴報

一、ある記にいふ、此時鎮竝の殘黨鹽塚・佐留垣等の所々へ分散しけるは、田尻が謀略にて、是を轍く討果すべしとの工なりとも。

一、ある記にいふ、鹽塚を攻めしは、田尻一手となり。鍋島以下の事之を載せず。

一、ある記にいふ、此時鎮竝の母・妻室・娘三人は、田尻申請ひしに依りて、隆信宥免せられしと。但し其中に妻室の事、古き書に見えず。

一、ある記にいふ、統虎丸の事を、田尻佐嘉に到つて申請ひしかども、宥免せられずとも。

一、ある記にいふ、此時鹽塚落去して、統虎丸は虎千こせんといふ小性と主従四五人に
て、田尻が鷹尾の城へ來りしを、鑑種是を殺すべき爲め、薩摩へ送ると方便り
船に乗せ、既に海上へ押出し船中にて殺さむとす。然るに小性の虎千、其色を
見とり、旭に向ひ鬪を取り、則ち主の統虎丸を切殺し、己れも自ら首を搔落し、
海中に入りしとも。

一、或は鹽塚村にて古老の語りしは、虎千とは山伏なり。統虎丸が鷹尾の城に居
たりしを、田尻殺さむとしける故、是を盗み出して、薩摩へ落ちむと船に乗り
しに、財寶多く持居たるを、船頭共目懸けて、主従の人を殺さむとす。虎千其色
を悟り、終に遁れ難き事を量つて、統虎丸を害し、其身も腹を搔破り、海中に飛
込みけるとも。

右の説々之を用ひず。此書に載する所は、田尻家の舊書なり。

一、鎮竝歿後に、筑後より大木兵部少輔統光、肥前木原村へ來り傳つてを頼み、鍋島信
生・小河武藏守まで申しけるは、今度鎮竝が供を致さず、殘念の仕合なり。所詮

追善の爲め、切腹申すべき爲め罷越したる由訴へたり。其段、隆信に披露ありし
に、義ある武士なりと賞美せられ、頻に切腹を留められ、筑後へ歸されけり。此
兵部、浪人となり、後宗繁入道と號す。數年を経て小河が取持にて鍋島の臣とな

或はいふ、此大木、筑後國堀切の城主とあり。非
なり。田尻が五箇城の内なり。大木は大木に住す。

一、今度鎮竝一亂に付いて、筑後國騒動し、其殘黨討伐の後も稍、靜かならず。之に
依つて龍造寺久家、佐嘉より築河の城に移られ、鍋島信生と同じく居住あつて、
毎事相議せられ、當國を鎮められしに依つて、頓て國中平均す。

一、同六月廿二日、龍造寺久家、鍋島信生談合をもつて、豊饒新介を誅伐あり。これ
は父美作守鎮連、今度築河黨殘に加はつて鹽塚村の要害に楯籠りしに依つてな
り。

一、同月下旬、筑後國戸原薩摩守親隆入道紹眞、龍造寺に對し害心をさしはさみ、己
れが戸原河内の城を修補して楯籠り、佐嘉の通路を斷ちけり。この入道は、鎮竝
の近き親類なり。然るに鎮竝、今度佐嘉に於て不慮の生害しけるを、隆信の不仁

なりと深く憤りし故なり。斯かりし間、久家の舍弟後藤伯耆守家信、六千餘騎を以て、戸原河内へ取懸け、紹眞を攻めて相戦ふ。時に筑後衆には、草野長門守鑑員・西牟田播磨守鎮豊・高良山の座主麟圭馳せ加はり、戸原が城を取圍む。斯くて城主親隆入道、持口を差固め暫しが程は泳へしかども、つひに籠城叶はずして、懇望の上降参に一著しければ、寄手の諸勢、合戦を止め悉く圍を解いて歸陣しけり。

或はいふ、戸原、此時落城せずとも。

一、同七月、田尻丹後守鑑種も、龍造寺に至つて異心これある由に付いて、是をも佐嘉より討果さるべしと、いづくともなく巷説あり。其段、田尻も聞付けしに依つて、隆信父子より更に心疎あらざる由、鑑種が許へ神文を差送らる。其趣にいは

く、
數度以御神文雖申候、今度其許有曲説之由承付候之條、此方親子對鑑種毛頭無心疎之條、彌無御疑心様、以御神文申入候。自今以後對鑑種邪儀表

裏心疎有間敷候。

右此旨於偽申者、

神文之を略す。

天正九年七月廿日

龍造寺山城守

隆信判

龍造寺民部少輔

久家判

鑑種

參る

一、右隆信・久家よりの神文を、田尻拜見して疑を晴しければ、いよく龍造寺に至つて、向後別心あるまじき由、鑑種も起請文を認め、土肥次郎左衛門信重まで遣しけり。この時信重よりも、田尻が方へ神文を替はず。その文にいはいく、
信重は土肥出雲守の子、後に佐渡守と號す。申次なり。

再拜敬白天罰起請文

鎮竝殘黨退治の事

一、至隆信・久家深重可被仰談之由、以御神名承候之條、爲信重何様盡未來際無相違、如親子兄弟可申承之事。

一、鑑種御爲に可罷成儀承付候者、御入魂可申之事。

付若鑑種信重間、雖有如何體讒人互申明、可相糺邪正之事。

一、隆信・久家、信昌江連々御取合之儀、聊不可存緩〔意脱カ〕之事。付、萬一至隆信・久家御相違之時者、右之條

不可有其實之事。

右條々、於令違背者、

神文之を略す。

土肥次郎左衛門尉

信重判

天正九年八月十九日

田尻丹後守殿

進覽

一、今度龍造寺より蒲池鎮並一類を、容易く誅伐ありし事、偏に田尻鑑種、最初より

隆信へ志しを通じて、竊かに内略を廻しける故なりしかば、去々年十二月に約束の如く千町の内、先づ六百八十町、今年九月初、久家判物を以て、田尻へ給はりけり。其坪付にいはいはく、

筑後山門之郡之内 鹽塚村 百三十町

肥後合志郡之内 夜門 十二町

右郡之内 金龜寺 二町

右同郡之内 橋田村 四十五町

同玉名郡之内 伊倉北方小島 十町

同郡伊倉南方之内 請三箇村 三町

天正九年九月四日

久家判

鑑種

參る

右の外 村付

鎮並殘黨退治の事

二四七

鎮竝本地	百三十町	鹽塚村	同	百町	たな町村
黒木領	廿五町	ひらき村	同	廿五町	をさ島
豊後領	六町	井手の上	同	三十三町	松延村
鎮竝本地	六町	大さ村	三池之内	四十五町	龜崎
同	同	同	同	同	同
豊饒領	四十五町	野瀬	同	三町	上内村
豊饒領	三町	龜尻	鎮竝本地三池	十三町	來木
豊饒領三池	十五町	尾尻本村	三池	六町	ふすべ
三池	六町	ふか倉	三池	十三町	ふか浦
三池	五町	をか松			

以上四百七十八町

薩摩勢肥後へ攻め入る事

同九月下旬、薩摩より太守義久の舍弟島津兵庫頭忠平、中頃義珍。後義弘と名づく。肥後の八代へ

薩摩勢肥後へ攻め入る

攻め入り、大友・龍造寺方の城々を攻むべしと、既に大町杉島まで出張す。是は宇土の伯耆左兵衛顯孝・隈本の城越前守親賢、頃日島津に屬し、薩摩勢を差招きしに依つてなり。然る間、甲斐民部入道宗運人數を率し、其上龍造寺方の輩と評定を加へて、是を防がむとす。されども忠平、急に軍を發せず。斯かりし程に、玖麻の相良義陽、阿蘇大宮司惟種時に六歳。等の龍造寺方、甲斐と談合して、隆信より南の關へ差置かれたる龍造寺上總介家晴まで援兵を乞ひけり。茲に因つて家晴、早速軍兵を相催し、甲斐が城本御船まで差遣す。爰に於て島津、如何思ひけむ。八代へ引退く。

一、今年龍造寺より肥後國支配の地、横島・高瀬・山鹿・南の關の城々へ彌、番人を置かる。或はいふ、今年三月、久家信生、肥後へ參陣ありと。

一、今年久家信生、築河へ移られし後、筑後・肥後旗下の輩、或は神文を送り、或は質人を出す。其人數には、

小代伊勢守、親傳

甲斐民部入道、宗運

薩摩勢肥後へ攻め入る事

同名左京入道
 同 兵部大輔
 同 刑部入道
 同 掃部助
 城 越前守、親賢
 同 主計允
 木庭隱岐守
 隈 庄太郎
 合志常陸介、親爲
 一、四月日
 右何れも肥後衆なり。是は久家築河へ入城以前、龍造寺に神文を送る。
 一、六月日
 志岐豊前守、鎮經
 赤星肥後守、統家
 隈部源次郎、親泰

右何れも肥後衆なり。神文を送る。

八月廿六日

高良山座主、良寛
同 寶生院、鎮興

右筑後衆なり。神文を送る。

一、九月八日

相良修理大夫、義陽

右肥後衆なり。神文を送る。

一、龍造寺へ段々相従ふ面々の質人は、皆築河の城に之を置かる。其内有馬左衛門
 佐の質島原大學助。石黒備中守。鳥原式部大輔の質嫡子木工左衛門。安富下野守深江との質。嫡子助四郎。赤星肥後
 守の質嫡子太郎。或は新六。隈部但馬守の質男次。草野長門守の質嫡孫幡千代。祝部の質妻。此外詳な
 らざるに依つて之を記さず。

鍋島信生羽柴秀吉へ音通の事

今年天正九年。鍋島飛驒守信生、背振山の僧水上坊仁秀を以て、羽柴筑前守秀吉の頃日毛

鍋島信生
秀吉に音
信を通す

鍋島信生羽柴秀吉へ音通の事

利輝元を攻めて、中國に在陣ありしに通せらる。秀吉大悦せられ、様々の禮謝ありけり。雙方音信は是が始なり。

北肥戦誌 卷之廿六終

北肥戦誌 卷之廿七

龍造寺久家鍋島信生改名の事

久家信生
改名

天正十年壬午、龍造寺民部大輔久家・鍋島飛騨守信生、俱に築河に在城あつて、肥後・筑後を鎮めらる。然るに今年、久家名を改められ政家と號せらる。信生も亦、此時までは未だ信昌と申しけるを、信生と改められけり。

黒木父子再び龍造寺へ降参の事

黒木宗英
父子再び
龍造寺に
降参

同二月、筑後國上妻郡猫尾の城主黒木兵庫入道宗英、其子伯耆守家永、龍造寺に背いて居城猫尾に引籠る。然る間、政家・信生相議を以て、黒木を攻めらるべしと、則ち信生に小河武藏守信貫加はつて其勢五千餘騎、築河を立ち猫尾城へ向はる。時に草

龍造寺久家鍋島信生改名の事

黒木父子再び龍造寺へ降参の事

野長門守、雙方に入りて和與を愾ちかひしかば、黒木父子、再び龍造寺に至つて異心あるまじき由、懇望一著の上、嫡孫黒木四郎に宿老一人差副へて質人に出しけり。斯かりし程に信生、黒木を攻められず、彼の質人の四郎を具して、築河へ歸城ありけり。

或はいふ、此時政家も、上妻へ參陣せられ、高良山に陣を居ゑられしとも。

田尻鑑種籠城の事

同八月二日、龍造寺政家、鍋島信生、築河の城より鶴川逍遙として、瀬高上、庄へ出でられけるに、是は鶴使の遊山にあらず、田尻鑑種、蒲池家恒、龍造寺に至つて逆意のある由相聞え、川狩に事寄せて、彼の輩を招寄せ、其場に於て討果すべき工たくみの由、世上に風聞しけり。然る間、蒲池は大に仰天し、急ぎ田尻が方へ神文を以て申談しける趣にいはく、

再拜々々敬白

一、今度至鑑種、家恒身上、曲風説之儀共候。互申談、何とか被聞召分候之様入

性精至御兩殿信生、可遂御詔言儀不可有緩怠脱之事、

一、舒睦甲冑共に無拔懸、兩人同然に可遂馳走之事、

一、如何體之讒人候共、兩人間深重可申合事、

右條々若於申脱者、

〔神文之を略す脱カ〕

天正十年八月十二日

蒲池兵庫頭

家恒 判

鑑種

參

家恒は、斯様に龍造寺に至つて異心なき由、鑑種へ申談し詔言しけれど、鑑種は、天性其機飽くまで不敵の者なりしかば、敢て無實の申分に及ばず、大に腹を立て、此鑑種、近年隆信に一味し、三池鎮實を初め甥の鎮竝其殘黨まで悉く討果し、其上肥後、筑後の案内して、所々龍造寺の手に入れ、軍勢莫大の事なり。然るに如何なる

田尻鑑種
籠城の原

田尻鑑種籠城の事

三五

讒口に依つてか、今斯かる企ありけるや。されども未だ其實否計り難しとぞ窺ひける。斯くて此事、頓て佐嘉・築河へ聞え、隆信父子・信生大に膽を潰され、元より彼の風説は跡方もなき事なりしかば、聊か鑑種に至つて疎意なき旨、各、神文を送られけり。隆信父子の紙上にいはく、

再拜々々敬白天罰起請文

一、今度鑑種御身上曲風説申散候。更無是非候。爲隆信政家毛頭不存寄候之事。

一、御縁重之儀、此方親子以見合、可申談儀不可有疎之事。

一、鑑種隆信政家申談候而、その後前々と不存疎意候。勿論向後不可有別儀事。

附、被對隆信政家、鑑種御隔心之由、如風説者直尋口、〔糺カ〕縦一往者、鑑種御隔意雖無御晴候、引直可申談候。及兩度候者、可及鉾楯覺悟之事。

右條々於偽申者、

隆信以下の神文

神文之を略す。

天正十年八月十八日

龍造寺山城守

隆信判

同民部大輔

政家判

田尻殿

鍋島信生の紙上にいはく、

再拜々々敬白天罰起請文

一、今度不慮之惡説不及是非候。乍勿論爰元公私共、對田尻鑑種毛頭惡心惡行之儀無之候之事。

一、雖事新敷様候之至、鑑種盡未來際被申談候首尾、少茂不相變、爲鍋島飛驒守茂別而可得御意之覺悟不淺候之事。

一、此已後茂自然讒者有之而、於有申妨仁者、〔即〕則時無御腹藏預御入魂相糺邪正、速其沙汰無異議可被申談候之事。

田尻鑑種籠城の事

三七

附、萬一對隆信政家、爲鑑種御惡心之儀於有之者、此神文不可有其實候之事。

右之條於相違者、

神文之を略す。

天正十年八月十九日

鍋島飛驒守
信生 列

田尻丹後守殿

參

小河武藏守信貫の神文には、

再拜々々敬白起請文之事

一、今度之風説努々不存之事。

一、至田尻鑑種爲小河武藏守、盡未來際不可存疎意之事。

一、隆信政家鑑種御間に自然讒者於有之者、相糾邪正無異議可被申談候様に、御取合可申之事。

附、如此雖申談候、被對政家父子於御相違之當人者、此神文不可有其實事。

右之條於相違者、

神文之を略す。

天正十年八月十九日

小河武藏守
信貫 列

田尻鑑種

參

納富能登守家理の神文には、

敬白天罰起請文

一、今度之風説努々不存候事。

一、對田尻鑑種爲納富能登守、盡未來際不可存疎意之事。

一、隆信政家鑑種御間に、自然讒者於有之者、糺明邪正無異議可被申談之様、御取合可申之事。

附、如此雖被申談、被對政家父子於御相違之概者、此神文不可有其實之事。

右條々令違犯者、

〔神文之を略す脱カ〕

天正十年八月十九日

納富能登守

家理判

鑑種

參

鑑種籠城

右の如く龍造寺より數通の神文を以て、聊か異心あらざる由、數返申されしかども、鑑種信用せず。猶以て狐疑を插み、同十月四日、終に龍造寺に對し、手切の働を以て所々放火せしめ、築河に差置きし質人同名内記丞鎮清が子千代松丸を捨て、居城鷹尾へ楯籠り、其外四箇所の端城江の浦へは、同名但馬入道了哲大友の狀に常陸入道、濱田へは同大藏助鎮富津留へは同石見守鎮直堀切へは同彦左衛門鎮永或は福山將監ともを差籠め、兵糧馬秣弓鐵炮玉藥に至るまで不足なく用意し、龍造寺勢を待掛けたり。斯くて田尻、既に龍造寺に對し五箇所の城へ引籠りしかば、隆信父子もさのみは賺さ

合戦

れ難く、さらば是を攻むべしと、政家自ら肥前勢二萬を率ゐて、田尻が本城鷹尾へ取懸けられる。裨將は後藤伯耆守家信と、鍋島飛騨守信生なり。扱三方より取圍み、海の方は亂札を以て立切り、諸口に於て合戦始まり、鐵炮止む事なし。その上彼の五箇所の要害を取詰むべき爲め、城廻り三里の間、堤を掘續け、所々へ向城を取付け、船手には田雜大隅守を頭人にて番船を付けられ、一向海上の通路を差塞ぎしかば、田尻が爲體、偏に籠鳥の雲を戀ふるに異ならず。されども田尻機を屈せず、五箇城を堅固に持つて防戦す。

一、鍋島信生は、此時鶴の口を攻められしに、其手の侍木下四郎兵衛中橋平兵衛以下進んで相戦ひ、平兵衛十三箇所疵を蒙り、同勘兵衛四箇所の疵を負いて、兩人ともに首を取る。此外、後藤家信・小河武藏守を初めて、數箇度粉骨を盡し攻め戦ふと雖も、城中堅固にして破られず。斯かりし程に、寄手三萬餘騎、急に城を攻めずして日を送る。

一、鷹尾寄手の面々集まつて評定を加へ、先づ江の浦の端城を攻めて見るべしと、鷹

尾をば多勢にて押へ、扱後藤家信・鍋島信生兩將を以て、江の浦へ取懸けらる。當城には鑑種が從弟田尻但馬入道了哲ありけるが、肥前勢の寄せ來ると聞きしかば、城中に下知し口々を差固めたり。然るに寄手、急に構を打崩さむと仕寄を付けて相進む。中にも後藤の家人等、前駆にありて相戦ふ。其内に岡部與右衛門・同新兵衛・寺村藤左衛門・塚原與左衛門相挑み、新兵衛は討死しけり。又鍋島の手よりは、中野式部少輔清明進んで、早堀の手に付く。是を見て成富十右衛門信安・下村生運・於保賢守・木下四郎兵衛・南里太郎三郎・石井次郎右衛門相進み、松田權助は城兵荒河八郎を討取り、石井左京亮敵と槍を合せて、其中たひなかを突透すに、彼の敵槍を手繰り左京を一刀斬る。左京疼まず、則ち其敵を討取りけり。中橋平兵衛も槍を合せて深手を負ひ、石井伊豆守・上野助二郎・同與三郎は討死す。斯くて寄手の士卒、挑戦ひ骨を碎くと雖も、城中強く防いで落城せず。然る間、後藤・鍋島以下の寄手、江の浦の城を差置いて、又鷹尾の城を攻めむとす。

一、寄手其後、鷹尾の城を攻めけり。中にも小河武藏守信貫進んで下知を加ふ。然

れども鑑種が家人西原美作守・中尾與三兵衛・北原紀伊介以下、命を際に防戦し、鐵炮を打掛くること雨の如くにて、寄手の士卒、更に面を向け得ず。小河を初め鍋島・後藤の輩、攻口を引退く。此時、鍋島信生の侍に三ヶ島又右衛門勵み戦ひ、脇の下に矢疵を蒙る。斯くて軍の次第、追々須古へ聞えしかば、隆信大に立腹あり。いでさらば、自身馬を向くべしと、成松遠江守・高木太榮以下を具せられ、龍王崎より兵船を以て、筑後の榎木津へ登られ、肥・筑・豊の分國に觸れて大軍を催され、小河武藏守を軍奉行とし、鷹尾の城へ取懸けられ、日夜攻められしかども、鑑種更に氣を屈せず、却つて寄手の者共、數箇度打負けて、雜兵多く討たれしかば、隆信は頓て須古に歸られけり。其後は彌、向陣を取固め、城の四方海陸を圍みて、政家・信生は先づ築河へ退かれ、遠攻にこそせられけれ。

戸原籠城 附 落去の事

爰に筑後の戸原薩摩入道紹心、又々龍造寺に對して逆意をなし、同年天正十月、田

合戦

尻と引合ひ、己れが戸原河内の城に楯籠り、府内へ通じて大友勢を引入れむとす。此事築河へ聞えて政家と信生相談あり。さらば先づ田尻をば押置き、戸原を攻めらるべしと、筑後衆をも催され、佐嘉勢と一つにして、同十月十四日、戸原河内へ討入られ、三手に分れて取懸けらる。其内、大手の先陣は小河武藏守、二陣は信生、搦手は後藤伯耆守、山の手は先陣高良山の座主良寛、二陣納富能登守なり。三方の寄手一同に鬨の聲を發し鐵炮を放掛け、即時に城戸を打破らむとす。城中よりも同じく鐵炮を打違へて、其音百千の雷に異ならず。信生の手には筑後の蒲池兵庫頭家恒・西牟田新介家親來り加り先を駈く。神代家の陣代同名彈正忠内田美作入道卜菴も一つになり、無二無三に攻め入らむとす。城主戸原入道、士卒を下知し強く防いで相戦ふ。時に寄手佐嘉勢の中より松田權介、小河武藏守の手に屬して相戦ひ、鐵炮に中りて高股を打貫かれ、持永治部大輔盛秀も、信生の手にありて疵を蒙り、神代勢の中より三瀬長門守、痛手を負うて半死半生なり。歸陣して死す。其外綾部尾張守幸義・高木左馬大夫盛秀・原口平次兵衛憲秀・石井與次郎^{生年廿五}・石田新太郎・同萬五郎・千々石

甚太郎以下宗徒の者共討死し、蒲池・西牟田が手の者も、算を亂して討たれたり。搦手の後藤勢も、勵み戦つて死創多く、又山の手に向ひたる高良山の座主良寛、一陣に進んで同宿餘多討たせ、二陣の納富能登守も、其與力川浪大藏於保左衛門尉・小宮左馬允・牛島兵部丞・同新右衛門・石丸藤太左衛門・小柳彌藤左衛門等挑み戦ふと雖も、二の目の軍に小宮左馬允を初め若干討たれ、諸手ともに寄手怵へずして引退く。一、同十六日、寄手重ねて評議を加へ、戸原の城を攻む。先手は蒲池兵庫頭・西牟田新介なり。時に鍋島信生、手勢七百餘騎にて城の廻りを巡見あり。八戸左近大夫・鹿江伯耆守に下知せられ、先手の蒲池・西牟田が猶豫して進まざりしに申遣されけるは、早速懸らるべし。延引あるは二心ありと見えたり。其儀ならば則ち討果すべしと申し遣され、信生は先に大手の口へ押詰めらる。時にいつもの江副兵部左衛門、一番に大櫓に付いて味方を招くに、三ヶ島又右衛門馳せ來り、北島治部丞陣内相兵衛・大塚勝右衛門相續いて、塀の手に混々^{ひたたく}と付く。是を見て鴨打右衛門佐・江里口藤七兵衛・中野兵庫助・同名式部少輔・下村生運・大塚内藏允・石井

五郎右衛門・副島右近允・益田善兵衛・澁谷善右衛門・杉町刑部・中橋平兵衛・同勘兵衛・小柳源兵衛も續いて來り、塀を打破つて各々我れ先にと乗入る。此時、三ヶ島又右衛門分捕し、喉腕節に疵を蒙り、石井五郎右衛門も手を負ひたり。南里太郎三郎生年十五歳、城兵の戸原五郎と引組んで臥す。戸原は大の男にて、南里危く見えけるを、鍋島大膳駈け合せ、戸原を仰け首を搔く。此外田中日向守泰景同嫡子相兵衛賢秀・二男源右衛門・三男新左衛門父子四人、丑寅の方二の丸より乗込みけるが、日向守は討死し、相兵衛は深手を負ひて働き得ず。歸陣して死す。弟源右衛門、土手を越えて相戦ふに、副島右近允來つて、源右衛門を援けて挑戦す。爰に後藤家信の家人土岐心學入道と、戸原が侍駈け合せ、馬上にて切合ひしが、後には馬より下立ち引組で臥し、雙方差副を以て互に刺透しける處を、兩陣より落合ひて共に左右へ引分けたり。斯かる處に、鍋島信生の手より武藤善兵衛貞清、例の火午を以て城中を焼立つ。中野式部少輔清明も、城中に火を掛けしかば、餘焰類に覆ひて城主戸原入道紹心堪へ兼ね、いづくともなく落失せけり。斯くて當城落去

戸原落城

しければ、政家・信生、諸勢を引いて築河に歸陣せらる。

或はいふ、當城落去は天正十一年十月十四日。又十七日とも。

又いふ、天正十年八月とも。又いふ、天正九年とも。

或はいふ、此時城主戸原薩摩守親隆并に豊饒中務大輔鎮連、當城に於て討死すと。非なり。豊饒は去年六月鹽塚にて討死なり。

一、此頃薩州の島津兵庫頭忠平・伊集院右衛門大夫忠棟、肥後に在陣し、龍造寺方の輩と相戦ふ。然る間、今年十月、龍造寺より彼の表の城々へ番人を差加へらる。中にも横島の城番には高來衆中一識、海上手寄たよりの間罷渡るべきの由、隆信下知あるに依りて、有馬鎮貴よりは安富左兵衛入道徳圓を差出し、其外安富下野守純泰以下、高來島中の歴々、十月九日より肥後へ渡海し、横島の城に入りて在番しけり。佐嘉よりの檢使は下村生運なり。

薩摩勢田尻鑑種へ加勢の事

薩摩勢鑑
種に加勢

斯くて田尻鑑種は、數日、龍造寺の大軍に、東西南北透間なく取圍まれ、始終の軍難儀に思ひしにや。十二月中旬、島津兵庫頭・伊集院右衛門大夫の、此時肥後に在陣しけるに、事の仔細をいひ遣し、向後に於て薩州へ相屬すべきの間、此度加勢を給はりたきの由懇望す。斯かりし程に、兩人則ち領掌して、互に神文を替はし、頓て加勢の人數を差越すべきの旨申談じけり。茲に因つて翌れば天正十一年癸未正月十三日、薩摩より伊集院若狹守・河俣甲斐守・柏原將監・瀧聞越後守・本村淡路守・田尻荒兵衛・怡佐彦左衛門・矢口宮内少輔・矢野篁介〔帖九〕等人數三百餘、乗船を以て筑後へ押渡り、鷹尾に著船し、則ち田尻と一つに籠城して、鑑種に力を合せ、兵糧等まで運送し、其上薩州より使者飛脚を以て、折々音信を通じて、様々懇情を加へけり。然る間、田尻大に機を得、津留・濱田・堀切・江の浦・鷹尾五箇所の城、彌々異議なく持堪へけり。

肥後の赤星筑後の祝部質人殺さるゝ事

龍造寺隆
信赤星の
質人を殺
す

既に田尻、薩州の援兵を得て籠城猶ほ堅固の由、肥前へ聞え、隆信又々築河まで參陣あり。暫く逗留まし、田尻征伐の相談ありける内、肥後の赤星統家は、蒲池鎮竝の舅にて、鎮竝佐嘉にて切害の後、龍造寺に對し恨を含む由聞えしに依りて、隆信狐疑を起され、則ち八代へ使者を遣し、彼の赤星統家を築河へぞ召されける。統家は元より龍造寺へ異心なく、男子を質として築河の城に差置きし上は、仔細に及ばず畏り申す由返答しけるが、兎角に滯つて二三日延引しけり。斯かりし程に隆信、彌々疑ひ思はれ、成松遠江守・木下四郎兵衛を兩使にて、急に赤星をぞ呼ばれける。されば統家が極運にや。折節近邊の山中に猪を擇ねらひに行きて在合せず、妻女出合ひ兩使に對面し、統家歸宅の後、則ち築河へ罷越すべきの由斷り申しける程に、成松・木下方に及ばず、築河に歸り隆信へ斯くと申す。然る間、隆信限なく立腹あり。急に赤星が妻女〔を〕が有無、爰許へ唯今連れて參るべしと、右兩人を押返して、八代へ遣し申されけり。成松も木下も、迷惑には思ひしかども、隆信以外の外に氣色變つて見えしかば、すべき様なく、其儘又八代へ赴きしに、統家は未だ宿所に歸らず。兩

肥後の赤星筑後の祝部質人殺さるゝ事

人則ち妻女に對して、能きに申し拵へ、八歳になりける美麗の娘を召具して、早速築河へ歸り隆信に見せ申しけり。然るに隆信、猶も忿闔に堪へず、最前より築河にありける彼の赤星が質の太郎の今年十四になりけると、今の八つに成りし娘を、筑後と肥後の境竹の井原へ引出し、兄弟共に磔に梟けられけり。是を見る者、皆涙を流さぬはなし。赤星夫婦の歎きいふ計りなく、島津忠平の其頃甲斐宗連を攻めて、肥後の御船に在陣しけるに、夫婦泣く泣く行いて事の仔細を語り、龍造寺に到つて此鬱胸を一度晴させて給はり候へと、手を束ねて悲みけり。斯かりし程に、島津も涙を流し、心安かれ。何様隆信に其怨みを報いて得さすべしとぞ肯はれける。

或はいふ、赤星統家、今度隆信の召に遅參せしは、一つには塔の蒲池鎮竝を誅せられしに懲り、二つには又之を憤りての事なりと。

此赤星、隆信を深く恨み、翌くる天正十二年の三月、島原に於て島津勢の先手を申請ひ、龍造寺と合戦し。僅か主従五十餘人を以て、佐嘉の大軍を切崩し、剩へ隆信を討取りぬ。是子供の怨みを報ゆるの一念なり。さのみ人には無情あり。

隆信鏡山
忠實の質
人を殺す

るまじき者なり。此赤星が子、別にもあり。三郎武重と號す。先年大坂一亂の時籠城す。御赦免の後、早世して子孫なし。

或はいふ、彼の赤星統家が質人の子供、初めは肥前縮江しゆくちの無量寺に置かれしとも。

一、高良山の太祝部鏡山安實も、龍造寺に背くと聞えしに依りて、隆信下知を加へられ、彼の質人の妻女、歳未だ盛櫻なりしを、築河の城より出し、高良山の麓と岩井川の邊に生磔に梟けられけり。斯くの如きの事ども疊かさねりて隆信を疎む者多し。或はいふ、此祝部の妻女は、佐嘉の水ヶ江にて磔に梟けられしとも。時に金襴の小袖を著す。是を見る者落涙しけるとなり。其舊跡は岩井川の邊りにあり。

蒲池益種落城討死の事

此頃築河の近邊蒲船津の城に、蒲池益種といふ者あり。本姓は黒木兵庫頭鎮連が弟なり。されどもさる仔細あつて、蒲池と稱す。元來鎮竝・鑑種が親類なり。是も龍

造寺に野心を挿み、己が居城に引籠りけり。然る間、鍋島信生七百餘騎にて、蒲船津へ取懸けらる。百武志摩守・多々良壹岐守を初め、信生の手の者富岡喜左衛門・下村生運・野田右衛門允陣内相兵衛・杉町藤右衛門以下、我れ先にと進みて打戦ふ。中にも辻小左衛門〔門脱〕・増田善兵衛敵を討つて首を取り、江副六郎左衛門粉骨を抽んで、下村生運が被官藤五左衛門討死す。時に城兵も命を際に防ぎしかども、竟に城戸口を攻め破られ、城主益種は陣内相兵衛に討取られて、城は不日に落ちたりけり。斯りし程に百武志摩守信兼、則ち入替はりて當城を相守りぬ。

ある記にいふ、此時城兵の長中山筑前守を、杉町藤右衛門討取るとあり。非なり。彼の中山は蒲池鎮竝の老臣にて、築河籠城の時、江副兵部左衛門討取りぬ。其證人園田主計允、則ち其場にて信生へ披露す。但し又今此中山の別仁なるか。

一、此時島津兵庫頭忠平、肥後の八代に在陣して、阿蘇・相良・甲斐以下龍造寺方の輩と相戦ひ、數度の勝利を得たり。時に肥後の國人等、多く島津へ降參す。

高來深江城軍の事

今年天正十一年の夏、高來島深江の城主安富下野守純泰、龍造寺に一味して島津有馬と相戦ふ。其次第を尋ぬるに、去年一月九日より隆信の下知として、當島中の輩有馬家人を初め、肥後の横島の城番に赴き、下野守も其人數なり。然るに有馬左衛門佐鎮貴、其留守を計りて、又々龍造寺に至つて心を翻し、島津に一味すべき由いひ送り、先づ龍造寺へ手切の爲め、布津村・深江村を放火し、下野守が深江の城際まで取詰む。此時下野守は横島へ赴き、父伯耆守純治は、島原式部大輔純豊が島原の城の入番にて在合さず、深江の城中なか／＼無勢にして防ぎ難く見えしかども、下野守が妻女并に留守居の者共百姓以下まで同前に相働き、敵の足輕少々討取り勝利を得、領知三箇村の男女・牛馬まで、悉く城内に取込め城を持堪へたり。然るに此時、下野守が祖父に但馬守貞直といふ者あり。入道して正佐と號す。至極年老いし故、老耄して有馬方に心引かれ、様々危き事ども多かりしに、下野守の妻女、頗る

賢女にて正佐を押籠め、城中を下知し、悉皆彼の女姓一人の働を以て籠城す。此事横島へ早速聞えしかば、下野守、同十一日深江に馳せ歸り、安徳上野介・島原式部大輔は元より一味なりしかば、其城々段々相續き、彌堅固に城を持ち、有馬方の軍兵と日夜防戦しけり。斯くて有馬方、色々行を以て是を攻めしかども、下野守が家人其外百姓以下まで、骨を碎いて相働き、去年天正十年は歳を重ねて籠城す。

一、斯かる處に、今年四月廿八日、深江一味の安徳上野介純俊、如何なる所存や出で來りけむ。俄に心を變じ有馬方となりて、薩摩勢を己が安徳の城に招き入れ、佐嘉の通路を絶ちて、龍造寺に對し逆意をなしけり。此上野介は下野守が爲には伯父にて舅なり。是より深江と佐嘉の通用相切れ、下野守難儀に及びて、島原山・鞍掛越温泉山傳ひ、忍々の通路にも、途中にて家人等多く討たせけり。斯かる半に薩摩より有馬・安徳へ加勢として、伊集院肥前守・新納武藏守・同長男刑部大輔・樺山播磨守・福崎新兵衛・河上左京亮、其外八代侍に簗田平右馬助を初め、七千餘騎高來へ押渡る。此勢は皆島津兵庫頭忠平、此頃八代にありて下知を加へ、肥後よ

安徳純俊
の變心

り差向けしとぞ聞えし。斯くて島津よりの加勢、各、安徳の城に入りて、有馬勢と同じく安富下野守が深江の城へ取懸け、兩方より差詰め、火矢を射懸け鐵炮を放つて烈しく攻め戦ふ事、夜晝十八日が間なり。されども城主下野守、下知を加へ稠しく鐵炮を打たせ、敵の火矢を消させて大に禦ぎ戦ひ、島津・有馬の敵軍を追散らしけり。此事、隆信へ注進ありしかば、急ぎ加勢を越すべしとて、筑後の安武式部大輔家教・三根郡の横岳兵庫頭家實を、高來へ差越され、深江の城へ入れられ、其後、藤津・彼杵の輩へも下知ありて、安富をぞ援はれける。其上又兵糧の用にとて、多比良村にて五十町の田地を相渡されし間、下野守彌心強くなりて、睨と籠城しけり。

一、斯くて同六月十三日、安富が深江の城中にありける百姓共、薪取に在郷へ行きしが、安徳の百姓共と出合ひ鬪諍に及び、安徳の者を二三人討殺しけり。此事、安徳の城中へ聞えて、島津よりの入番新納刑部大輔・河上左京亮・簗田平右馬助以下若武者共數十人、皆生膚にて急に安徳の城を駈出で、深江の郷民を追立て、深江

の城外構口まで追詰む。茲に因つて城中より安富三介人数を催し、早速討つて出で、其外加番の横岳・安武が手の者も切つて出づ。中にも安富三介と安武式部大輔手を碎き、五郎右衛門誰とも知らずが屋敷の前にて討ちつ討たれつ、太刀打するもあり、槍を合するもあり、大汗を流し火を散らして相戦ふ。爰に新納刑部大輔と、安富の家人村吉雅樂助と渡り合ひ新納を突いて臥す。然れども村吉も亦、新納が槍に手を負ひしかば、首を取ること叶はず。時に横岳の家人古館播磨守駈け寄りて新納が首をぞ取りける。其外大將分には、簀田平右馬助も討取られ、上下八九人討たれにけり。其中新納・簀田は二十三の若武者なり。又爰に河上左京と安富三介と切合ひしが、三介は河上に討たれ、河上は三介に切られ、手を負ひて引退く。總じて今度の一戦は、彼の三介一人の働なりけり。斯くて薩摩の者共、大將分二人は討たれ、一人は疵を蒙り、其外八九人討たれにければ、残る者共悉く安徳として引退く。深江の城兵、勝に乗つて町下堂の前まで追討にして、又少々討取りけり。城兵にも安富が家人には、同名三介を初め數多討死す。番人横岳家人

には、宗彦兵衛・中島將監并に秀島隼人挑戦つて各々高名し、安武が手の者も戦功を抽んでけり。されば今度の戦、俄の懸合急なる事にて、殊に手を碎き働ける者共は、三介を初め皆其場にて討死しければ、彼の新納・簀田が頸をも何某討取り、又は誰の頸とも、最初は分明ならず。されども其頸の體・脇刀の様子唯者ならず見えしかば、城中の輩皆不審に思ひしに、圓宗掃部是を見知つて、斯くと申し出でけり。扱下野守より、右兩頸を佐嘉へ差送り、隆信の實檢に入るべしとしける處に、敵方より頸桶等尋常の拵にて矢文を以て、彼の頸を所望す。斯かりし間、下野守弓箭の作法黙止し難くて、右兩頸を敵方へ差渡しけり。然るに此軍の次第、安富・横岳が方より隆信へ注進す。依りて横岳家實への返書にいはいはく、

立川讚岐守所迄御細書之趣、令承知候。去月十三日於其表被逐一戦、敵宗徒之者共歴々被討捕之由、御粉骨御辛勞之次第不及申候。雖無申迄候、彌々無御緩御覺悟專一候。此口於一著者、如其表指渡一行不可有緩〔念脱〕候。猶期來音之時候。恐々謹言。

七月廿三日

龍山

隆信列

家實

まゐる申給へ

江浦攻薩摩衆鷹尾を引拂ふ事

龍造寺隆信は、其頃田尻鑑種が鷹尾の城を攻めて築河に在陣あり。然るに去冬より田尻を圍まれ、今に至りて長陣に及び、士卒の辛勞を痛み思はれしかば、鍋島信生に談合せられ、急に先づ田尻了哲入道が在番したる江の浦の端城を攻め落すべしと、則ち信生以下の佐嘉勢に、肥後・筑後の輩を差加へられ、江の浦に到りて取詰められ、竹木・蘆萱・土俵等を以て山を築立て、次第に仕寄り、既に城の切岸まで詰寄られ、堀一重に攻め寄せて、築山の蔭より鐵炮軍、數日の間日夜止む時なし。斯くて去ぬる正月、薩摩より田尻へ加勢の輩、鷹尾の城にありけるが、數日の籠城に困窮し、其上遠國に依りて、その後、薩摩よりの續けもなかりしかば、力に及ばず薩摩へ打

隆信田尻の江の浦を攻めしむ

薩摩勢歸國

歸りけり。斯かる處に同じく七月中旬、秋月長門守種實、田尻とは同じ大藏姓にて、漢の高祖の苗裔なり。その好を以て、鑑種、此度家滅亡すべき事を歎き、龍造寺と和平調達の爲め、家人惠利内藏助を鷹尾へ差遣し、雙方に相談して、七月二十一日、龍造寺と田尻既に和平に相決し、兩家互に神文をも取替はしけり。然る處に、また入組み六箇敷き事ありて、右一著破れしかば、鑑種再び龍造寺と鉾楯に及び、彌籠城日を累ねけり。

或はいふ、この時、秋月種實、自身鷹尾へ來り和平を愾あつかひしとも。非なり。舊書にいふ、この時、高良山の座主麟圭も和平を談合して、既に一著すと。然れども右入組み六箇敷く一著違變なり。入組とは田尻居所の事、次に領分替地のことなり。この札答六箇敷くして、今度種實・麟圭が中和濟ますことなり。

鍋島信生重ねて豊臣秀吉へ音通の事

今年六月二日、京都不慮の一亂ありて、右大臣平信長、家臣明智日向守光秀の爲に

江浦攻薩摩衆鷹尾を引拂ふ事

鍋島信生重ねて豊臣秀吉へ音通の事

鍋島信生
再び秀吉
に音通す

生害せらる。然るに太閤秀吉、其寵臣として、此時は未だ木下筑前守と申し、播州姫路の城主なりしが、折節中國の毛利輝元を攻めて、備中國に在陣あり。主君の弔軍とむらひくさの爲め、早速上洛せらる。此時、鍋島信生より土肥出雲守信安・水上坊仁壽を以て、秀吉へ一書を送らる。其返札にいはいはく、

如仰去年之頃示預候。就夫唯今兩人被差越、書中并口上之趣承届候。隨而今度於備中表敵城數箇所攻崩、毛利陣中切懸り可相果刻、京都不慮に付而、毛利相抱候國五箇國、此方江可相渡、與懇望之筋目を以、令和睦馬を納、則都江切上及一戰、即時切崩、三千餘打取、明智一類共不殘首を刎、其身之事ははた物に掛置候。然者御國々如前々靜謐申付、一昨廿九日令上洛、近日於播州姫路可歸城候。就中任被仰越旨、申通上者不可有疎意候。將又南京帽子送給候。祝著之至候。猶期後音之時候。恐々謹言。

七月二日

鍋島飛驒守殿

羽柴筑前守

秀吉判

或はいふ、信生、秀吉に初めて通せられしは、去々年天正九年なりしと。然れども此文談を以て見るに、去年天正十年に初めて書通ありと見えたり。一、八月朔日、安富下野守純泰、龍造寺の加番人と人數を合せ、安徳の城へ取懸けたり。時に城中防ぐ事を得ず、薩摩よりの加勢新納武藏守を初め、伊集院・樺山・河上・福崎以下船に取乗り、肥後國に引退きけり。此時、肥後の隈部が子、近年龍造寺へ質人として築河の城にありけるが、折節肥後へ歸り、薩摩勢に取籠められ、敢なく討たれにけり。

龍造寺政家肥後出馬國分の事

同年十月、島津兵庫頭忠平、肥後に在陣して、國中を掠め所々へ相働くに依りて、龍造寺方の輩多く降參するの由、築河へ聞えしかば、其頃隆信は須古へ歸られ、政家・信生談合を以て、政家自身、肥後へ出馬ありて、彼の表の旗下共を援はるべしと議定せられ、田尻をば多勢にて押へ置かれ、分國を陣觸あるに、筑前には筑紫・秋月・筑

龍造寺政
家肥後に
出陣

龍造寺政家肥後出馬國分の事

後には蒲池・草野・黒木・西牟田・高良山の座主皆出勢し、肥前勢と合せて都合三萬七千餘騎の著到を以て、同十月、政家、築河の城を打出でられ、瀬高通りに竹の井を過ぎて肥後へ打入り、南の關に陣を居ゑられ、先手は玉名・合志に到つて、高瀬・山鹿へ相働く。然るに津島忠平、頃日は御船に陣してありけるが、龍造寺の大軍にて攻め來る由聞えしかば、さらば出向つて戦ふべしと、肥後國の味方共を催し、其外伊集院・新納・樺山・喜入・河上・福崎等の手勢を合せて、御船の陣を立つて出向ふ。斯くて島津・龍造寺對陣ありて、既に大なる合戦あるべきに、秋月長門守種實、此時龍造寺の催に依りて參陣しけるが、兩家の大軍相挑むこと年を累ね、民の煩ひ之に過ぎずと兩陣に入りて、様々是を宥め和平に愀あつかひしかば、龍造寺も島津も、秋月が申すに任せ、竟に和平一著して、最前約束の如く、肥後を半國宛分けて領知あるべきに相定まり、忠平は八代へ馬を納め、政家は築河へ歸陣ありけり。是よりして當國高瀬川より巽の方を島津領と定め、新納武藏守忠元、御船にありて分内を守り、又乾の方を龍造寺領として、龍造寺上總介家晴を彌、南の關に居る置き、太田右衛門大夫

龍造寺島津和平

家豊・内田肥後の入道榮節を、大野別府へ召置き、横岳下野守頼續・姉川兵庫助信秀を、横島の城に差籠め置きて、各其境を警衛ありけり。此時、肥後の國侍に栗栖刑部少輔正重といふ者、龍造寺に屬して神文を呈す。

田尻鑑種龍造寺へ降參の事

同十一月、田尻丹後守鑑種、今に至り五箇城を持つて籠城す。然るに政家は、頃日肥後より築河に歸陣あり、彌、田尻を攻められけり。中にも鍋島信生は、田尻了哲が在番したる江の浦の城を取圍み、僅か堀一重に詰寄せられ、蘆萱・竹木等を以て山を築立て、其蔭より段々仕寄りて鐵炮を打たせられ、又釣勢樓を用意して、城内の鐵炮を除かむ爲め、鐵を多く集め、其鐵を以て彼の勢樓の表を圍ひ、内は綿にて能く拵へ、是を釣上げて城内を相窺ひ、堀は芥草を以て是を埋められ、又右の勢樓よりも、鐵炮を城内へ打込ませらる。然るに城兵、是を防がむ爲め、大鐵炮を以て件の釣勢樓を打落し、夜は續松たいまつを投げ掛けて、彼の築山を燒崩し、又は堀の部草はめをば、岸を穿ち大

鑰を以て引捲り、敵味方互に種々の行を廻らし、防ぎ戦ふと雖も、更に勝劣なかりけり。然る間、田尻が籠城已に五百日に及びぬ。爰に鍋島信生、情々思はれけるは、彼の鑑種が此年月の忠功、誠に莫大の事なり。然るを今度攻め潰し、數代の家を滅さむも、流石無情事つれなきなるべし。所詮、彼等を賺し、和平をなして下城さすべしと思はれしかば、頃日百武志摩守が蒲船津の城に在番せしを差招かれ、足下は田尻了哲と無二の會釋と聞ゆるの間、了哲へ行きて鑑種何とぞ和平致し、以前の通り當家へ隨ひ候様に、内談あるべしと申されしかば、志摩守其意を得、急ぎ江の浦へ赴き了哲に對面し、鑑種和平の事色々談合す。了哲尤もの事に思ひしかば、鷹尾の城に入り、鑑種を様々宥め教訓しける間、鑑種も今に於ては心解け、了哲が申す旨に隨ひて和平すべきにぞ決定しける。斯くて百武方より、鑑種が所存の通を、小河武藏守信貫まで一々相談しけるに、隆信父子・信生へも、其旨披露あり。鑑種より願の通りに一著して、同月廿七日、隆信・政家より別儀なき由、神文を送られ、和平睨と調ひ、十二月朔日、田尻一門九人連判を以て神文を差出し、同月十日、鑑種居城鷹尾の城の築

地を破却し、近々彼の城を去り渡すべきに相定まる。時に鑑種は、世外法體の様なりしかば、嫡子長松丸を本人とし、堪忍分の新地二百町差出さるべき旨約束せらる。此時又別儀なき由、鍋島信生より長松丸へ神文を給はり、其上龍造寺の宿老三人小河武藏守・納富能登守・土肥出雲守よりも連署を以て神文を差送りけり。斯くて同十二月下旬、鑑種、本城鷹尾の城を明け去つて龍造寺へ引渡し、其身は堀切の端城へ下城しけり。爰に於て長松丸へ、隆信父子より同月廿五日、兩判形を以て肥前佐嘉郡巨勢の内二百町、約束の如く之を給はり、鑑種父子家中の輩、翌くる天正十二年甲申二月二日、所替を以て、船より肥前の佐嘉へ罷渡り、籠城二箇年にして和平す。

ある記にいふ、江の浦落城し、鑑種力盡さしに依りて、降參しけるとも。非なり。密記にいふ、田尻鑑種、去冬籠城以前より舊主大友義統に通じて、龍造寺へ逆意をなし、籠城中にも大友へ音通し、豊後よりの見次勢みつきせいを頼みて居たり。然れども義統愚將に依りて、兎角に滞り其加勢延引す。之に依りて其間を延さむ爲め、暫

く島津へも據りて加勢を乞ひけり。然れども大友加勢、猶延引に付いて、田尻籠城、今に於ては堪へ難く思ひし半ば、同名了哲、百武裁判を以て、幸に下城すと見えたり。此時、大友義統并に朽網宗歴くたみ入道より鑑種への狀に委し。之を略す。

北肥戦誌 卷之廿七終

北肥戦誌 卷之廿八

高來軍龍造寺隆信戦死の事

天正十二年甲申、薩州の太守島津修理大夫義久、去年の夏、高來深江の軍に、新納刑部大輔・簗田平右馬助、敢なく討たれしに依りて大に腹を立て、急ぎ高來へ加勢を差越し、有馬・安徳に力を合せて、龍造寺方の者共を一々退治すべき由、舍弟兵庫頭忠平の頃日肥後の八代に在陣したるに下知せらる。然る間、忠平、同正月、新納武藏守忠元が御船に居たりしに軍兵を差副へ、有馬以下へ加勢として高來へ遣しけり。斯くて忠元、早速高來島へ押渡り、先づ有馬左衛門鎮貴へ參會し、夫より安徳上野介が城に入る。此事、龍造寺へ聞えて、隆信、政家談合せられ、さらば此方よりも、高來の味方共へ、人數を増して力を副へよと下知を加へられ、同二月、先づ神代兵

島津忠平
高來に出陣

部大輔貴茂を、安富下野守へ加勢とし、深江の城へ入れられ、其外、藤津郡の輩原・嬉野・吉田・永田等を以て有馬を押へ、大村信純を三城へ差置かれ、海上には田雜大隅守を船大將にて番船を附けられ、數日の間、有馬・島津の者共と、龍造寺方の輩所所に於て相戦ふ。

一、此時島津兵庫頭忠平、八代にありて肥後國中を大半掠領するの由、相聞えしに依りて、同二月下旬、龍造寺の面々、又々肥後へ參陣あり。時に田尻鑑種、始めて佐嘉の新館より之に従ひ、諸勢異議なく頓て歸陣す。

一、斯くて高來の軍に島津・有馬の者共、龍造寺方の輩に動もすれば討負くる由、鹿兒島へ相聞え、島津義久評議を加へられ、兎角尋常の如くに戦ひなば利あるまじ。所詮中務大輔罷向ひ、萬死一生に決して、龍造寺方の奴原悉く討取るべしと申されしかば、舍弟中務大輔則ち領掌し、早速陣觸して薩摩・大隅・日向三箇國の中より、健兵三千を勝り出し、鹿兒島の鎮守の神前に於て、三千の者共一同に皆神水を飲み、今度高來の軍に打勝たずば、生きて二度歸るまじと誓ひて、十文

島津家久
出陣

字の白旗と采配を頂戴し、島津中務大輔家久、既に薩州を打立ち海陸を押して、三月十三日、高來の島へ著船し、安徳上野介純俊が城に入りけり。

一、此時、高來島中龍造寺の輩、安富下野守が深江の城へは、神代兵部大輔加番にあり。又島原式部大輔が島原の城へは、安富伯耆守・同次男新七郎入番しけり。然るに薩州の敵軍、段々高來へ入るの間、彼の輩是を防ぎ難く思ひしかば、其旨龍造寺へ注進しけり。隆信は此頃須古にありて、彼の注進を聞かれ、いでさらば、我等自身馳せ向ひ、有馬・島津が兩軍を一々駈け散らし、夫より鹿兒島へ討つて入り、義久と有無の勝負を決すべし。政家も同じく參陣すべしと、高來出馬の陣觸を犇々と急がれけり。扱隆信下知ありけるは、今度隆信・政家高來發向の跡の儀は、鍋島剛意入道を留守居とし、龍造寺越前守・納富但馬入道兩人城中にありて、諸事剛意と示し合はせ國衛を守るべし。鍋島飛驒守は彌・築川の城に居て筑後を押へ、龍造寺上總介は南の關にあり、以前の如く肥後の分内を相守れ、龍造寺安房守は、去々年より一の岳の城に居住するの間、彌、其儘にて内野・安樂・平・飯

守等の番人共と事々談合し、筑前・豊前の領分を守護すべし。其餘大村・松浦の輩は、船より神代の港へ出勢し、佐賀・神崎・三根・養父・小城の郡士は、皆隆信・政家が旗本たるべしと、夫々に分つて下知せられ、三月下旬、隆信父子既に高來へ出馬あるべきに相決す。

一、隆信父子高來へ參陣の事、鍋島信生、築河の城にありて傳聞き、心中に懸思はるる事色々ありしに依りて、叶はぬまでも隆信へ諫言を加へ、此度高來發向を留めて見ばやと思はれしかば、急ぎ隆信の居られし須古の城に赴き、隆信へ對面あり、三箇條の凶を擧げて様々に教訓せらる。然れども隆信承引なく、いやとよ飛驒守、爰許より高來に懸げ軍事を指揮するは、偏に彀をさして痒を搔くに異ならず。茲に因て自身彼の表へ馬を出すなりと、更に留まり給ふ氣色もなし。斯かりし間、信生も力及ばず。斯くて隆信・政家、三月十八日より打立たれしに、江上・後藤・神代を初め、小川・納富以下國中の歴々はいふに及ばず、隣國の旗下衆都合總勢五萬七千餘騎、皆兵を以て高木へ押渡る。中にも隆信・政家の佐賀勢は、龍

隆信父子
高來に出陣

王崎より纜を解き、同廿日に神代の港に著船し、其外は追々に或は廿二日・廿三日の間三會の津に著くもあり。或は神代に上るもありけり。斯かりし程に、鍋島信生も、築河の城へは父剛意入道を佐賀より招き居る、隆信・政家と同じく高來へ參陣あり、神代に著船せらる。

舊書にいふ、三月廿日より隆信高來へ出張とも。

一、既に龍造寺の大軍押渡るの由、先達高來へ聞えしかば、島津家久・有馬鎮貴評定を極め、夫々に軍を配つて相備ふ。先づ鎮貴が原・日の江の兩城には、其家人堀志・自岐・本田・林田・白石以下、畢竟の者共を籠め置き、鎮貴は其勢五千餘騎、島原へ押出で森岳に陣を張る。島津家久は手勢三千餘騎、三月十五日に安徳の城を出で、是も島原へ陣を寄せ、新納武藏守と左右に分れ、要害を前に當て、兩方は牟田にて中一筋の細道に城戸を構へ、柴垣を以て塀とし、其蔭に弓・鐵炮の上手數百人、矢先を揃へ陣を取る。爰に八代の赤星肥後守統家主從五十人計り、今度島津勢に加はりて天晴此時、龍造寺に到つて子供が仇を報はむものをと、齒を嚙みて先陣

島津軍の
部署

に相進む。斯かる半ば、伊集院右衛門大夫忠棟、頃日肥後にありけるが、隆信の出陣を聞いて、兵船を鳥の飛ぶが如くに押〔寄脱〕せ來つて、新納と一つに陣を取る。此兩勢合せて凡そ五千餘騎とぞ見えける。

龍造寺勢
軍評定并
に其部署

一、龍造寺隆信、三月廿日神代に陣を居ゑられ、爰にて軍の評定あり。先づ高來の味方を援はるべしと、所々へ押詰め防戦せられ、同廿四日には、有馬・島津が本陣島原森岳の要害を攻めらるべきに決して、軍を其口々に分けられけり。一手は政家に鍋島信生を相副へられ、敵陣の大手中道へ向はる。此時神代次郎家良、若年に付いて參陣に及ばず。仍つて同名彈正忠陣代にて其手の一勢、皆信生の軍士に相加はる。又一手は江上構兵衛家種、後藤伯耆守家信、城原・塚崎の兩勢を前後に従へ、濱の手に向はる。一手は隆信、旗本を以て山の手へ押詰めらる。其旗本の先手は、小河武藏守信俊前名信實。納富能登守家理、二陣は龍造寺下總守康秀前名信種。倉町左衛門大夫信俊、其外龍造寺の一族并に土肥・百武・福地・江副・安住・副島・鴨打・徳島・鹿江・西岡・澁谷・馬渡・前田・田代・重松・石井・諸岡・秀島・西村以下、都べて佐

嘉・小城・神崎の士卒、段々に備を定めらる。殿は藤津衆・嬉野・越後守・尙道・原・豊後守・尙家・同・越後守・氏家等なり。軍奉行は成松・遠江守・信勝・百武志摩守・信兼・圓城寺美濃守・高木太榮入道、單監は勝屋勝一軒と定めらる。

或はいふ、此時、殿の頭人は鍋島豊前守信房なりと。又いふ、信房は藤津郡を相守り、此時參陣せず、犬塚・永田以下と同じく、隆信高來出馬の留守を守護すとも。此信房、近年藤津の押おさへなり。

一、既に龍造寺の總勢五萬七千餘騎、三月廿四日の朝、口々へ分るゝの時、旗本より軍使を以て下知ありけるは、今度定めらるゝ所の手分、唯今碯と相變じ、中道へは隆信自身向はれ候の間、政家・信生は山の手に向はるべしといひ來る。然る間、兩將は則ち神代衆と共に、山の手へ差して押詰めらる。斯くて隆信、中道に懸り貝鉦を鳴して士卒を進められ、早敵陣の構城戸かまき近く押寄せられしに、敵靜まりかへつて音もせず、暫く控へて矢頃やまがらに引請け、柴垣の間より弓・鐵炮を放つこと、偏に雨の如し。時に赤星統家主從五十餘人、一樣に赤裝束に出立ち、城戸を開いて切

つて出で、前後を顧みず無二無三に突いて懸る。此時龍造寺の先手、眞先に進みし者共忽ち打負けて色めき立つ。是を見て跡に續きし味方、援はむとすれども、其道左右は沼にて中は僅の細道なれば、前に立つ者漸く五人・七人敵に當たり、後より援はれ様もなく、一向的になつて射臥せられ、退かむとすれども又後陣間へて退かれず。斯かりし程に旗本差支へ、一步も進み難く。隆信、氣を揉まれ馬廻より吉田清内を先へ遣し、様子見て參るべしと申されけるに、清内飽くまで推參なる者にて、先へ抜け大音を揚げ、先陣の面々隠して進まざる故に、二陣・三陣・御旗本まで差支へて進まれず。命を惜まず則ち懸からるべき由、大將の御下知なりと觸れたりしかば、先陣の軍士、大に腹を立て、よしさらば死を一舉に定めよとて、小河・納富の者共、左右の沼に駆入りく相進まむとす。是を見て二陣・三陣・旗本の士卒に至るまで、我れ劣らじと彼の牟田へ飛込みける程に、草摺・上帶・胸板まで見えず、部りて働き得ず。總じて乗馬は船數詰まりし故、多くは牽かれず、大方は陸立なり。赤星が五十餘人を初とし島津の軍兵、此體を見て得たりか

しこしと、箆を叩き勇をなし、差取り引詰め能き者を見すまし射ける程に、佐嘉勢遁るゝ者もなく、眞先に進みし小河武藏守・納富能登守・龍造寺下總守倉町左衛門大夫以下宗徒の輩數百人、算を亂して討死し、其外の士卒、右往左往に敗北す。其中に小河が與力安住石見守・堀江兵庫助は小川と一所に討たれたり。松田權助も小河が側にて、敵の放つ鴈俣を足に請留め働き得ず。田原源左衛門疵を蒙り、組頭納富常陸介より其場にて胴服を得さす。秀島隼人同甚右衛門同じく疵を蒙り、同名進士左衛門も矢の手を負ひ、被官兩人討死す。中島次郎兵衛同九郎兵衛踏留まりて敵二人を討つ。證人野中權右衛門・七田五郎兵衛なり。石井三右衛門、時に十六歳敵を討つて首を取る。證人八戸掃部助なり。田代次郎助、近づく敵三人鐵炮にて打倒す。此外今村右衛門助・牛島新右衛門・高岸主水・川浪作右衛門・青木九郎兵衛等進みて相戦ふ。隆信は大肥滿の大將にて、馬より山鴛籠に移り、小高き所に直られ床机に腰を懸け、味方の軍兵共が或は分捕し、或は討死するを少時一見せらる。斯くて島津の者共、彌勝に乗り、龍造寺の士卒悉く

命を殞す。然るに此頃、隆信四天王とて四人あり、成松遠江守・百武志摩守・木下四郎兵衛・江里口藤七兵衛なり。其内、木下は此時鍋島信生の手に屬して山の手の戦にあり。江里口は敗軍の習にて、いづくにありとも知れず、成松と百武は敵を防いで居たりしが、中にも成松は主従十六七人に討ちなされ、とある所に息を休め、傍輩共の段々に討死するを見て、早此信勝が死時も今なるべし。いでさらば大將の目の前にて討死し、兼ねての君恩を生前に報い奉るべしといひく、金に口を出したる扇を開き、敵を塵いで呼ばはりけるは、是は先年豊後の大友八郎を討取りたる成松遠江守といふ者ぞ。敵に於ては不足あらじ。首取つて褒美に預れと高らかに申しければ、薩摩勢百人計り、一同に嘩と切懸る。遠江守長刀押取り渡り合ひ、東西切つて廻りしに、家人共皆討たれ、自身は敵七人薙倒し、八人に當るときは終に討たれにけり。嫡子又兵衛も同じく討死しけり。百武志摩守は主従四十餘人にて、隆信を落さむ爲め、近づく敵に駈塞かきがりく、打戦うて一人も残らず討死す。圓城寺美濃守は、大將と態と同じ毛の鎧を著して有りけるが、我

こそ龍造寺隆信なりと名乗懸け、敵中へ駈入り切死す。高木太榮入道は、是まで大將の側を離れず居たりしが、つと立つて敵に向ふを隆信見られ、太郎は種に残れ残れと制せらる。されども太榮、耳にも入れず敵に駈入り討死す。太榮、俗名太郎といふ。時に隆信の側には小性の鴨打新九郎・田中善九郎・福地のな居たりしを、今はかうよと思はれしにや。先づ鳴打を召して、渠等が前髪を手づから房と切られ、顔に颯とゆり懸けられ、扱宣ひけるは、汝は未だ若年の者なれば、人の嘲りもあるまじきぞ。早く此場を落ちよとあり。新九郎打笑ひ、弓矢取る身の主の先途を見捨て逃げ去る法の御座候や。兼ねての御厚恩には、せめて御目の前にて討死仕るを御覽候へと申捨て、群りたる敵中に主従六人駈入りて、十四五人切臥せ、其身もそこにて討たれにけり。生年十六歳なり。是を見て田中善九郎、泪と共に隆信へ申しけるは、公御腹を召されなば、某御介錯は仕るべしと、唯今まで御前に在り候へども、敵餘りに間近く襲ひ奉り候程に、某は死出の山の御先仕るなりと、福地のなと共に慕ひ來る敵に駈合はせ、散々に切合討死す。福地のな、本名千といふ禿なり。隆信常々戯にのな

と呼ばる。隆信は近習の者共が斯様に皆討死しけるを見られ、今は早是までなりと大高音を出して其名を名乗られ、終に敵に總角を見せられず潔よく討死せらる。薩州の侍大将河上左京亮進んで隆信の首を給はりぬ。時に天正十二年二月廿四日未の刻の合戦、隆信行年五十六歳なり。爰に小姓の中馬渡九郎左衛門は、敵中に戦うて隆信戦死ありしを未だ知らず。然るに敵の射ける矢を請け留め、其矢を抜かむと田の畔に立寄りける時、隆信、早討死の由聞きしかば、則ち又敵中へ駆入りて討死しけり。江里口藤兵衛と申すは、元は鍋島豊前守の侍なり。未だ生残りてありけるが、隆信既に河上左京が爲に討たれ、其首敵陣にありと呼ばはる聲を聞いて、今はいづくをか期すべきと、討死の者の首を切り、左の手に提げ亂髪になりて敵に紛れ、島津中務大輔家久が、弓杖にすがり馬上より敗軍を追はせてありける處に相近づき、味方の分捕見參に入ると匂つて、持ちたる首を投懸け家久を礎と斬る。家久運強うして、高股を少し鞍の前輪に切付けられ馬より落つ。時に家久が馬廻の者驚いて、江里口を取籠め切殺しけり。家久起上り、夫は無雙

の剛の者ぞ。助けよくと申しけれども甲斐ぞなき。此外龍造寺の士卒に中道へ向ひし者、凡そ生きて歸るは稀なりけり。されば其死骸、或は泥土に觸れ或は野徑に横たはり、算を亂すに異ならず。

一、江上構兵衛家種は、城原の軍士を引いて後藤家信と相備にて、濱の手に向はれ、関の聲を揚げて攻め戦はれし其半、中道の味方打負けて、隆信討死あるの由聞えしかば、家種、泪を鎧の袖に懸け、さらば爰にて家種も父と同じく討死すべしと、真先に立つて撃ち戦はる。此家種と申すは、當世無雙の大力にて、實まことよき鎧を二領重ねて著流し、三間柄の槍を二三本一つにひつ掴み、群る敵に割つて入り、死狂に狂ひて當るを幸ひに打倒さる。是を見て城原の一行、家種の命に代らんと、執行越前守種兼を初とし、嫡子新介種直、次男新九郎、同名式部大輔、同與三右衛門、同内藏助、同四郎左衛門、同又兵衛、諸岡安藝守、同名對馬守、同次兵衛、同内藏允、江上左近大夫澄種、同名孫右衛門隆種、同太郎次郎、同彦四郎、枝吉三郎右衛門、此時守と號す。島治郎大輔、同上野介、同與五郎、同彌次郎、生野孫左衛門、江副中務允、西筑前

江上家種
奮戦

家種城原
に退却

後藤家信
奮戦

守・畑地主馬允・牟田口進士允・古賀右衛門允・石橋三郎兵衛以下、執行一組三十餘人、諸岡一組廿餘人、我れ先を争ひ駈入りく相戦ひ、一人も残らず同じ枕に討死す。其中に鍋島丹波守種房・枝吉清兵衛此時大藏・諸岡清左衛門・江藤助右衛門・青柳九郎左衛門・小柳清右衛門は、家種の前後を相離れず命を捨て、打戦ひ、枝吉は敵の首を取り手疵三箇所蒙り、小柳も敵兩人討取り、家種の實檢に入れ、其身四箇所の槍手を負ひ、青柳も同じく敵の首を取る。斯くて家種は、敵多勢にて押取籠め散々に射れども、鎧よくして裏搔かず、件の槍を以て敵數十人討倒し、當りを拂つて見えられしかば、敵一人も近付かず。斯かりし程に、さのみは如何に戦ふべきと、死残りし者共僅を連れ、三會まで出でられけり。道々にて様々の難儀多かりしに、鍋島丹波守・江藤助右衛門其外相働き、漸く小船を求めて先づ筑後へ押渡り、夫より城原の城へぞ歸り入られける。

一、後藤伯耆守家信も、塚崎の軍兵を司つて、江上家種と同じく是も濱の手へ向はれしが、戦ひ半なかばなりし時、隆信討死ありし由、陣中隠れなくして、家信大に嗟嘆あり、一向討死を思はれしにや。自ら敵に當ること七八度、大長刀にて薙臥せし、目を驚かす振舞なり。是を見て弓奉行執行三郎兵衛、主の前に駈塞り敵二人切臥せ、三人に當つて討死す。其外八並新三郎信明家信の異弟なり・馬場隼人佐古賀紀伊守・鬼石周防守・古川和泉守・千綿一平・畑地了信・同七兵衛以下、家信を討せしと近づ敵に馳合せ、我れもくんと討死す。此外河原豊前守高・同善九郎疵を蒙る。爰に於て家信も早討死と見えける處に、成松新左衛門馳せ來り、當の敵二人切倒し、家信を援ひて一所になる。斯かる處、久池井彌五左衛門以下二三十人來り加つて、家信の馬の前後に立隔り、由なき公の御死狂や。いざく御供申さむと馬の口を把り、汀なだちに沿ひて引退き、神代の港に著き爰にて後れし味方を待合はせ、心靜に船に乗り塚崎の城へぞ歸り著しける。

一、鍋島飛騨守信生は、政家の副將として山の手へ向はれけり。時に神代次郎家良の家人等、同名彈正忠を陣代として信生の手に加はる。斯くて合戦未だ亂れなき前、馬渡賢齋・矢作小右衛門純俊味方に先を懸け、島津勢の陣場より良の方、

鍋島信生
敗れて入
る河城に

丸尾より乗入る。然るに此山の手は、薩州の猿亘越中守・同子息彌次郎以下差固めたり。其勢の中より村岡加右衛門良珍と馬渡賢齋太刀を合せ、賢齋、村岡に討たれぬ。家人も一所に戦つて疵を蒙る。村岡も亦手を負ひけり。矢作小右衛門は敵中へ切入つて、薩摩の侍香西右馬助を討取りたり。斯くて敵味方亂れ合ひ火を散らして戦ひしに、佐嘉勢大に利を得。薩摩陣を切崩し、軍將猿亘彌次郎を討取り勇み進んで見えける處に、中の手の佐嘉衆敗軍して、隆信落命ありし由、陣中風聞ありしかば、致家・信生の士卒、忽ち力を失ひ悉く敗走す。爰に於て神代勢の中より神代彈正を初とし、同名中務少輔・福島加兵衛三瀬大藏・梅野大膳・國分左馬助・千住左助・古川藏人・大江相五郎・神代相右衛門・藤原主水允蹈止つて戦ひ死す。鍋島の手よりは加々良大學・小森伊豆守以下討死しけり。政家は父隆信の戦死を聞かれ、生きては争か歸るべきと、數度引返されしを、水町彌太右衛門・犬塚新四郎其外數輩立塞がり、無體に引立て退きけり。信生も討死すべしと、六七度に及び取つて返されけるを、中野式部少輔、信生の鎧の袖にすがりて三會の方へ

引退く。此度信生に従ふ輩には、鍋島太郎五郎家俊・同名大膳信清・綾部新五郎・南里太郎三郎・小森甚五・中野式部少輔、此外槍持の増岡軍右衛門・草履取の笠原與兵衛并に太郎五郎の從者小宮三之允、彼此合せて九人なり。敵是を見て必ず大將とや思ひけむ。五十人計り遁さじと追駈け來る。時に綾部新五郎引返し、敵と組んで首を取り、中野式部敵二人を討ち、又信生も手づから敵を切留めらる。斯かりし程に此敵恐れて引退く。然る處に敵又三百計り、烏毛の指物さゝせ急に追駈け來り、河越に散々に射る。時に皆々取つて返すに、南里太郎三郎矢に中りて臥し、鍋島太郎五郎、敵と引組み押へて首を取り、中野式部槍を以て突いて懸る。其勢にやしらみけむ。此敵も引返しぬ。是は島津中務なりけり。斯くて信生は、從者共の働にて廿四日の夜に入り、漸く三會の船場へ出でらる。道にて木下四郎兵衛・北島治部允追付申す。爰にて信生、隆信死生必定の所を聞かまほしき由、申されしに依つて、木下は又敵中へ立歸りぬ。夫より信生主從十餘人、田雜大隅守が船に乗つて三會の津を押出さる。此時、江上の家人小柳清右衛門、今日の軍に痛

手負ひて行歩不合期なりけるを、家種より斷ことわりにて、信生の船に乗せられけり。扱信生は先づ岳崎へ船を寄せられ、少しの間休息せられ、爰にて密書を數通認められ、先達小早より筑後衆中へ差送られ、夫より筑後へ渡海あり。榎木津へ著かれ築河の城に入られぬ。

龍造寺軍の戦死者

一、右此外に今度龍造寺の軍士に討死の人数

龍造寺右馬大夫、同名右衛門大夫、同名雅樂助、同名刑部左衛門、間田兵部大輔、原豊後守、同越後守、同太郎五郎、千布因幡守、小川石見守、同孫太郎、綾部土佐守、同左近允、同五郎左衛門、重松備後守、納富伊豫守、同新次郎、同相兵衛、徳島甲斐守、同肥後守此兩島主從三十餘人、西岡美濃守、勝屋勝一軒、同名伊豆守、同相五郎、澁谷次郎大輔、土肥佐渡守、鍋島淡路守、岩松善助、田原伊勢守、秀島雅樂助、西村伊豫守、前田吉右衛門主從七人、藤崎筑前守、藤崎次兵衛、鹿江五郎三郎、馬場筑前守、馬場藤五兵衛、安住左衛門佐、福地藏人、福地藤右衛門、鷺崎右京亮、野口右馬允、田中權右衛門、武藤將監、石橋新四郎、石橋相次左衛門、同名六郎左衛門、成富玄意、

同名兵部左衛門、古川主計允、古川左介、糸山將監、真島護介、中島彌十郎、同名與次郎、橋本内藏允、大野源太左衛門、平島汲濟、久我加兵衛、豊田大和守、同名善左衛門、大熊左馬助、津山主水允、蒲原源左衛門、江田又十郎、古賀左衛門大夫、大江左馬允、馬郡藤内、江副孫太郎、同名相五郎、同名修理助、太田加兵衛、立石孫次郎、堤越後守、同名兵部少輔、同名藏人、同名相右衛門、上野丹波守、香田甚内、白仁乗徹、鵜池藏人、同主馬允、牟田周防守、同相右衛門、古館掃部允、同左近允、吉田又次郎、石井安藝守大串次郎三郎、淵ノ上又次郎、同名新右衛門、同越後守、同兵部少輔、同四郎左衛門、同内藏允、同大膳助、同源右衛門、同宮内少輔、同九郎左衛門、同源左衛門、同帶刀、同左衛門尉、同四郎兵衛下人彌三、今泉孫四郎、西牟田紀伊守主從十人、同名彈正忠、西牟田但馬守、兵動彌三郎、同右衛門允、兵動二右衛門、同彌左衛門、東兵部少輔、東知齋、香田源介、副島左近允、同名喜左衛門、川浪攝津守、同教也齋、同名權介、同名新左衛門、原口對馬守、同名彌左衛門、梅崎四郎兵衛、同新九郎、同用右衛門、蘆原富慶、早田小三郎、倉永恕介、石田主殿助、松永三郎兵衛、村岡十郎左衛

門、藤山忠次郎、永島木工右衛門、池田式部丞、山本忠介、宮副監物、岩部一乘房、青木主税、於保藤太郎、一卜齋、榮鑑齋、中野對馬守、同名甚五左衛門、吉富木工左衛門、關新右衛門、中牟田六郎兵衛、山口七郎兵衛、緒方治部少輔、伊東一慶齋、津留傳兵衛、今村對馬守、同左衛門佐、中田町左馬允、牛島太郎三郎、吉岡次郎九郎、乙成權兵衛、深町天下左衛門、永松六左衛門、永田清左衛門、八田主馬允、横尾勘太左衛門、服部加兵衛、岩瀬與七郎、島原兵部少輔、木戸監物、石丸彌次郎、松田源内、大塚内藏允、同名喜兵衛、同清左衛門、同名四郎右衛門、深町理下齋、岸川彌七兵衛、陣内慶朝、似我權内本名、石動藏人、徳久新左衛門、甲斐彌三郎、窪彌三郎、納富能、樺島新右衛門、田島三郎兵衛、生捕に成、田尻但馬入道了哲、但主從、勢の、西牟田播磨守、西牟田紀伊守統賢内、主從十七人。西牟田、筑後、鹽塚備後守、中、同名、彌右衛門、同名喜左衛門、上に同、水町勘右衛門、田島清八郎、三郎兵衛の子、大串藤次郎、無屬、三郎右衛門、四郎兵衛、主馬允、市十郎、源左衛門、六郎左衛門、十助、赤房麻呂、角助、忠次郎、勝次郎、孫六、近十郎、藤左衛門、市之允、兔介、治部左衛門、孫三郎、彦郎。

兵衛、源左衛門、吉十郎、與一左衛門、彌太右衛門、彌右衛門、與太郎、藤太左衛門、助次郎、善介、源介、孫介、清三郎、彌六、清右衛門、右京、神左衛門、新兵衛、忠五郎。
今度龍造寺の諸勢討死の侍、都合凡そ二百三十餘人。

ある舊書に、雜兵合八百餘人とあり。

手負數を知らず 内杉浦虎王丸歳十五、肩の上に疵く。主從三百餘人出勢す

或は云ふ此豊前、此度高來出 鍋島豊前守信房疵を蒙る。藤津衆之に従つて出勢す。

一、今度島原合戦、三月廿四日辰の刻、龍造寺敗北、隆信生害あるとも。本文には未の刻と。

或は云ふ 隆信落命の時、敵河上左京亮と一句問答の上、其死證を授けられしとも。

或は云ふ 鍋島豊前守は、隆信生前より留守居の列に入つて、今度藤津郡を鎮め島原へ參陣せずとも。

或は云ふ 一、今度島原に於て推參申したる吉田清内、敗軍以後逐電せしを尋出され、生害せらしと。

或は云ふ、鍋島信生、今度島原退口の時、神代より出船ありしとも。又多比良の港よりとも。

一、信生今度築河へ歸城、先づ小保こぼへ著船あるの時、三根郡續命院の重松四右衛門範幸、早速小保へ出合ひ信生を迎へて城へ入れ申す。

一、信生、今度島原參陣の以前より大野の城の加番として、富岡喜左衛門・相良清左衛門・久納市右衛門・田尻昌賢・秀カ半右衛門・下村生運等を差越され置きけるに、此度島原の軍に隆信戦死ありし由、即日大野へ聞え、中にも下村生運、信生の死生を心元なく思ひて、中原主水に家人源五左衛門相副へ、食籠・重箱等を持たせ神代へ差遣し、其安否を聞きける處に、折節木下四郎兵衛參合ひ、信生は恙なくおはして、早出船ありし由申しに依つて、下村が使兩人は、木下と打連れ大野へ歸り、翌くる夜明より加番人残らず信生跡を追ひ、築河の如く打渡りけり。

北肥戦誌 卷之廿八終

北肥戦誌 卷之廿九

龍造寺政家鍋島信生歸城の事

既に天正十二年三月廿四日、島原の合戦過ぎて、龍造寺政家は佐嘉へ歸城せられ、鍋島信生は築河へ歸陣あり。其由先達て聞えしかば、重松四右衛門範幸、此時筑後山門郡蒲池の城警衛なりけるが、信生を迎ひ入れむと急ぎ榎木津まで出向ひ、是を守護して築河の城へ誘ひ入れ、武器馬具の修理を調へ、中野式部へ引渡し、其身は又蒲池へ歸りぬ。斯くて信生、築河へ歸著ありしかば上下悦ぶ事限なし。中にも父剛意入道は、嬉しさの餘り落涙止まらず、御邊、此度生残りしは偏に龍造寺八幡の御加護にて、國家長久の基なりとぞ悦び申されける。

龍造寺政家鍋島信生歸城

安富下野守純泰佐嘉に赴く事

爰に高來嶋深江の城主安富下野守純泰は、兼ねて龍造寺へ一味の者にて、頃日は居城深江に楯籠り、父伯耆守純治は次男新七郎を具して、島原式部大輔純豊が城の加番として島原にありけり。然るに深江・島原等の城々へも、薩摩勢早取り懸りて、今度隆信以下の佐嘉衆悉く戦死あるの由、矢文を以て申遣しけり。されども深江の城中には、是を信用せざりし處、彌々其實相知れしに依りて、城主下野守大に悔み、さらば此城を持ちても甲斐あらず。所詮佐嘉へ赴き、龍造寺に忠戦をも相勵むべしと決定して、折節、神代兵部少輔貴茂たかもち、深江の城に加番の時分故、貴茂と同心に申合せ、父伯耆守・弟新七郎が島原にありしをも振捨て、親類家人はいふに及ばず、城中の老若男女一人も残らず引連れ、其外極老の専昌寺の住持九譽上人并に同宿共迄、一同に深江を退き、先づ神代まで出でけるに、神代へも早薩摩勢入込みしを、安富の家人田代利右衛門一番に駈合はせ、敵皆々追拂ひ、城主兵部少輔と同じく神代

安富純泰
佐嘉へ赴く

の城へ著き、夫より安富は、神代と引分れて一家悉く船より、龍造寺の領知藤津へ押渡りけり。されば此時、彼の九譽上人を初め足立ざる女童共、深江を出でてより温泉山・鞍懸越の山々、其嶮難を越えて、僧俗男女都合二百餘人、道々の難儀いふ計りなし。斯くて安富、三月廿六日在所を立退き、藤津へ來りしかば、政家・信生特に懇志を加へられ、則ち藤津にて少地を給はりしが、後には名字を變へて、深江下野守とぞ申しける。

一、此下野守が父伯耆守は、次男新七郎と共に、島原式部大輔が城へ隆信の下知に依りて、去年以來加番に赴き居たりしに、今度龍造寺の諸軍、利を失ひ悉く引退きしゆゑ、城主島原も薩摩有馬の大軍を防ぎ得ず、敵に取籠められ、心ならず有馬へ退きけり。然る間、伯耆守父子も力及ばず、島原と同じく有馬へ赴き、有家といふ所に、小時は囚とらはの如くにて居たりしを、嫡子下野守、猶も龍造寺へ志を通じ、佐嘉へ赴きける由隠れなく、其科彌、差募り、五月十五日、敵の爲め父子共に竟に討果されけり。時に新七郎、家人共と同じく比類なく相働き討死しけるとぞ

聞えし。扱島原式部大輔は、同名伊賀守と同じく、其後薩摩勢に引立てられ、すべき様なくして、一家悉く薩摩へ赴き、伊集院に従ひありけるが、時節を窺ひ忍び出で、肥後の南の關まで逃延びしを、島津の家人等追駈け來り、妻子眷屬一人も残らず討果しけり。

田雜父子軍忠龍造寺靜謐の事

此時、田雜大隅守といふ者あり。元來肥後の者なりしが、さる仔細あつて壯年より紀伊國へ赴き田雜に居住し、年久しく星霜を送り、海賊の大將となりて其本名を隠さむ爲め、則ち在名を以て田雜と改めけり。元は相良の一族なり。然るに此田雜、近年又舊里へ歸り、九州の海邊に徘徊し、頃日は肥前の内高來・藤津の津々へ船を寄せ、龍造寺へ奉公を相望み、去々年筑後の田尻が籠城の時も、佐嘉へ加勢として船手の番船にありし者なり。されば此度、島原の軍にも合戦の勝負を窺ひ、多比良三會神代等の渚に手船を著け置き居たりし處に、鍋島信生、三月廿四日の夜、島原

田雜父子
の軍忠

より歸陣の期に及び、折節船場にありて、早速手船に乗せ申し築河へ送り届けぬ。時に船中にて中野式部が取成を以て、彼の田雜、竟に鍋島の家人となりけり。斯くて大隅守、新參の功を立てばやと思ひしかば、寺井津の地下人吉田左近・篠町織部・宮原藤五左衛門・高田木工之允・同仁右衛門以下を差語らひ、父子三人家人等を召具し、薩摩の船大將阿久禰大炊助が、肥後の三隅の瀬戸に懸りてありけるに押寄せ散散打戦ひ、難なく其船を乗取りて、大炊助を初め七十五人を討取り、則ち其死證を信生へ見せ申しけり。信生大に感賞ありて、大隅守以下寺井の地下人共へも、各、感狀を得させられけり。

一、龍造寺政家、島原より佐嘉へ歸城せられ、納富但馬入道道俊・龍造寺越前守家就以下の輩相集り、安房守信周は、筑前一の岳の城より馳來られ、國家靜謐の談合様々なり。時に安房守の方より急ぎ築河へ使を立て、鍋島信生を佐嘉へ招かれしかども、信生は聊か思慮ある由にて來られず。仍りて安房守自身、寺井の長福寺まで來りて、信生へ度々使を遣し、國家相續の談合に候間、枉げて佐嘉へ來ら

龍造寺靜
謐の談合

るべき由頻りに申されし故、信生方に及ばずして、先づ長福寺に來り安房守へ對面あり。稍、少時密談せられ、信周は佐嘉へ歸られ、信生は築河へ歸城ありけり。其後信生、築河の城へは龍造寺上總介を南の關より招き居る、其身は蓮の池の城に移られ、晝夜油斷なく方々に到り、色々才覺を以て謀畧を回されし間、龍造寺の城下、少しも騒動せず、國中しかと靜謐し、近國の旗下中も彌、異心あらざりけり。

一、四月五日、肥後國小代伊勢守親傳ちかつての老臣荒尾攝津守家經、龍造寺に至つて彌、別心あらざる由、佐嘉へ神文を送る。

一、五月廿日、大村丹後守純忠、同じく神文を贈り、質人として同名右衛門大夫家秀を差出す。

一、六月二日、肥後國隈部但馬守親永同嫡子式部大輔親泰、同じく神文を送る。

一、同月廿四日、筑後國黒木伯耆守家永、同じく神文を送る。

深堀中務大輔純賢有馬の使者を討つ事

彼杵郡倭石の城主深堀中務大輔純賢も、兼ねて龍造寺に一味の者なり。然るに有馬左衛門佐が方より、温泉山の住僧眞純坊、大乘坊、此兩僧を使にて申し遣しけるは、鎮貴、此度島津と勢を合せ龍造寺隆信を討取りぬ。茲に依つて今島津の武威、巳の時と曜きて、肥後筑後の諸將悉く薩州の下知に隨はずといふ事なし。定めて貴方も同意たるべし。其儀ならば純賢と鎮貴勢を一つにして彼杵郡へ出張し、龍造寺が殘黨残りなく退治申すべし。若し又同意なくば、即時に其表へ取懸け、先づ御邊の一家を誅伐せむとぞいひ送りける。深堀、此使を打聞きて、悪しき有馬が使かな。一向に一味せよとならば、兎にても角にてもあるべきものを、若し同意せずば此表へ來りて、我等が一家を誅伐せむとなり。物をかしのいひ事かな。深堀が手並の程は、兼ねて音にも聞き目にも見つらむものを、所詮彼奴等きやつを忻たはつて、手を焼かせむと思ひしかば、目をしばたき兩僧に向つて申しけるは、元より深堀は有馬

深堀純賢
有馬の使
者を討取
る

と親しき者なり。仰までも候はず。則ち御一味申すべし。去ながら軍の密談は武士の業にして、曾て沙門の知る所にあらず。然るに何ぞ出家山伏を以て仰せ給はるこそ心得ぬ。彌、我等へ御入魂あらば、御一族の中然るべき侍を、爰許へ差越さるべし。心底を残らず申談し、龍造寺の一家を不日に討果すべしとぞ返答申しける。兩僧、有馬へ歸りて此趣を語りしかば、鎮貴、深堀が偽り謀るとは夢にも知らず尤もと同じ、頓て從弟の荒木加兵衛に老臣木崎市右衛門を差副へ、深堀へ遣しけり。純賢思ふ様、有馬を方便り母が浦へ兵船を用意し、荒木・木崎が主從五十餘人一人も残らず其首を取り、龍造寺へぞ差贈りける。斯かりし間、政家・信生以下打寄りて、隆信の死後百日も未だ過ぎざる中に敵の首を見る事、偏に深堀の忠心なりと甚だ悦び思はれけり。

一、頃日有馬鎮貴より、家人本田伊豫守に人數を副へて、彼杵・藤津の邊へ差渡し、龍造寺領の内所々を焼拂ひ、其上隆信より其所の郷士共へ給はりたる知行の判物を皆取上げ、新に鎮貴より判形を各、差出しけり。

龍造寺島津和平の事

今度隆信戦死ありしに依りて、龍造寺には衆議ありて、父の怨には俱に天を戴かずと、弔軍すべきに決定して、既に諸軍を催さるべきの處に、秋月長門守種實の方より使節あり、政家・信生へ申されけるは、未だ花洛の騒動すら静まらざるに、九州又大亂に及ばむ事、第一天下の妨妖さまたげじまほといひ、次には國民の苦みなり。然る間、先づ私憤を止められ、少時島津と和平あり、又折を得、鬱胸を達し天聽を晴されなば、頗る穩便なるべしと申送られしかば、政家・信生ともに老士に評定を加へられ、兎も角もと返答せられ、薩州への發向をば止められけり。

龍造寺島
津和平

今度、島津と龍造寺和平あり。佐嘉より薩摩への質人、一番に小林播磨守、二番に土肥相左衛門、三番に副島長門守、何れも五六箇月宛薩州にあり。天正十四年六月中旬より秀島進士左衛門家周、初は四郎左衛門薩摩へ赴き翌年の夏歸る。

大友勢筑後國亂入所々軍の事

田尻鑑種
筑後に
出陣

今年^{天正}十二の夏、龍造寺より諸境目警衛として、田尻丹後守鑑種を淵底案内者たるに依りて、筑後國へ差遣さる。時に先づ鍋島信生、鑑種を召して、御邊は今度境目番として筑後へ越さるべし。然れば舊知にて候間、筑後の内、田尻龜尻・海津此三箇村を以前の如く知行せられ、境目よく勤番ありて給はるべしとありしに依りて、田尻則ち領掌申し、手勢を以て筑後へ打越え、海津にしかと在村しけり。

大友勢筑
後國に亂
入

一、斯かる處に同六月、豊後より隆信戦死の由を聞き、彼の領知を切取るべき時、此節なりと大守大友義統下知を加へ、其老臣志賀安房入道道輝・朽網三河入道宗歴并に舍弟田原六郎親家・大友九郎親盛に大勢を相副へ、肥後筑後の間に差向けけり。此勢、既に黒木表野田・竊納に著陣し、先づ黒木兵庫入道宗英・同嫡子伯耆守家永が龍造寺方にて居たりし上妻郡猫尾^{なまひね}・高群の兩城を攻めむとす。斯くて黒木父子、僅の手の者を以て、豊後の大勢を防がむ事難儀に思ひしかば、急ぎ佐嘉へ

佐嘉勢防
禦の部署

注進して加勢を乞ひけり。之に依つて政家・信生談合せられ、則ち猫尾の城へは倉町近江守信光・久市白又右衛門、高群の城へは土肥出雲守信安・馬場清兵衛信員を合力として、罷越すべき由下知せられ、扱又田尻鑑種が、頃日筑後の海津にありけるをも、猫尾へ加番仕るべき旨、政家より倉町へ申含められけり。斯くて此佐嘉衆、七月十三日肥前を打立ち、即日筑後に著陣し、中にも倉町は直に海津へ赴き、田尻に對面して政家の命を相達し、則ち一同に猫尾へ入城すべしといひけれども、城主黒木伯耆守、色々存じ分ども之あり、先づ猫尾加番の輩は、彼の城入番に及ばずして上妻表に在陣すべき由。之に依つて同月廿九日、田尻・倉町・久市白は上妻の内福島村に陣を張り、高群加番の兩人は、頓て彼の城に入りけり。然るに八月上旬、豊後の軍士、猫尾の城へ取懸りしかども、城主伯耆守、持口を守りて防戦し、豊後勢利あらず引退く。

一、七月二日、肥後國戸原能登守親幸、龍造寺に對して別心なき由神文を送る。

一、同月十三日、同國隈縫殿入道覺甫筑後國大善寺の衆徒善住院觀明坊・政所觀行

坊東琳坊祐真坊、同じく龍造寺に對し、別心なき由鍋島信生へ神文を送る。
一、八月廿日、筑後國戸原薩摩入道紹心、同名下野入道宗胤、異心なき由、信生へ神文を送る。

一、同月廿四日、肥後國甲斐中務少輔重信、同少輔太郎親盛、同名掃部入道紹真、同じく信生へ神文を送る。

同合戦

一、同月十八日、戸次伯耆入道道雪、高橋主膳入道紹運、豊後勢に加勢として、兩勢を合せ一萬餘騎、筑前國立花、寶滿の居城を發し、筑紫秋月が領内吉岐、川島、鳥越、山鹿、夜須、山隈、三原等の敵地を恐るゝ所なく討つて通り、一夜河を駈渡し、石垣原を歴て耳納山に著陣す。時に島津、龍造寺の兩旗下草野、星野、間注所が家人共一所に集まりて是を遮りしかども、戸次、高橋物ともせず一々に駈散らし、北野、河内を押下り、野田、耳納、高群の山路嶮難十餘里の行程を、一日の中に易々と打つて嶺々に攀登り、所々に陣を固めて、先づ龍造寺方の蒲池兵庫頭家恒が山下の城を攻めむとす。斯かりし程に家恒、彼の大勢を防ぎ難く降參の由申しければ、

戸次、高橋是を免し、夫より黒木兵庫入道が高群の城を攻めむと議す。

一、戸次、高橋の兩將、既に高群の城を攻めむとする由聞えしかば、龍造寺より當城加勢の土肥出雲守、馬場清兵衛より早速佐嘉へ申送り、援兵を乞ひけり。茲に依りて政家より田尻鑑種が、頃日福島村に陣してありしを、高群の城へ早々加番致すべきの由、八月廿二日に申遣されけり。此時、鑑種へ筑後に於て四百九十町を加恩せらる。仍りて政家、信生より田尻に給はる狀に云く、

田尻鑑種
加恩せらる

從明後日廿四日、至高群、可被成、御勤番之由候。御粉骨之次第御頼敷被存知候也。今度之依、御忠義、江上四百町、藏永四十五町、野瀬四十五町地之事、可進之置之由候也。早々御知行肝要候。恐惶謹言。

八月廿二日

信生判

鑑種老

參る申給へ

今度鑑種御事、至高群、可有登城之由申入候之處、以御納得可被差籠之由候。珍重候。就夫其方御事、當未無二可申承、覺悟不淺候之條、不能書載候。

大友勢筑後國亂入所々軍の事

恐々謹言。

八月廿四日

龍氏政 家判

田尻文三郎殿

参る申給へ

一、斯くて田尻丹後守鑑種、龍造寺の下知に依つて、同八月廿四日、上妻の陣を拂つて、高群の城加番の爲め長田村まで打出でけるに、早今日廿四日に、高群の城、戸次高橋に攻落され、佐嘉よりの加勢土肥出雲守馬場清兵衛は肥前へ退き、城兵は悉く降を乞ひて大友方へ相隨ひ、戸次・高橋は、同廿四日の晚權現岳に陣を取る由聞えしかば、田尻は手を空うして、本河の如く差下り、又々海津村へ討入り、上妻に陣したる佐嘉勢倉町・久布白も、下目の如く繰取りけり。

一、戸次道雪・高橋紹運は、八月廿四日、黒木が居城高群を攻落し、翌廿五日の朝、權現岳より河崎に陣替し、廿八日、坂東寺に陣を張つて、西牟田播磨守鎮豊が領知を焼拂ふ。爰に於て龍造寺方高良山の座主良寛以下筑後國の輩、多く大友方へ降参す。此事、佐嘉へ聞えしかば、政家・信生相議せられ、急ぎ龍造寺上總介家晴

を以て、彌、築河の城を守らしめ、其上内田肥後入道榮節・空閑左衛門大夫家盛・犬塚三郎右衛門家廣を加番とし、又頃日倉町近江守・久布白又右衛門等が上筑後の内に在陣しけるを、下筑後の如く繰取り、田尻丹後守彌、海津村へ居置きて、大友勢と相戦はむと用意ありけり。然るに此時島津兵庫頭忠平、八代にありしが、薩隅・日三箇國の軍兵三萬餘を相催し、肥後國の龍造寺を攻めさせ、頓て筑後へ討入らむとす。

一、戸次道雪は、下筑後の内山崎に陣を移し、九月一日、黒木伯耆守が猫尾の城を攻めけるに、家永堪へず落城す。夫より道雪、山門郡に來りて、同月九日、瀬高近邊の村々に討入りて所々を焼拂ふ。此時海津にありける田尻鑑種、鍋島信生の下知に依つて大友勢を防がむ爲め、同九日、海津より垂見村に陣更し、則ち爰に要害を取構へて差籠りけり。此日大友勢白鳥表へ討ち入るに付いて、田尻則ち馳向ひ是を追返す。然る處に豊後衆、又鷹尾へ相働く由聞えしに依つて、田尻早速取懸けしかども、其事虚説なりし故、頓て垂見へ陣を歸しけり。

猫尾城陷

大友勢筑後國亂入所々軍の事

一、同月十五日、戸次入道道雪、山門郡の内所々に相働き、高橋入道と勢を合せ、坂東寺へ陣を替へ、豊後勢の一將田原六郎親家に參會し、軍談を決して、先づ西牟田村・酒見村榎木津の在家數百軒悉く焼拂ひ、扱龍造寺上總介家晴が守りたる築河の城を攻めむとしけり。されども當城は無雙の要害といひ、其上城主家晴、兼ねて用意しければ、空閑・内田・犬塚以下の加番人を初め、草野左〔衛力〕門尉家清も當城へ來りて、彼是數十騎を以て楯籠り、其兵糧の料として、城の四圍六十餘町の稻を悉く刈採り城内へ籠置き、海手には數十艘の番船を繋ぎて敵を近づけず、所々に端城を取構へ、佐賀への通用を自由にす。其端城といふは、先づ城より凡そ五十町、北の方酒見の城に大田右衛門大夫家豊、乾の方榎木津の要害に中野式部少輔清明、東の方蒲船津の城に百武志摩が後家圓久尼大カ、南の方蒲池の要害に重松四右衛門範幸、此外垂見に田尻丹後守鑑種、各、其武備を固うしければ、道雪・紹運を初め豊後の輩、卒忽に築河へ取懸け得ず。先づ輕卒を進めて道々を放火し、中野式部が榎木津の要害をぞ攻めさせける。中野、聞ゆる者なりしかば、

蒲船津合戦

更に事ともせず城中を駈廻りて士卒を下知し、鐵炮を打たせ矢を放ちて、身命を惜まず防ぎし間、戸次・高橋が軍兵共、爰を左右なく破り得ず。夫より百武が後家圓久比丘尼が籠りたる蒲船津の城へ取懸る。彼の圓久といひしは、比類なき剛の者にて、長高く髪長く大カの荒馬乘なり。過ぎぬる三月、夫志摩守、島原にて戦死の後、信生の命に依つて、女なれども志摩守に變らず當城を守り、元より男子あらざりしが、家人等を従へ居たりしかば、大友勢の寄ると聞いて、大長刀を横たへ城戸口に出で、手の者を勵まし防戦す。斯かる處に中野式部、榎木津より駈來り、圓久を援ひて相戦ふ。斯かりし程に、戸次・高橋が者共、爰をも打捨て又坂東寺へ引退く。斯くて豊後方の諸勢相集まり、龍造寺方三池河内守親基が、三池の古賀の城・中野兵庫助が江浦の城を攻めけるに、兩人則ち降參す。

一、斯くて筑後の龍造寺方、大友勢に攻められ、多くは下城に及ぶ由、追々佐嘉へ相聞ゆ。斯くては叶ふべからずと、政家・信生談合せられ、田尻鑑種が近日垂見に在村しけるを、蒲池の城へ差籠められ、大友勢を防がるべきや又鷹尾の城へ置か

るべきやとありける處に、鷹尾は元來彼の鑑種が舊地なる間、鷹尾の城番然るべしとして、同九月十八日より田尻は鷹尾へ入城しけり。然るに江浦の中野兵庫助、此時大友方になりて、度々討出でしに依りて、田尻、日夜の油斷なく其境を守りて勤番す。

一、同九月十五日、肥後國隈部但馬守親永、龍造寺に對し異心あらざる由、鍋島信生へ神文を送る。

一、同廿一日、彼杵の西郷伊勢守幸武、同じく信生へ神文を送る。

龍造寺政家羽柴秀吉に通ず

一、同九月、政家、信生思慮あるを以て、成富十右衛門信安を中國の小早川隆景へ差遣し、羽柴秀吉に通せらる。秀吉則ち一札を以て禮謝あり。

一、十月一日、肥後國隈部鎮遠、龍造寺に對し別心なきの由、信生へ神文を送る。

一、同月初、大友の軍士戸次道雪を軍將として數千騎相集まり、龍造寺上總介が築河の城を圍み攻む。されども持口堅固にして、攻落すべき様もなし。道雪、城の體を量り見て、則ち士卒を引揚げ、同月三日高良山へ取登る。

妙見城陥る

一、翌くれば十月四日、戸次・高橋相談して、草野長門守鑑員を攻むべしと、高良山の陣を發し草野の里城に取懸りけり。此時鑑員が嫡男左衛門尉家清、築河の城にありて、家人等多く家清に従ひしかば、當城中無勢にして、鑑員防戦叶ひ難く外郭を打破られ、發心岳の本城に取登る。時に寄手の中より今村彌助軍功あり。斯くて戸次・高橋の兩使、夫より生葉へ打つて通り、島津方星野中務大輔鎮種が妙見の城を攻めけるに、折節鎮種は、兄弟ともに近日筑前國若杉の城の警衛として留守なりしかば、其子供長虎丸・熊虎丸未だ幼稚の者にて、敵の大勢を防ぎ難く思ひしにや。城を落ちて逐電す。斯かりし程に、戸次・高橋頗る武威を振ひて、近郷の村里民屋を悉く焼拂ひ、間注所治部大輔鑑景が井上の城を攻むべしと、其通路を取切り、豊後よりの一將田原六郎親家と陣を一つに合せ、生葉に先づ屯しけり。然る處に彼の田原親家、己れが士卒に議しけるは、今度太守義統公より敵征伐の爲め、某等を差向けられ、數日の軍勞莫大なるに、あの道雪・紹運め、奚ぞや下知もなき處に、筑前の預を明けて此所に来り、我々が軍に差加はり、所々の

城を攻落すに依つて、今度の戦功は悉く彼の兩入道が名に顯はれ、此親家が武名は、一向なきが如くに隠る。所詮他人の功を立てむ爲め、命を敵に抛つて久しく軍を當陣に曝さむより、急ぎ豊府に歸つて席を温めむに如かずと議す。士卒も亦遠境の長陣に困窮して、是に同意しければ、則ち親家兄弟は、己れが勢を引分けて府内へこそ打歸りけれ。斯かりし間、道雪紹運あきれ果て、是れ皆天魔の所業にして、大友家の末になるべき前表なり。さらば先づ問注所が城攻を延引して當陣を返すべしと、又高良山へ引返し、暫しは軍を止めて在陣しけり。

一、十一月三日、秋月長門守種實、龍造寺に對し別心あらざる由、政家へ神文を送る。

一、同月七日、三池河内守親基、同じく神文を送る。但し、此親基先達て大友方に降參す。此神文不審。

一、十二月七日、筑紫上野介廣門、同じく神文を送る。

田原親家
府内に歸る

上使下向の事

上使下向

此時の公方は、足利十六代權大納言源義昭公なり。然れども當時は、京都頼廢の頃なるに依りて、義昭公、頃日毛利右馬守輝元を御憑みまし、中國に御下向あり。小早川左衛門佐隆景の領知備後國深津に御住居まし、けり。然るに此將軍、天下再興の御願ありしかば、今年御歸洛ありたき由、去ぬる八月に、上使として一色駿河守昭秀・横島玄蕃允昭元を以て、九州の諸將へ御内書をなされけり。時に輝元よりも、彼の兩上使に、自分の使節として柳澤新右衛門を差副へらる。然るに三人の使者、九州へ渡海あつて、別しては大友左兵衛督義統・龍造寺民部大輔政家・島津修理大夫義久の許へ、上意の趣演達ありけり。然れども此三家、折節鼎の如く立雙び鬭諍の最中なれば、私の際あらず御請兎角に延引して、上使徒らに歸られけり。

筑後國所々軍龍造寺島津大友和睦の事

上使下向の事

筑後國所々軍龍造寺島津大友和睦の事

筑後國所
合戦

天正十三年乙酉正月、戸次道雪・高橋紹運は、筑後國三井郡高良山に歳を越し、青陽の祝嘉終りしかば、頓て兩勢を合せ、龍造寺方の西牟田新介家親が守りたる城島の砦を攻む。時に家親、早速佐嘉へ援兵を乞ひ、稠しく是を防ぎしかば、戸次・高橋が軍士利を失ひ、道雪が弟右衛門大夫以下數輩討たれ、高良山の本陣へ皆引退く。斯くて同二月、戸次・高橋、重ねて兩勢を合せ、島津方の問注所治部大輔鑑景が井上の城を攻むべしと、高良山の陣を立つて生葉郡へ發向す。鑑景是を聞いて、大勢の敵を防ぎ難く思ひしかば、城を去つて發心岳に取登り、草野鑑員を憑みしに、鑑員則ち問注所を援ひて一所に楯籠りけり。斯くて戸次・高橋に志賀・朽網が豊後勢加はりて發心岳に攻登り、草野鑑員を攻めて相戦ふ。されども草野・問注所の親類家人灰塚三河守以下大に挑み戦ひしかば、寄手動もすれば利を失ひ、上より下へ追落さる。戸次を初め寄手の軍將、城の體を巡見し卒忽に是を攻めず、晝は足輕を出して遠矢を射、夜は篝火を焼かせ其道々を差塞いで、四月半に至り遠攻にこそしたりけれ。斯かりし間、城主鑑員、數日の籠城難儀なりける處に、戸次入道が計畧にて、草

野が城中に、彼の親類歴々九人を差語らひ反忠を勸めしかば、忽ち同心して城に火を懸け味方を撃つべき由、相圖を定めけり。戸次入道大に悦び、城を一時に攻落さむと思ひしに、此事草野が長臣灰塚三河守、如何にして聞出しけむ。彼の反忠の者九人残らず捕へ、一々首を刎ねけり。是よりは城中堅固に、寄手も急には彌、攻めざりけり。然れども大友勢猶ほ取圍み、草野鑑員難儀に及ぶ由、佐嘉へ聞え、龍造寺政家・鍋島信生談合を以て、急ぎ彼の敵を追拂ひ草野を援ふべしと、兩將自身、筑後へ討出でらる。斯かりし程に、上松浦の波多三河守・草野中務大輔・原田五郎、其外筑紫新助・江上構兵衛・後藤伯耆守以下、佐嘉衆悉く相從ひ、龍造寺の總勢二萬餘騎、筑後國へ討つて入る。中にも鍋島信生は、味方の諸勢に先立ちて筑後國北野に著陣せらる。龍造寺上總介家晴も、急ぎ築河の城を出で政家の軍士を迎へむと久留米に陣を取りけり。斯くて戸次・高橋を初め大友の諸軍、佐嘉勢の來ると聞きしかば、先づ草野を差置いて高良山へ陣を返し、座主武邊良寛以下一山の衆徒と一つになり、都合一萬餘騎、軍は敵に先んで不意を撃つに如かずと、山上を發し中途に

出向ひ陣を張る。斯くて同四月十八日、政家の總軍河を越えて、先手の輩は既に久留米に著陣し、龍造寺家晴が築河勢と一所に陣を固む。扱兩陣相懸りに懸り、弓鐵炮を打違へて亂れ合ひ少時戦ひけるに、初度の軍には、大友方高橋紹運が一勢、龍造寺家晴に駈立てられ散々に敗走す。然る處に、戸次道雪が手の者都戸五六兵衛・萩野大學以下數百騎、近邊の藪蔭より一同に嘩と起り、家晴が勢に切つて懸り火を散らして相戦ふ。時に家晴、利を失ひ討たる者百餘人、二陣の味方に崩れ懸る。是を見て跡に續いたる江上構兵衛家種が城原勢入替りて、鐵炮數百挺を同時に打懸け相戦ふ。斯かる處に龍造寺方にて脇備にありける上松浦の輩、豊後の朽網入道宗歴に打負けて、立つ足もなく敗走しければ、政家の軍兵竟に利を失ひ、悉く久留米の城に引いて入る。斯かりし間、戸次高橋以下大友の軍士は、一戦に打勝ちて又高良山に登りて陣を取る。

此頃戸次道雪が筑前國立花城に残し置きたる家人共、龍造寺方の曲淵河内守房助が飯場の城・副島長門入道放牛が在番したる飯守の城に取懸け合戦す。

一、今年三月七日、筑前高祖の城主原田入道了榮・同嫡孫五部信種、龍造寺に對し別心なき由神文を送る。

一、筑後國安武次郎三郎家綱、同じく神文を送る。

一、同年九月、筑後國山門郡堀切の地下人、龍造寺を背き大友勢を引入る。則ち豊後の侍平井彈正少弼鎮經、堀切の城へ差籠りぬ。茲に因つて田尻鑑種、早速彼在所の人質二人を召禁しめ、久布白又右衛門を檢使にて、己が家人中尾與三兵衛に斬らせけり。是よりして堀切の地下人共誅伐の爲め、田尻鑑種、鷹尾の城を出で日々夜々軍止む時なし。時に戸次高橋が兵共、堀切の味方を援けむ爲め、濱田村に來りて陣を取る。然るに頃日、龍造寺家晴も田尻へ加勢の爲め、築河より鷹尾に來りてありしかば、兩人評定を極め、堀切の城をば家晴押へて、鑑種は濱田の敵に馳向ひ火を散らし打戦ひ、戸次高橋が者共數十人討取つて悉く追散らしけり。其後又、鑑種と家晴勢を合せ、三池河内守親基又は鎮實が領知三池郡へ相働き、所々を放火し繰返りし處に、山下の蒲池兵庫頭家恒又は鎮運三池へ加勢として

討つて出で濱田村に陣を進む。是を見て田尻の家人に若手の者共、古賀の渡を潮時を量り、土民の眞似をし農具の中に太刀・長刀を包み籠め、各、荷擔ひて遊ぎ越え、山下勢に近づきて、蒲池家人今村新兵衛・同大炊助を初め數多討取りけり。然る處に鑑種家晴も取懸けしかば、敵勢悉く引入りぬ。斯かりし程に、田尻も家晴も先づ鷹尾へ引返しけり。

一、此時、島津兵庫頭義珍、前名 忠平。肥後の八代に在陣し所々へ手仕して切從へ、中にも合志常陸介親爲がたかはさま高狹城をば、伊集院右衛門大夫・新納武藏守に、七千の人數を差副へ攻めさせけるに、親爲堪へず降參す。此外、龍造寺方隈部但馬守以下は、早去年より薩州へ從ひしかば、肥後國中に島津を背く者もなし。さらば筑後を征すべしと、義珍下知を加へ、同九月上旬、伊集院肥前守・山田越前守其外一兩士、人數を率ゐて筑後に討入り、先づ三池へ來つて三池河内守を語らひけるに、親基則ち同心す。斯くて島津衆、さらば先づ大友方にて、豊後の平井彈正が籠つたる堀切の城を攻むべしと、其寄口を見るべき爲め、肥後衆少々同陣を以て、三池

親基を案内とし堀切近邊まで打出でけるに、城中より見て大に仰天す。島津勢、其體を相窺ひ、則ち海上を打渡り切つて入りしかば、城兵是を防ぎ得ず、番人の平井は城を遁れ出で、江の浦の城へ逃籠り、中野兵庫助と一つになる。斯かりし程に、島津勢安々と乗取りて城中に攻入り、殘黨悉く討果し、其儘に肥後衆を以て、當城に在番させ是を守らせけり。夫より島津衆、様々内畧を廻らし、江の浦の城番中野兵庫助を語らひしかども、田尻鑑種、近邊の鷹尾にありて中野を賺しける程に、中野終に島津衆の語らひを承引せず、田尻が申すに任せ、以前の如く龍造寺方となり、睨と彌、江の浦に在城しけり。斯くて一所にありける平井彈正は、薩摩衆に道の口懸望を以て、頓て豊後に歸國しけり。

右中野兵庫助は、元來肥前塚崎の住人にして、中野式部が從弟なり。先年、主の後藤貴明父子一亂の後、浪人となり、ある時は龍造寺に従ひ、ある時は大友に屬す。無雙の勇士なる故、既に一城を預りぬ。此後又、浪人となり年を経て故郷に歸り、竟に身を立てざる事を述懐し、伊萬里の島にて自殺して死す。其子

平五左衛門上方に赴き子孫あり。

一、同九月、戸次入道道雪は、去ぬる春より高良山に在陣し、病惱にかゝりしが、情、思ひしは、斯かる病身を以て、いつまで他國に軍を曝すべき。所詮鍋島信生を方便り出し、十死一生の合戦を挑みて、運を天に任すべしと、同九月中旬、一騎當千の者を七百人勝り出し、前後に相從へ高良山の陣を發して瀬高口に進み、此頃信生の築河の城に居られしに使を立て申し遣しけるは、既に大友、龍造寺と武威を争ふ事年久しく、兵革の弊萬民の歎、是れに過ぎたるはなし。然る間、貴方と道雪唯、二人槍を合せ、雌雄を立所に決して、諸人の苦を扶け申すべし。則ち瀬高口へ御出合あるべしと申し遣しけり。信生、此使を聞かれ、道雪が心底は早推量ありしかども、恐るゝに足らずと思はれしかば、先づ久富左介を以て敵陣の體を相窺はれ、扱築河の城を打出でられ、井手の橋に陣を居ゑらる。時に相從ふ軍士共、道雪が機を察して、今日の一戦は先づ延引あれと制し申すといへども、信生、更に承引なし。然る半ばに佐嘉勢の中より倉町大隅守信吉と、水町丹後守信定、大

なる喧嘩を仕出し既に珍事に及ばむとし、陣中以の外騒動して、前後の備混亂す。玆に因つて信生、今日の一戦力及ばずとて、頓て城中に引入られけり。斯かりし間、道雪、牙を噛み無念に思ひしかども甲斐あらず。又無勢なれば續いて築河をも攻め難く、其儘高良山の本陣に引返しけり。

今日、倉町、水町喧嘩をしけるは、信生道雪との雌雄を留めむ爲に、兩人密談して工みたる事なり。此兩士は龍造寺に於て老功の者となり。

一、戸次道雪、高良山に歸りて後、諸士を集めて讚談しけるは、天晴鍋島は智仁、勇の三つを兼ねたる大將かな。此道雪、多年弓箭を執りて彼の信生と挑むに、肺肝を碎き謀れども謀られず、時の至るを待たむとすれども、鍋島は若くして健かなり。我等は老いて病氣なり。口惜しき仕合なりと、頸を垂れて悔みけるが、其勞の積りにや。同十月廿日、北野の陣中にして死去しけり。歳六十歳とぞ聞えし。

或はいふ、道雪、高良山に於て死去すとも、非なり。
又いふ、道雪、信生に使を立てしは、去年八月なりと、非なり。

戸次道雪
鍋島信生
を褒む

戸次道雪
病死

一、道雪病死しけれども、高橋紹運は猶も高良山に陣してありける處に、居城寶満を、秋月長門守謀を回らし、印火を以て焼立て伏兵にて攻めける故、留守にありし紹運の子彌七郎統増、則ち下城に及び、其餘煙高良山へ見えしかば、紹運驚き、早速士卒を引いて筑前に歸陣しけり。道雪死去して中兩日を隔て、十月廿三日なり。斯かりし程に、豊後の志賀朽網も、同日悉く陣を引きけり。紹運は筑前に歸著せしに、早寶満の居城へは、秋月一味の筑紫廣門が一族同名四郎右衛門興門入り替つて守りし故、紹運は力なくて岩屋の城へぞ入りける。

一、既に十月廿三日、大友の諸勢敗軍に及び、高良山の陣を拂ひしかば、筑後在陣の龍造寺勢、鍋島信生を先とし、悉く高良山へ取登り凱歌を執行ふ。斯かりし程に、兼ねて龍造寺へ一味し、城々へ楯籠りたる筑後の國の輩、草野長門守、西牟田播磨守、間注所治部大輔、安武次郎三郎、久留米の麟圭、高良山の良也以下、皆己々が居城に安堵し、佐嘉勢の中より後藤伯耆守家信、高良山に在陣し上筑後を警弼あり。内田紀伊守信堅、姉川中務大輔信安、久留米の城に入りて其近郭を相守り、

龍造寺上總介家晴は、以前の如く築河の城にありて、彌下筑後を鎮め、國中大半平均しければ、鍋島信生は頓て肥前へ歸陣せられけり。斯くて此時、佐嘉築河の兩城へ、隆信存生以來携へ置かれたる隣國遠境の質人幼稚の男女困くるみ沈みしを、信生特に愛憐を加へられ、政家と相議せられ、皆己々が在所へぞ送り歸されける。

一、今年羽柴秀吉、上帝に朝して既に關白に任じ天下の權を執給ひ、諸國の干戈を停止せらる。中にも鎮西の事は、今年十一月上旬、小早川隆景上洛ありて秀吉公に謁し、龍造寺・大友・島津の三家、累年武を争ふに依りて國民勞れ患ふるの由、深く歎き申されしかば、秀吉公急ぎ彼の三家の面々へ下知を加へられ、早速弓箭を取鎮め、九州靜謐すべき旨仰せ給はりけり。然る間、島津も大友・龍造寺も、台命背き難くして皆畏まり領掌し、各、神文取替し、九州既に平均の體にぞ見えける。

一、今度關白殿下の命に依りて、大友・島津・龍造寺和平ありける處に、薩州より家臣

秀吉の命に依りて
大友島津
龍造寺の
三家和平

鎌田刑左衛門を大坂へ差寄せ、關白殿へ申されけるは、義久既に九州を過半切取り候の間、今に於ては九箇國を殘らず下し給はるべし。然るに於ては高麗・南蠻・唐國までも御征伐の節、御先を仕り忠貞を抽んで申すべきの由、金銀を捧げて言上ありけり。されども關白殿御許容あらず。此事、大友宗麟聞付けしかば、其儀に於ては我等も上洛して、關白殿を頼み申し、彼の島津に對し年來の遺恨を晴すべしと、上下一千餘人にて鶴崎の津より船に乗り、順風に帆をあげ泉州堺の津に上り、妙國寺に驛宿して宮内卿法印を頼み、先づ案内を啓し、大坂へ登城して關白殿に謁す。初めての對顔なり。捧げ物には正宗の太刀一振。無雙の駿馬一疋。虎の皮百枚、其外和漢の茶の湯の器物、恰も堆く積竝べたり。時に關白殿、其間四疊にして宗麟に對面せられ、前田又左衛門利家の座上に請せらる。土器拜禮終りて饗膳を給はり、其後、金の座に誘はれ、于利休をして十服の茶を給はる。其外、寢殿に於て幸藏主・東殿以下の淑女、偏に花を飾りし如くにて、宗麟、是を見るに心迷ひ目も怪あやなり。斯くて宗麟謹んで申しけるは、薩州の島津義久、上意に

大友宗麟
秀吉に謁す

背き和平の一著を破りて、種々惡逆の企を以て、肥後筑後の諸侍を引牽し、既に筑前・豊前まで相働くの由、是非に及ばず候の間、あはれ一稜御加勢を給はり候へかし。島津に對し戰を勵みたき由訴へ申しけり。關白殿、特に御喜色(氣力)にて御肯あり。其上、毛利と大友不和なりし由も、純熟申すべきよし御中入にて種々拜領申し、宗麟御暇給はり、頓て府内へ歸城しけり。又宗麟、頃日筑前國を進上すとなり。時に戸次道雪の猶子立花左近將監宗虎・高橋主膳入道紹運直參となりて、筑前國立花・岩屋の兩城に居住しけり。

北肥戦誌 卷之廿九終

北肥戰誌 卷之三十

龍造寺政家關白秀吉へ普通の事

天正十四年丙戌正月、龍造寺民部大輔政家、佐嘉城に於て分國諸士の禮を受けらるる事例の如し。同四日、政家、鍋島飛騨守信生と相議せられ、大坂に於て關白秀吉公へ申さるゝ意趣之ありて、江上太郎兵衛入道賢也を差登ほせらる。其趣は去冬關白殿の仰に依りて、島津・龍造寺・大友の三家、一旦和平すと雖も、鹿兒島と府内の間、和平程なく破れしと聞え、又龍造寺に到りても、島津より條々相違の旨之あり。別しては去々年、隆信、高來に於て島津が爲に戰死ありし事、合戦の習といひながら、政家・信生遺恨更に晴れやらず。茲に因つて兼ねて心中に事ありし故、去年九月にも小早川隆景まで、成富十右衛門を遣され關白殿へ通せられ、今度又賢也を

龍造寺政家
關白秀吉
普通の事
を通す

差登せられ申さるゝ旨ありけり。斯くて賢也、先づ藝州廣島に到り、小早川隆景に謁し、夫より大坂へ上り、蜂須賀修理大夫・黒田勘解由次官の執奏を以て、二月八日、大坂の城へ罷上り關白殿に拜謁し、其上、典藥の間に於て饗膳給はり、首尾能く政家・信生の心底を言上し、〔判脱カ〕形を給はりて早速佐嘉に歸りぬ。政家又、賢也に押續きて三浦長門入道可鷗・成富十右衛門信安を大坂へ上せられ、關白殿へ重疊かさねがさね申さるゝ仔細あり。此兩使も先づ廣島へ赴き隆景に謁して、成富は大坂へ上り、安國寺惠瓊を相憑み、關白殿下の前を首尾能く申調へ、可鷗は隆景の返書を請取り、則ち廣島より歸國しけり。其返札に云、

如仰舊冬者與風致上洛、關白殿は遂一禮即令下向、長久入魂之體に候條可御心安候。爲御祝儀、御太刀一腰金覆輪織物貳端送給候。至遼遠御丁寧之儀候。仍九州之儀、先狀に如申候靜謐之儀、京都御下知之條、可成其御心得候。御使僧御仕合能被明御隙候趣者、從是重疊申入候。然者御質之事、以之外被差急儀候條、可鷗夜を日に繼差下申候。成富方事者、御理申候而至大坂上を申候。彼

御分別御苦勞之段、可被成御褒美候。御人質無御延引來月廿日頃大坂著之様御上せ可爲肝要候。此一儀に相極候。猶任口上候。恐々謹言。

二月廿三日

隆景列

政家

御返報

可鷗入道、早速佐嘉に到り歸著し、政家・信生より申さるゝ旨、關白殿御同意あり。其上にて龍造寺の人質を差急がるゝ由なりしかば、三月十五日より右質人千布宗右衛門賢利を、大坂へ差登せられけり。

筑紫廣門没落の事

既に京都・大坂の下知に依りて、大友・龍造寺・島津和平しけると雖も、又三家の面々より關白殿下へ各、訴へ申す旨あつて、和睦忽ち破れ、薩州方より弓箭を取出し、九州の諸士彌、思ひ／＼になりけり。其中に筑後衆には草野家清・西牟田家親・田尻鑑種・高良山の座主麟圭は龍造寺方なり。同國三池鎮實親基・蒲池鎮運家恒・星野鎮種

大友島津
龍造寺三
家の和平
破る

問注所鑑員は島津へ一味、肥後衆皆同前なり。此外、筑前の筑紫廣門・秋月種實も、龍造寺の旗下なりしを引替へて島津に相從ひ、豊前の城井鎮房・長野鎮展・高橋元種以下同じく島津に一味す。又筑前の國立花・岩谷の兩城主立花左近將監・高橋紹運は、元來大友の家人なりしかども、頃日は關白殿へ直參して、公儀の命を蒙り筑前國の警弼にあり。然るに此時、島津に屬せし筑紫上野介廣門、手の裏を返すが如くにして、高橋紹運一致を以て、則ち紹運の子彌七郎を壻に取り大友方になりけり。然るに薩州より彼の筑紫を誅伐すべしと、今年天正十四年六月廿七日、先勢として税所新介・新納右衛門尉・河上左京進、筑後國竹井原へ著陣し、同日又伊集院肥前守、北の關一夜陣にて打立ち、同廿九日、伊集院忠棟山下に著陣、次の日高良山へ取登り、此外追々參陣し、又海上より來る勢は、鷹尾津へ船を著け、入船出船凡そ十日間は、日夜引も切らず、總べて海陸の諸軍、新納武藏守・阿久禰播磨守・相良日向守・北郷讚岐守・樺山權左衛門・宮原左近・河田大膳亮・鎌田出雲守以下、悉く高良山へ打登りて、伊集院忠棟と一所に陣を取る。其外豊前の長野三郎左衛門・高橋九郎も出

筑紫廣門没落の事

三四五

勢し、佐嘉よりも一旦島津一味の體にて、口政家は神崎まで打出でられ、信生は波古川へ進んで陣せらる。田尻鑑種も龍造寺に屬して、親類四人に軍兵二百人を相副へ、政家と一所に在陣す。今度島津に一味し馳集る士卒彼此三萬餘騎、薩州衆はいふに及ばず其餘は皆肥後・筑後・筑前の輩なり。是は一向筑紫廣門征伐の爲のみにあらず、高橋紹運が岩屋の城立花左近將監が立花の城をも此次に打崩し、又は事に依り、龍造寺の城をも攻むべしとの評議なりけり。斯くて島津の諸勢、七月六日悉く高良山の陣を打立ち、其内人數を差分け、秋月長門守と談じ、筑紫が端城朝日山一の岳一の瀬・鷹取等を押へさせ、其外の軍勢は段々備を定めて、筑紫の居城勝の尾・山浦を攻むべしと瓜生野口より取懸る。中にも伊集院肥前守・河上左京進・伏草を以て夜中より打出で、勝の尾の城の麓新町輒く焼拂ふ。夫より諸勢相續いて、廣門の居館を初め小路々々、其外所々の塹垣打崩し、殘る所なく放火し、手向ふ者は斬つて捨て、逃ぐる者は山林まで追討に討ち、砦の兩城朝日山・鷹取をも瞬目の中またなまに挫き、筑紫の親類左衛門尉晴門を始め、宗徒の者數百人討取り、降人以下悉く斬

筑紫廣門
島津に攻
められて
没落す

捨て散々に攻付けたり。薩摩勢にも河上左京、石橋の邊にて筑紫晴門と組んで刺違へて死す。其外數多の戦死なり。斯かりし程に、城主廣門は勝の尾の本城を引揚げて、降參の由懇望しければ、薩摩の軍將伊集院右衛門大夫忠棟、衆議を以て是を宥免し、同七月十日、勝尾下城を以て、小松山院主へ先づ下著、夫より筑後の大善寺に蟄居しけり。時に勝尾の城番には、肥後の小代伊勢守・大津山河内守罷り上りけり。當城は肥前に取りては東の端、筑前の境にして山の頂にあり。

或はいふ、廣門、此時戦ひ屈し城内へ引入り、秋月種實を頼み下城すとなり。

或はいふ、廣門、此時勝尾の砦一の岳の城へ落ちしが、爰をも攻落され自害せむとしけるを、薩摩衆生捕りたりとも。非なり。

或はいふ、一の岳の城を、秋月種實人數五六百を以て攻落す。其時、勝尾の本城も落去すと。

或はいふ、一の瀬の城をも、秋月、策を以て攻落すと。此兩城、筑前の内にて何れも山上なり。

岩屋の城没落高橋紹運戦死の事

既に鳥津の諸勢、七月十日、筑紫が勝尾の城を攻落し、扱此度、高橋入道と立花左近將監をも攻干すべしと、同十三日、薩摩衆肥後衆筑後衆悉く筑前へ討入り、先づ高橋紹運のありける岩屋の城を攻めむと、同十四日、秋月勢を案内者として太宰府へ亂入し、安樂寺の社家町一字も残らず焼拂ひ、同十五日、鳥津・秋月、其外肥・筑の従兵都合五萬餘騎、岩屋の口々より押寄せたり。城主紹運は、元より待儲けたる軍なれば、大に士卒を勵まし、城の追手南の口を初め虚空藏の臺百貫島口・二條口并に秋月陣の手當等、夫々に人數を配つて持口を差固む。斯くて寄手の諸軍、弓・鐵炮を打違へ攻登り追下され、雙方の討死・手負數を知らず。合戦數度に及びしかども、當城は究竟の要害といひ、城主は無雙の大將といひ、城中僅の小勢にて五萬の寄手に對し、更に勝劣なかりけり。同廿日、鳥津勢一同に相圖を定め出丸の際に押寄せたり。城兵敢て事ともせず、大鐵炮を放つて打殺す事、將基倒に異ならず。寄手叶

鳥津勢高橋紹運の居城を攻む

合戦

はずして引退く。然るに此時、龍造寺政家・鍋島信生は、神崎波古川の陣を拂つて、佐嘉へ馬を返され、陣代として龍造寺家晴・江上家種、其外佐嘉衆、岩屋に到つて在陣し、其代として後藤家信・田尻鑑種・西牟田家親、同廿三日に岩屋へ著陣あり。同廿五日、後藤・田尻の兩勢を以て、岩屋西の口へ押詰め、鐵炮を以て終日城兵を射付けたり。同廿六日、薩摩・大隅・日向・筑後・肥前の寄手、雲霞の如く一同に押寄せ、口より攻入らむとす。其中に肥前衆に後藤家信・田尻鑑種さきかげを以て、岩屋里城を攻めて相戦ふ。時に城内より大鐵炮を打懸くること雷の如くにて、兩手の士卒眼闇み心茫然となり、戦死手負若干なり。されども此方よりも大鐵炮を累つらべ掛け、終に里城を討崩して切登る。爰に於ても亦、田尻・後藤が手の者數多疵を蒙りけり。時に薩摩の軍將伊集院忠棟、其軍功を賞感して、彼の兩手の輩は則ち軍を甘くつろぐべき由、指圖を以て里城の番を勤む。又爰に薩州の伊集院肥前守・新納武藏守・北郷讚岐守は、十文字の旗を山風に靡かし虚空藏の臺を攻む。時に城兵矢山中務少輔成富左衛門尉を初め宗徒の輩集まりて散々に相戦ふ。此時薩摩勢數百騎討死す。斯く

岩屋の城没落高橋紹運戦死の事

三八

て廿六日の合戦半なりけるに、寄手の一將島津圖書頭忠長が方より、城主紹運入道へ、新納藏人を以て申送りけるは、希くは忽ち心底を翻され、薩州に従ひ給へ。其儀に於ては本領安堵相違あるまじき由申し遣しけり。紹運の家人麻生外記、主に代りて是を聞き、降参の事申々思寄らざる由返答す。斯くて同じく廿七日の曙、薩摩・肥後の軍兵、其外の諸勢、岩屋追手の口より切懸り、火を出し合戦す。城中の者共、萬死に入りて一生を顧みず防ぎ戦ひしかども、寄手の勢に比ぶれば九牛が一毛にて、竟に追手を攻破られ、討たる者數百人なり。斯かりし程に百貫島の持口をも、伊集院肥前守に打破られ、三原和泉入道紹真筑後三原の先主なり討死す。寄手彌、勝に乗り、新納・北郷・伊勢・樺山、士卒を進めて虚空藏の臺に攻登れば、新納藏人・猿兵部少輔は、城の後口に廻つて前後より攻めたりけり。爰に於て終に城兵力盡き、或は討たれ或は敗散して、今は早残る者六十餘人、詰の丸を守りて相戦ふ。時に大將紹運も、士卒と共に防戦して疵二三箇所蒙りしを、日向の侍馳合せ、紹運を討つて首を取る。是を見て残る者共、群る敵に駈入りて、引組み刺違ふるもあり。又腹搔き

高橋紹運
戦死

破りて臥すもあり。一人も残らずなりにけり。時に城中の討死、紹運を初めて矢山中務少輔以下都合七百餘人となり。爰に此時、あはれなる事こそあれ。矢山が子生年十三になりけるが、父中務が討たれしを見て、限なく歎き續いて討死すべしとて、泣くく小太刀を振り切つて廻りしを、寄手の諸將是を見て、あはれなる事に思ひしかば、其兒射殺すな。討取るなど下知しけれども、數萬人の中なりしかば、雨の降る如く放つ矢に、彼の兒、胸板を射抜かれうつぶしに臥し、朱になりてぞ死しけり。此矢山は高橋家の老臣なり。斯くて七月廿七日の暮程、當城落去しければ、則ち紹運の首を掛け、薩摩衆計りにて凱歌を執行ふ。此時、紹運の女中は薩摩勢の中よりぞ生捕りける。紹運行年四十九なり。

或はいふ、紹運、岩屋の城中に於て自害す。辭世の一首に、

屍こそ岩屋の苔に埋むとも雲井の空に名は留むべき

又いふ、紹雲の實子立花左近將監より、今度岩屋城攻の以前、家人十時攝津守を以て紹運へ申遣しけるは、近日島津が大軍、其元へ取懸るの由相聞え候。然るに

岩屋の城没落高橋紹運戦死の事

岩屋はさしたる地利にも候はず、其上分内狭く、大勢を防ぐに便りなく候間、早
早我が立花の城へ來られ候へ。父子一所に楯籠り、兩家の人數を以て薩摩勢を
防いで、一戰の中に追散らし申すべしと申遣しける時に、紹運、十時に對面し返
答ありけるは、抑、愚老、數度の軍功他に異なりと、頃日宗麟公の御吹擧に依り
て、既に關白殿の御家人となり、九州守護の爲め、當城を直に下し預りぬ。然る
に何ぞや、唯今事の急なるに臨んで、御朱印の地を捨て御邊が城へ逃〔入カ〕〔きカ〕來るべし。
唯當城を枕にして清く討死するより外、別に仔細なし。然れば最早生前の對面
は叶ひ難し。必ず來世の再會を期するなりとぞ申し遣しける。左近將監、此返
答を聞いて涙に咽びけるとぞ。

或はいふ、岩屋城攻以前、薩州より島津義久、莊嚴寺の住僧を以て紹運を様々に
賺し、味方に語らひしかども、紹運敢て承引せず、却つて島津を恥しめ、終に大敵
を引受け潔く死すとなり。

一、紹運の子高橋彌七郎統増は、此時、寶滿の城を守りてありしに、島津衆より色々

内略を以て方便りし程に、家人共が不覺にて、易々と方便かられ、八月五日、統
増、寶滿を下城し、則ち島津衆へ當城を引渡して、其身は主從十餘人、阿容おめ々々と
降人となりて出でけるこそ口惜しけれ。斯かりし間、島津衆、是を虜にし肥後國
へ差送り、吉松といふ所へ稠しく番を附けて置きけり。扱又薩摩衆、岩屋落城の
時、虜とらへたる紹運の妻女并に娘は北の關へ遣し、是にも番を附けて守らせけり。
妻室は頓て様を變へ宗蓮尼といひけり。

一、斯くて島津の諸軍、宰府に皆在陣し、左近將監統虎が立花の城を攻めむと議し
けれども、當城は無雙の地利にして、輒たやすくは攻寄り難く、其上、毛利輝元より立花
加勢として、大軍押渡るなど様々風聞ありしに依りて、兎角に延引しけり。然る
半ばに、龍造寺より上方へ上せける使僧西岳坊賢也、江上太郎兵衛入道の事なり。近日下著し、龍
造寺立花が方へ、關白殿の御書を見す。其文に曰く、立花事、島津と合戰の用意
する由、神妙の至なり。暫く城を持堪ふべし。不日に關白御馬を出され、島津一
家悉く首を刎ねらるべしと、又龍造寺事、島津と手切致し、立花と和睦然るべし

龍造寺の
使僧下著
秀吉の命
を傳ふ

と仰せ給はる。斯かりし程に、立花大に機を得、彌、堅固に籠城し、扱龍造寺より島津へ加勢として、江上家種・後藤家信・田尻鑑種・西牟田家親・高良山の座主麟圭・同良也、其勢五千にて宰府に在陣しけるも、座主・西牟田・田尻計りを、荒平^{安樂}の城に残し置き、江上と後藤は、八月廿日肥前へ打歸りけり。然る處に、豊後に在陣したる島津家久が方より宰府の薩摩陣へ飛脚を立て、豊後の軍、難儀に見え、其上、關白殿下の命に依りて、四國の長曾我部、大友加勢として近々渡海するの由、風聞すといひ遣しける間、島津忠長・伊集院忠棟を初め宰府在陣の島津勢、さらば先づ立花を差置き、豊後へ打越え、家久に力を副へむと評定を決し、寶滿の城へは秋月長門守種實を入置き、若杉・高鳥井の城をば、星野中務大輔鎮種・同弟民部大輔親種を以て相守らせ、岩屋・勝尾其外の城々へも、夫々に人數を入置き、立花を押へて同月廿四日、薩摩諸勢、悉く太宰府の陣を拂つて、豊後の國へぞ赴きける。

高鳥井の城落去星野兄弟討死の事

今度島津方にて、筑前若杉の高鳥井の城を守りたる星野兄弟は、元來筑後生葉の妙見の城主星野筑後守親忠が子供なり。父親忠以來島津に隨ひ、去る年^{天正}十二の冬より兄弟ともに、當城に移され居住しけり。然るに今度薩摩衆、宰府を立て歸りし後には、必定立花の城より敵勢取懸るべしと思ひしかば、城中の女童に、宗徒の手の者百餘人を差副へ、筑後の本領へ送り遣し、扱高鳥井の城中には、鎮種兄弟并に家人増田・井上以下三百餘騎にて楯籠りけり。斯くて立花へは、中國より毛利衆、加勢として雲霞の如く渡海し、薩摩勢の退口にも附慕ひ、又高鳥井へも取懸らむとす。星野兄弟、是を聞きて元より期せし事なれば、必死に思ひ定め、城中三百餘人の者共に下知していひけるは、味方に百倍の大敵なれば、千に一つも勝つべき軍にあらず。唯、薩州より給はりたる此城に於て、討死すること本望なれ。見苦しき物共置くべからずと、城中の雜具等悉く焼捨てさせ、寄する敵を待懸けり。斯くて廿四

立花勢星野が高鳥井城を攻む

日の夜すがら城中を取仕舞ひしに、翌くれば八月廿五日の早旦、立花勢に中國衆加はりて凡そ一萬七八千と見え、高鳥井へ取懸け犇々と東西の柵を打破り、早本城へ攻め近づく。星野兄弟、采配を採りて下知をなし、城兵僅に三百餘人、三方の門を押開き一同に切つて出で、大將の鎮種必死に定めし上は、士卒争でか猶豫すべき。大勢の敵中に切入りて、皆死狂と見えしかば、寄手の軍兵二百餘人、目の前に切臥せらる。立花左近將監、此體を見て小敵とて侮るな。萬死に定めし者共ぞ。後口一方を明けて落ちば落せと下知しければ、寄手則ち後口の方を開きたり。されども城兵一人も落散らず、巳午兩刻の間に三百餘人、一人も残らず切死す。斯かりし程に、城主鎮種は舍弟民部大輔親種・大聖寺の法印筑後の僧を初め、家人増田・井上井手以上六人、一同に腹搔切り同じ枕にぞ臥しにける。斯くて立花は、高鳥井を攻落し、星野兄弟を討取り、勝鬨をあげ居城へ歸陣し、早速首註文を以て、大坂に於て關白殿下へ此由注進申し、其後、又岩屋の城へも人數を差向け、薩摩よりの城番を追落しけり。此時、關白殿下より左近將監へ給はる書に云く、

星野兄弟
戦死

去廿七日、對安國寺・黒田・宮本書狀并首註文、今日加披見候。今度於其表、高鳥井相働候處、御方城二三ヶ所手脆相果候條、其方構之儀無心元被思召、輝元・元春・隆景、其外人數差遣候處、立花城無別條相抱候刻、對殿下無比類思召候處、去廿四日朝、敵引退候刻、足輕相附人數餘多討捕手柄之上、重而高鳥井東西攻破、城主星野中務大輔・同民部少輔を初、其外不殘數百人討捕首註文到來、粉骨之段中不及申候。此以後、聊卒爾之働可爲無用候。人數追々差下候條、輝元・元春・隆景兩三人一左右次第、殿下被出馬、九州逆徒可被刎首候。得其意尤に候。然者爲褒美、新地一廉可被仰付候條、突槍高名仕忠節之輩可令支配旨、彌勇候様可申觸候。委細右兩三人可申候也。

九月十日

御朱印

立花左近將監殿

一、又星野兄弟討死の由、薩摩へ聞え星野が子長虎丸へ、島津義久よりの感狀に云く、

於筑州若松鎮胤兄弟被逐戰死事、連々忠勤之鬱憤異他畢。至長虎丸向後倍、可屬感慮之旨、聊不可有踰易者也。

天正十四年
菊月廿一日

義久判

星野殿

筑紫廣門本領へ歸入る事

爰に筑紫上野介廣門は、去る七月居城勝尾の要害を島津勢に攻められ、竟に下城降參の身となり、頃日は筑後の大善寺に虜とらはれの如くにて、番を附けられ居たりしを、譜代の家人等島・小川・立石・黒岩以下心を合せ是を盗出しければ、廣門悦び則ち本領筑前の五ヶ山へ忍入り、猶ほ家人等を相催し、既に其勢一千餘騎になりて、舊地の内一の岳の城に、薩州の侍鎌田出雲守・北郷讚岐守が在番せしを追出し、則ち入替る。扱龍造寺政家の未だ島津へ一味の體にて、安樂平の城に番人として高良山の座主武邊良也を入置かれしを攻む。良也叶ひ難く思ひしかば、早速肥前へ加勢を乞ひ

筑紫廣門
本領に歸
る

けれども、事の延引に良也堪へず下城しけり。斯かりし間、筑紫衆則ち入替りぬ。然る處に龍造寺より小田常陸介増光・副島長門入道放牛を差向けられ、筑紫衆を追出さる。此後は田尻鑑種・西牟田家親・高良山の座主麟圭良也の父。三人より各、名代を以て當城を相守り、夫よりは小田増光一人にて在番しけり。

龍造寺島津に到り手切の事

同天正十四年九月上旬、龍造寺政家、島津へ手切の使として、田原大隅入道一運を薩州へ差越され、今度田原一運、大事の使として一人薩摩へ赴く由、北原作介聞付け、急ぎ本庄の船場果さむと談合す。兩人、早其色を見取り酒に酔臥し、打解けたる體に見せ、油断せる間に、忍び出で山中に隠れて、後に佐嘉へ歸る。政家、已に島津と義絶せられ、

龍造寺島
津と義絶

其色立のため同九月十一日、鍋島信生と同前に其勢二萬餘騎、先づ筑前へ打入られ、島津一味の三池河内守鎮實が領知へ相働かれ、村里悉く放火あり。鎮實居城計りになりしかども、此時鎮實は、島津家久に屬して日向表に在陣せしかば、留守の家人等一人も出合はず。茲に因つて政家・信生則ち三池より瀬高へ陣を移され、同

筑紫廣門本領へ歸入る事

龍造寺島津に到り手切の事

三五

十三日より肥後へ打入れ、土肥出雲守以下歴々相従ひ、肥猪洞間野へ發向、大田黒まで相働かる。然るに肥後衆の内、相良・甲斐・伯耆・阿蘇を初め、隈本・木山の百姓原まで人質を出して降参しければ、政家・信生頓て肥後より引返され、筑前へ打入れられ秋月種實の領所々へ手仕あり、岩屋の城邊相働かれ、先づ佐嘉へ歸陣せられけり。此事、小早川隆景より關白殿下へ注進ありしかば、早速政家・信生へ同前に書を給はる。其文に云く、

今度豊後島津令亂入由候處、殿下爲〔御脱カ〕忠節色立、肥後國へ打入所々放火之由、小早川右衛門佐方々申越候。時分柄被見計忠節之段、御祝著被思召候。島津、國に北入候共、春は被出御馬島津可被刎首候。被得其意諸事無越度様働分別、此節御褒美面目を持候様、一廉可被仰付候。其段下々申觸、可成勇事儀尤候也。

十月四日

御朱印

龍造寺民部大輔殿

追而其方事、當春言上之首尾無相違忠節之段、祝著被思召候。以上。同信生への御書に云く、

今度豊後島津令亂入由候處、殿下爲御忠節色立、肥後國に打入所々放火之由、小早川左衛門佐方々申越候。時分柄被見計忠節之段、不斜御祝著被思召候。島津、國に北入候共、春は被出御馬島津可被刎首候條、被得其意諸事無越度様働分別、此節御褒美之段面目有之様、一廉可被仰付候。其段申觸下々可成勇事尤候也。

十月四日

御朱印

鍋島飛驒守どのへ

一、同十月、關白殿下、龍造寺の質人を召すに依りて、政家よりは母公宗閻尼を大坂に到り差上せらる。信生よりは猶子鍋島平五郎茂里前名左衛門大夫家俊といふを、小早川隆景まで差出さる。仍りて隆景、茂里を長府の潮音院に之を置かる。時に石井三右衛門、茂里に従ひ彼の寺にあり。又龍造寺の一族江上家種・後藤家信・龍造寺長信、

龍造寺島津に到り手切の事

同信周・同家儼・同家晴よりも質人各、出さる。黒田勘解由孝高の預なり。

一、同十一月、島津勢、豊後に於て大友方并關白殿より加勢の輩と大に打戦ひ、所々に在陣す。

關白秀吉公島津北條御征伐の事

關白秀吉
島津征伐
の爲出陣

天正十五年丁亥正月、關白殿、彌、島津義久一家御退治の爲め、九州御下向あるべきに決定しければ、同じき二日、龍造寺政家・鍋島信生、其勢二萬を引具せられ筑後國に打入られ、島津方の蒲池兵庫頭鎮運〔連カ〕が山下の城へ取懸けらる。時に國の案内者に依りて、田尻鑑種先陣に討つて所々へ働き、村里民屋を焼拂ふ。されども城中堅固に依りて先づ歸陣せらる。

一、同正月廿五日、關白殿の御先手大和大納言秀長卿、其勢七萬餘騎、京都を進發せらる。

一、同三月朔日、關白殿御出京、同廿五日、赤間ヶ關に御著。

一、同四月、豊前の國の島津方長野三郎左衛門鎮展・城井常陸介鎮房・高橋九郎元種降參。

一、筑前國の島津方秋月長門守種實降參。

一、筑後國の島津方蒲池・問注所・黒木降參。

一、鍋島信生、關白殿の御迎として先達上洛あり。御供にて下向、御先に佐嘉へ著かれ、政家と同じく同四月十一日、高良山に於て、關白殿の御本陣へ參陣せられ、薩州への先手を申乞はれ、立花左近將監と俱に御先手御免。

一、政家・信生其勢三萬七千餘騎、關白殿の御先手として薩州へ向はれ、先づ肥後へ打入らる。爰に於て島津より差置きたる新納武藏守忠元、其外島津方の地侍小代伊勢守親傳・城十郎太郎・大津山河内守以下城を去つて降參。

一、同五月四日、關白殿總勢十萬餘騎、薩州に到り御打入、仙臺河へ御陣、島津義久兄弟并に家臣等、悉く懇望を以て降參。

一、同七月廿一日、關白殿大坂に到り御歸城。

一、天正十六年戊子、肥後の地侍一揆を起す。程なく是を誅伐。太守佐々陸奥守成政、仕置悪しきに依りて召登せられ、尼ヶ崎に於て切腹。

一、天正十七年己丑、鍋島信生在京、正月七日從五位下に任せられ加賀守直茂に改められ、羽柴豊臣の姓を給はる。

一、天正十八年庚寅、直茂在京。三月七日、國事を勤むべき旨台命あり。肥前國三十五萬七千三十石の御朱印頂戴。

一、今年關白殿下、小田原の城主北條氏政御征伐、二月上旬、御先手として徳川殿其外出陣せらる。

一、同二月上旬、鍋島直茂、同簾中在京の爲め上洛せらる。同日、尾州清洲の城番として佐嘉より田尻鑑種・土肥出雲守・向孫三郎西平田新介名代なり。上下百人、直茂の供立に加はりて發足、同十一日、赤間ヶ關より出船、海上九日にして大坂へ著、日數六日大坂逗留、廿七日京都へ著く。

秀吉小田原を攻む

天下御一統の事

一、同三月朔日、關白殿關東へ御出馬。

一、鍋島直茂、關白殿へ御見舞として小田原下向。七月五日に小田原著陣。當日北條氏直以下降參に依りて、能き時分加賀守參陣の由、關白殿甚だ御大悅なり。同十一日、北條一家御仕置相澄み、關八州皆平均。關白殿御歸洛。九月朔日、京著。天下一統す。

北肥戦誌 卷之三十 大尾

奥書

此書は肥前の古老舊記實蹟を參考して編集する所にして、編中間、口傳秘説多し。他國は素より、自國の内
にても所持の人少し。故に予若年より是を仰望すれども不得見、老期に及で偶々馬渡氏の懇情に依て手に
入、一覽して返さんことを約すといへども、餘りに残り多く、竊に寫し取んことを思立、臆眼濫筆七十
六歳の精力を盡して、四十餘日にして寫功終、又錯誤脱字本書のまゝ也。素より戸外不出他借を不_レ容、
箱中に秘して閑寂の樂みとす。國學に志あらん者、必可_レ讀の書也。爰を以て家に傳へて爲_二重寶_一と爲。

1771

明和八年辛卯六月初日

養軒信翁恩一均

花押

追記

此書は馬渡新七入道加志老の編集也。愚老日者其家藏の舊記草稿を涉獵するに、反故の裏に單記あり、
其言に云、此書を編集する志は、凡九州の事を記す書不_レ少といへども、或は虚説を附會して實事を誤り、
或は諸士の勳功を洩して顯さず、此故に今諸家の證を求め、九州を巡て實蹟を尋、就中諸國の故事傳記
を考て虚實を正し、凡二十餘年にして全書成ぬ。梓に彫て天下に行はんことを欲するの處に、太守宗茂
公御覽有て、此書は世間に既しむる物に非ず、當家の秘書也。即みたりに流布せしむべからず、草稿あらば
燒捨て、本書は文庫に納め置べしと嚴命ありと云々。愚老按するに、嚴命如此といへども、古老大家に

奥書

三六七

は竊に書寫して藏せる人も有となん。其表題一ならず、肥陽軍鑑、九州軍談、九州諸家軍記、肥陽治亂記、或は鎮西軍争要略、或は覺書なんと、是文庫の本と同じ事を憚りて題號を替たるもの歟。然は愈、此書實なき者に見すべからざる也。安永六年酉七月日謹記。

恩田信翁

大正七年四月八日印刷
大正七年四月十一日發行

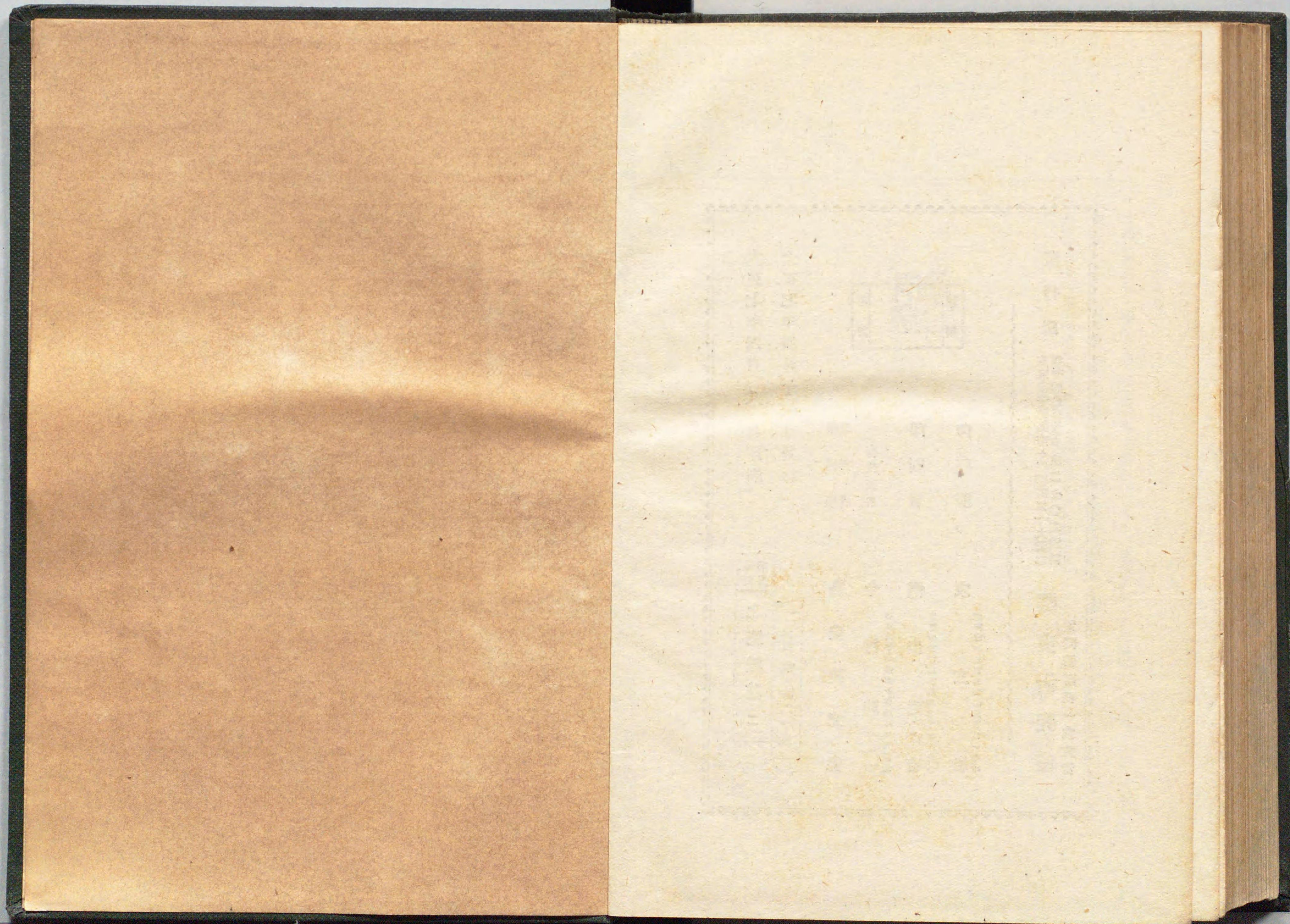
不許複製

編輯者兼
右代表者
今村勝一
國史研究會
東京市牛込區市ヶ谷柳町二九番地

印刷者
榎山定吉
友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所
東京市牛込區市ヶ谷柳町二十九番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
國史研究會
電話番町四一六六番

國史叢書
北肥戰誌二
定價金一圓二十錢



SAN-AISHA SHOTEN

電話神田二九七五番

三愛社書店

